

流行病學ヨリ觀タル猩紅熱

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30999

流行病學ヨリ觀タル猩紅熱

(大連療病院長豊田博士指導)

黑 井 忠 一
森 脇 襄 治

目次

緒言

第一章 猩紅熱ノ歴史の觀察

第一節 歐洲ニ於ケル本病ノ起原及流行

第二節 支那ニ於ケル本病ノ起原及流行

第三節 滿洲ニ於ケル本病ノ起原及流行

第四節 日本内地ニ於ケル本病ノ起原及流行

第五節 北米其他ニ於ケル本病ノ起原及流行

第六節 猩紅熱流行ノ歴史の週期

第二章 猩紅熱ノ地理的觀察(分布)

第一節 届出制度ノ有無ヨリ觀タル各國ニ於ケル本病ノ濃度

一、本病ガ法定傳染病トナレル國名及法定制度發布ノ年度

二、本病届出ノ義務制度ナキ國名

第二節 世界交通路ヨリ觀タル本病

第三節 世界地方別ニ據ル本病ノ濃度及性質

原 著 黒井・森脇ニ流行病ヨリ觀タル猩紅熱

一、大洲別ニ據ル本病ノ濃度及性質

二、一萬以上ノ本病發生ヲ見ル國名

第三章 緯度ヨリ觀タル本病ノ濃度及性質

第一節 氣象學ヨリ觀タル猩紅熱ノ消長及濃度

第二節 雨量ヨリ觀タル世界各地方ノ猩紅熱

第三節 猩紅熱ノ季節的消長

一、滿洲及東京ニ於ケル年度別、月別患者數

二、大正十四年度ニ於ケル各國患者數ト季節

三、各國ニ於ケル本患者發生數ノ最大ナル季節

四、猩紅熱患者ト累年ノ季節的消長

第四節 大連ニ於ケル本病流行ト氣象トノ關係

一、風速ト本病

二、濕度ト本病

三、氣溫ト本病

第四章 人種性及年齡別ト猩紅熱權熱

第一節 人種別ニ據ル本病ノ權熱

原著 黒井・森脇ニ流行病ヨリ觀タル猩紅熱

第二章 性別ニ據ル本病ノ罹患率及死亡率

- 一、各地ニ於ケル男女別ニ據ル患者數
- 二、大連療病院患者三千例ノ男女別ニ據ル罹患率及死亡率
- 三、當院患者ノ人種別、性別ニ據ル罹患率及死亡率

第三章 年齡別ニ據ル本病ノ罹患率及死亡率

- 一、倫敦、東京及大連ニ於ケル年齡別ニ據ル罹患率
- 二、大連療病院三千例ノ各年齡ニ於ケル患者及死亡
- 三、本病三千例ノ人種別及各年齡別ニ於ケル罹患率及死亡

第五章 各國ニ於ケル猩紅熱罹患率及死亡率

- 第一節 對人口一萬罹患率
 - 一、各國各地ニ於ケル罹患率
 - 二、世界地方別ニ據ル罹患率
 - 三、緯度及等溫線ニ據ル罹患率
- 第二節 對人口十萬死亡率
 - 一、各國ニ於ケル死亡率
 - 二、各國都市ニ於ケル死亡率
 - 三、世界地方別ニ據ル死亡率
- 第四節 緯度及等溫線度ニ據ル死亡率
- 第三節 對患者百人死亡率
 - 一、各國ニ於ケル累年死亡率
 - 二、各國各都市ニ於ケル死亡率
 - 三、世界地方別ニ據ル死亡率
- 四、緯度及等溫線度ニ據ル死亡率

第六章 日本内地、臺灣及朝鮮ニ於ケル猩紅熱

- 第一節 日本内地ニ於ケル猩紅熱
 - 一、日本内地八十三都市
 - 二、臺灣ニ於ケル猩紅熱
- 第二節 朝鮮ニ於ケル猩紅熱
 - 一、朝鮮全道
 - 二、朝鮮十二都市

第七章 滿洲ニ於ケル猩紅熱

- 第一節 滿洲傳染病ニ於ケル猩紅熱ノ位置
- 第二節 全滿洲最近六ケ年間ノ罹患率及死亡率
 - 一、全滿日本人
 - 二、全滿支那人
- 第三節 關東洲及滿鐵沿線ニ於ケル罹患率及死亡率ノ比較
 - 一、關東洲
 - 二、滿鐵沿線
- 第四節 滿洲各市ニ於ケル猩紅熱
- 第八章 大連療病院ニ於ケル猩紅熱
 - 第一節 各年度ニ於ケル患者數及死亡率
 - 第二節 猩紅熱罹患ト體質、職業及社會的地位
 - 第三節 猩紅熱ノ病歴
 - 第四節 家族感染
 - 一、一家二名以上ノ患者ヲ出セル家族數及患者數
 - 二、一家二名以上死亡者ヲ出セル家族數

三、家族感染ニ於ケル發病關係調査

- (イ)、第一患者發生後第二患者發病迄ノ日數
- (ロ)、第一患者入院後第二患者發病迄ノ日數
- (ハ)、リターンケース(ハイムケールファル)

第五節 合併及症狀ノ統計的觀察

第六節 患者退院ノ標準

第九章 今次猩紅熱大流行ノ地方的消長

第一節 滿洲ニ於ケル今次大流行ノ消長

第二節 歐洲ニ於ケル最近流行ノ消長

第三節 北米其他ニ於ケル本病流行ノ消長

第四節 日本内地ニ於ケル大正十四年度本病ノ消長

緒 言

(1721)

猩紅熱研究ハ軌近著シキ進步ヲ見各國競ヒテ其業績ノ發表アルモ未ダ其病原ニ關スル斷定ヲ見ズ、チ、クリスチナ⁽¹⁾、カロニア、シンドニー⁽²⁾、氏等伊太利派ノ主張スル濾過性病原體(球菌)ニ關シテハ既ニ大正十四年森脇、及昭和二年戸田氏等ノ研究ハ歐洲ニ於ケルビュルゲルス⁽³⁾、マイヤー⁽⁴⁾、高木⁽⁵⁾氏等ノ結果ト同シクカロニヤ小體說ヲ否定スルニ到レリ、而シテチック⁽⁶⁾、及ドシエー⁽⁷⁾氏等米國派ノ主張スル連鎖狀球菌毒素說ニ關スル余等ノ研究業績⁽⁸⁾ハ曩ニ滿洲醫學會雜誌及其他ニ於テ報告セル如クニシテ本說ヲ以テ比較的説明ニ便ナル多數ノ點ヲ發見スルニ至リタルモ未ダ猩紅熱連鎖狀球菌ヲ免疫學的及生物學的ニ他ノ溶血性連鎖狀球菌(例之、丹毒菌、化膿菌或ハ健康者咽頭ニ於ケル定型的溶連菌)等ニ對シ一種特異ノ菌トシテ之ヲ認ムルノ域ニ達セズ、尙軌近臨牀方面ヨリ之ヲ觀察シ病原的多原說ヲ主張スルフアンコニー⁽⁹⁾氏ノ如キアリ、未ダ本病ノ病原斷定ニハ尙幾多ノ經緯アルヲ免レズ、茲ニ於テ本病ヲ

第十章 「デックテスト」及豫防接種ト本病ノ罹患

第十一章 流行病學ヨリ觀タル猩紅熱ト丹毒トノ關係

第一節 滿洲ニ於ケル六ケ年間ノ丹毒及猩紅熱罹患者數

患者數

第二節 猩紅熱及丹毒患者ノ日支人別

第三節 猩紅熱及丹毒患者ノ性別

第四節 猩紅熱及丹毒患者ノ年齡別

第五節 猩紅熱及丹毒患者ノ季節的消長

總 括

文 獻

流行病學のニ觀察シ洋ノ東西ニ於ケル其流行ノ起原及狀態、本病ノ地理的分布、人種的又ハ國別ニ據ル罹患率、死亡率ノ比較、各地方ニ於ケル流行ノ季節的消長、緯度、等温線其他氣象學的ノ影響等ヲ調査シ實驗室ニ於ケル連鎖狀球菌ノ抵抗及本病ト丹毒流行トノ關係等ヲ比較觀察セリ。

是素ヨリ本病ノ病原断定ニ何等直接ノ關係ナキハ言ヲ俟タズト雖モ病原研究ハ獨リ實驗室或ハ臨牀的ニノミ制限ス可キニ非ラズ、之等研究ノ結果ハ必ズヤ亦流行病學のニ何等カノ一致ヲ見ザル可カラズ、然ルニ吾人ハ各々一地方ニ於テ本病ノ診療及豫防法ヲ考究シ其地方ノ一流行狀態ヲ知悉スルニ止マリ廣ク各國ニ於ケル本病ノ狀況ニ暗シ、而シテ本病ノ流行及地理的分布等ニ關シテハ從來一貫セル記載ニ乏シク殊ニ病原問題ニ比較的關係アル本病ノ紀元及流行史ニ就キテハ東西共ニ頗ル鮮明ヲ缺グ、只茲ニハ最近國際聯盟ノ成立ト共ニ各國ヨリ蒐集セラレタル報告及同衛生局發刊物ノ紙上ニ現ハレタル數字ヨリ各地ノ對人口罹患率及死亡率ヲ算出シ其地方ノ緯度及等温線度或ハ地方別ニ配列シ本病ノ分布及濃度等ヲ比較シ且滿洲ノ流行狀況及當院ノ本病ニ關スル流行病學の一面ヲ加ヘテ茲ニ之ヲ記載セリ、從ツテ諸種ノ點ニ於テ隔靴搔痒ノ感尠ナカラズト雖モ從來本邦ニ於テ此種ノ記載ヲ見ザルヲ以テ茲ニ其調査ノ結果ヲ報告シ本病研究ノ資ニ供セントス。

第一章 猩紅熱ノ歷史的觀察

歐洲ニ於ケル本病ノ歷史殊ニ起原ニ關シテハ一八一〇年獨ノベネチクト氏ノ著アルモ余等ハ未ダ此書ニ接セズ、又本病ノ歷史殊ニ最近ノ流行史ニ關シテハウイーンノロエツセル氏ガ目下著述中ニツキ詳細ハ氏ノ單行本ノ發刊ヲ俟ツニ若カズ、余等ハ國際聯盟衛生局月報殊ニ英國委員ノ發表⁽¹⁾及其他二—三ノ歷史的記述ヲ基礎トシテ僅ニ歐洲ニ於ケル本病ノ流行狀態ヲ知レルノミ。又支那ニ於ケル本病ノ緣起ハ曩ニ當地滿鐵同壽醫院楊鳳鳴氏ニ其調査ヲ依頼シ既ニ同氏ノ名ニ據ツテ發表サレタル記載ニ基キ、又本邦ニ於ケル本病ニ關シテハ諸家ノ記錄ヲ參照シテ之ヲ納メタリ。

第一節 歐洲ニ於ケル本病ノ起原及流行

歐洲ニ於ケル猩紅熱ノ緣起ハ由來他ノ諸種傳染病ノ起原ト同シク之ヲ究ムルコト難シ、或ハヒボクラテス時代ニ遡リテ其緣起ヲ究メントシアゼンニ流行セル惡疫ハ本病ノ惡性型ナル可シトノ見解ヲ有セラル、⁽¹⁾但斯ル古事傳説ニ就テハ今日其考證ヲ得ル事難シ、本病ニ關スル比較的確實ナル記載ハ十六世紀ノ中葉ニシテネーブルスノインクラシアス⁽¹¹⁾ハ始メテ本病ヲ「ロッサニヤ」(Rossaria)ナル名ノ下ニ記載セリト云フ、一五四三年伊太利シシリ島ニ勃發セル傳染病ハ一般ニ本病ナリト信ゼラレ又ヘーゼル氏⁽¹²⁾⁽¹⁰⁾ノ醫學史ニ據レバ同氏ハ一五五〇年バレルムニ於ケル流行ハ本病ナリトノイングラシアスノ記事アルヲ認ムルモ今日比較の明瞭ナル徵證アルハ十七世紀ノ前半期フロシヤニ於ケル本病ノ流行ニシテドリング⁽¹⁰⁾、ゼンネルト⁽¹¹⁾兩氏或ハウインスレル、フェール氏⁽¹⁰⁾兩氏等ノ記錄ニ明ナリ、即ゼンネルト氏ハ一六二八年初メテ本病特異ノ發疹ヲ記載セリ、モスト氏⁽¹³⁾ハ十七世紀全般ニ於テ十五種ノ傳染病ヲ舉ゲタルモグリーンウッド氏⁽¹⁴⁾ハモスト氏ノ分類中ニハ假説アリ、同時代ニ於ケル猩紅熱ハ極メテ稀ナルヲ附言セリ、一般ニ當時ノ文獻ハ猩紅熱ノ臨牀的概念ノ未ダ限定セラレザル時代ニ屬シ時ニ麻疹、風疹、丹毒又ハ「ヂフテリー」等ヲモ本病中ニ混同サレシハ想像ニ難カラズ。

而シテ本病ガ他ノ疾患ヨリ明カニ獨立セラレシト見ル可キハ一六七六年英ノシデナム氏⁽¹⁵⁾ヲ以テ嚆矢トス、氏ハ本病ノ麻疹ト全然異ナル疾患ナルヲ記載セルモ咽頭症狀ノ危險性ニ就キテハ何等記スル處ナク本病ヲ以テ比較的善性ナリト思惟セシガ如シ、然ルニ英ノモルトン氏⁽¹⁰⁾ハシデナム氏ト同時代ニシテ且「アングーナ」ヲ特徴トシ時ニ惡性ヲ呈スル事アルヲ記スルモ本病ヲ尙融合性麻疹(Morbili Confluentes)トシテ取扱ヒタルハ注意ス可シ、シデナム氏以後英或ハ大陸ニ於テ本病ノ流行ヲ見タルモ其罹患率ハ自ラ差アリ、グリーンウッド氏ニ據レバ一七一六年及一七二二年ノ間ニ異常ノ傳播ヲ見タルモ其死亡率ハ比較的僅少ナリキト云フモ一七四〇年初メテ新英洲ニ於ケル本病ノ流行ハ其性質頓ニ惡化セリ、次デ一七五〇年ヨリ一七七〇年ニ至ル本病ノ性質ハ國ニ據リテ差アリト雖一般ニ其傳染力ハ漸ク猖獗

(1723)

ノ度ヲ加フルニ至レリ、即一七六二年瑞西ニ於テ、一七六四年獨ノハツレニ於テ又一七六二年コーベンハーゲンニ於テハ比較的善性ノ流行ヲ見タルモ又一方一七六二年佛ニ於テ又一七六九—一七七〇年ウエストファリアニ於テハ惡性ノ流行ヲ見タリ、十八世紀ノ末葉ニ於テハ益其惡性ノ度ヲ加ヘ一般ニ重大視サル、ニ至レリ、即チモスト氏ハ一七九九年ヨリ一八〇一年ニ於ケル本病ノ極メテ重症ナリシヲ説キ又ウイラン氏⁽¹⁰⁾ハ當時倫敦ニ於ケル本病ノ危險性ニ就テ痘瘡以上ニ恐ル可キヲ論ゼリ、一八〇二年アイルランドノ首府ダブリンニ於テモ極メテ惡性ノ流行ヲ見タルモ一八〇三年獨逸ニ於ケル流行ハ比較的善性ナリキ、即一時コノ時代ニアリテハ其傳染力ニ稍々沈滞ノ傾向アリタルモ一八二四年再ビ歐洲大陸ニ於テ惡性ノ流行ヲ見、一八三一年英國ヲ襲ヒ一八三四年再ビアイルランドヲ侵害セリ、茲ニ於テ一八三四年グレヴス⁽¹⁰⁾氏ハ致命症のノ本病ニ對シ無統一ノ處置ヲ採ル事ノ危險性ヲ警告シ又グリーンウッド氏ハ本病が一般的ニ蔓延スルニ從テ惡性ノ度ヲ加フルハ本病ノ特徴ナリトノ説ヲナスニ至レリ、以テ當時歐洲ヲ侵害セル本病流行ガ如何ニ頻發且惡性ナリシヤヲ想像シ得ベシ。

英國ニ於ケル本病ハ尙重症ヲ極メ一八七五年頃マデ同國ノ小兒死亡率中本病ガ其大部分ヲ占メシモ其後本病ノ性質ニ著シキ變化ヲ來シ頓ニ善性ニ轉換シ罹患率殊ニ死亡率ハ著シク減退セリ、即チ本病ノ斯クノ如ク惡性ヨリ善性ヘノ急激ナル轉換ハ「ヂフテリ」ノ場合ニ於ケル夫レニ比シ、本病病理ノ最近マデ未ダ十分ニ判明セザリシヲ以テ特ニ著明ノ感アリ、而シテ此急激ナル變化ハ本病ノ未ダ法定傳染病トナリシ以前ノ事ニ屬シ且一般ニ傳染病ヲ隔離病院ニ於テ處置セラル、以前ノ現象ナリシハ特ニ奇トス可シ。

上述ノ如キ罹患率ノ減退ハ其後尙死亡率ノ減退ニ比シ著明ノ減退ヲ見ズ、大戰後ハ一時寧ロ増加ノ傾向アリ、而シテ最近一九二四年及一九二五年ノ兩年度ニ於ケル歐洲ノ罹患率ヲ調査比較スルニ一九二五年度ニ於ケル本病ノ實數及罹患率ハ共ニ前年度ヨリ増加セルヲ見ル、殊ニ歐洲ノ北半ニ於テハ著シク増加シ反之南半ニ於テハ稍減少ヲ示セルコト後述ノ如シ。

第二節 支那ニ於ケル本病ノ起原及流行

支那ニ於ケル本病ノ緣起ニ關スル詳細ハ楊(鳳鳴)⁽¹⁶⁾氏發表ノ記載ニ讓リ茲ニハ只同氏ノ結論ヲ約録スルニ止ム、猩紅熱ノ名稱ハ漢醫之ヲ知ラズ症狀ヨリ之ヲ觀レバ「痧」ナルモノ最モ近キモ痧ノ名稱亦曖昧ニシテ一般發疹性疾患ノ總稱ト見ル可ク、ソノ傳染スルモノヲ疫痧ト稱ス、清初ノ名醫葉天士ノ醫案中ニ爛喉痧(ランホーサ)ナルモノアリ記スル處ノ諸症狀(傳染性全身發赤、咽頭炎、覆盆子舌、落屑、無疹性猩紅熱、經過長キ事等)及合併症(顎下及耳下腺炎、中耳及乳嘴突起炎)共ニ猩紅熱トシテ些ノ疑點ナシ、曹氏ノ說ニ據レバ葉天士以前ニハ所謂爛喉痧ナルモノナク雍正癸丑ノ年ヨリ初メテ之ヲ見ルト即チ支那ニ於テ一般疫痧ヨリ本病ヲ爛喉痧ノ名ノ下ニ獨立疾患トシテ認メラレタルハ今ヨリ約二百年前葉天士ヲ以テ嚆矢トシ爾來諸家ノ襍刻中ニ散見スルニ至ル、支那古代ニ於ケル醫學ハ比較的進歩セルニ拘ハラズ本病ガ古典ノ醫籍ニ現ハレズシテ外國トノ交通頻繁トナルニ從ヒ其記錄輩出シ而モ其時期ハ恰モ西洋ニ於テシデナム氏ニ據リ本病ノ獨立疾患トシテ認メラレタル十七世紀後半ヲ遅ル、コト正ニ數十年ナルヲ思ヘバ本病ハ支那固有ノ疾病ニ非ラズシテ外部ヨリ輸入セラレタルモノト推定スルヲ得ベシ、葉天士ハ吳ノ人、支那ニ於ケル本病ノ流行ハ南清ニ始マルト見ルヲ得可キ乎、既ニ十八世紀ニ於テ支那殊ニ上海方面ニ猖獗セシコトハ事實ナリトス、現時ノ支那ニ於ケル流行ハ獨リ南支那ニ止マラズ北京ニアリテモ年々本病ノ罹患者アリト云フ、但戶籍及届出不完全ノ爲正確ナル數字殊ニソノ對人口罹率ヲ得ルコト難シ、只北京方面ノ本病ガ古代ヨリ存在セシカ、南方ヨリ傳播セルカ或ハ北滿ヨリ蔓延セルカハ今日尙不明ナルモ滿洲ニ於ケル本病ガ日露戰役以後漸次濃厚トナレルニ徴シ恐ラク北京ノ本病ハ南清ヨリ蔓延セルニ非ラザルナキ乎、殊ニ侯甫ハ光緒戊子即約四十年前ニ於テハ累年上海ニ於テ大流行アリシヲ述ベジェフエリー及マツクスウエル兩氏ノ華人病證篇⁽¹⁷⁾(The diseases of China)ニモ本病ハ上海ニ頻發ストノ記載アリ、即本病ハ通商ノ要港上海ニ輸入セラレ先ヅ南清ニ、次デ各地ニ傳播セラレタリト見ルヲ當レリト言ハンカ。

以上ハ主トシテ楊(鳳鳴)氏ノ記載ニ基クモ本病ガ果シテ數百年前外國ヨリ始メテ輸入サレタルモノナリヤ或ハ古來

(1725)

痧又ハ疫痧トシテ麻疹其他一般發疹性疾患中ニ隱レ偶々葉天士ニ據リ獨立疾患トシテ認メラレタルモノナリヤハ尙明快ナル考證ヲ得ズ、殊ニ支那人文ノ開發ハ歐洲ノ夫ニ比シ遙ニ遠ク古ニ屬ス、富士川氏⁽¹⁸⁾ニ據レバ麻疹ノ名ハ明ノ龔信ノ古今醫鑑ニ始マルモ既ニ宋時代ニ於テ麻子、疹子、赤瘡子トシテ其存在ヲ認メラルト云フ。

第三節 滿洲ニ於ケル猩紅熱ノ起原及流行

滿洲ニ於ケル猩紅熱ノ起原ハ明ナラズ、支人ノ言ニ據レバ露國ノ滿洲移住前ニハ本病ノ存在ヲ聞カズト、明確ナル症例ノ現ハレタルハ日露戰爭後ニシテ明治四十二年即一九〇八年(十九年前)大連管内ニ於ケル一例ノ本症ヲ初發⁽¹⁰⁾トス、歐洲ニ於ケル本病ノ流行ハ既ニ上述ノ如シ、即滿洲ニ於ケル本病ハシベリア鐵道完成後露國ノ東漸ニ基因スルカ或ハ海路南ヨリ侵入セルカハ尙明ナラズ、爾來滿洲殊ニ大連ニ於ケル流行ハ初發後三ケ年ニシテ既ニ一〇一名ヲ算シ大正三、四年ノ交及大正六年ニ於テ惡性猩紅熱ノ流行アリ、殊ニ大正三—四年ノ交ニ於ケル五ケ月間ノ流行ハ當時大連人口日本人三萬八千ニ對シ一五四名ノ罹患及三五名ノ死亡者アリ實ニ稀ニ見ル惡性ト稱ス可ク對患者百人ノ死亡率ハ實ニ二四・〇%ニ達セリ、爾來漸次善性トナリ罹患率減退セルモ大正十四—十五年ニ於テ頓ニ大流行ヲ來シ兩年ニ於ケル大連日本人々口七萬九千人ニ對シ實ニ一〇三八例ノ本患者ヲ出シ死亡率一・〇%ニ達セリ、以上ハ大連ニ於ケル流行ノ概略ナルモ滿洲殊ニ滿鐵沿線ノ流行モ略其軌ヲ一ニス(滿洲ニ於ケル本症ノ詳細ハ後述ス)只滿洲ニ於ケル本病ハ殆ンド常ニ日本人ヲ襲ヒ支那人ノ罹患ハ隱蔽ヲ算入スルモ遙ニ少ナキハ事實ナリ。(但死亡率ハ日本人ノ夫ヨリ高シ)最近十五ケ年間ニ大連療病院ニ收容セル猩紅熱患者三〇〇〇例及旅順療病院及旅順醫院ニ收容セル八五三例ニ就キ其月別發生數ヲ曲線ヲ以テ示セバ第一圖曲線(後述)甲及乙ノ如シ。

第四節 本邦内地ニ於ケル猩紅熱ノ起原及流行

本邦猩紅熱緣起ニ關シテハ全ク不明ニシテ富士川氏日本醫學史ニ徵スルモ「本病ハ明治時代ニ至リテ流行ヲ見、古昔ノ醫書ニ見ル風癩疹、風疹、丹疹等ヲ以テ之ニ當ツル說アルモ從フ可カラズ」トアリ、我國ニ於ケル本病ハ明治二十年

ベルツ氏ノ診斷ニ始マルト云フ⁽¹⁹⁾日清戰後稍増加シ明治三十年即一八九七年初メテ法定傳染病ニ加ヘラル、本病ヲ最モ早期ニ法定傳染病ニ加ヘタルノールウェーノ一八六二年ニ遅ル、コト正ニ六十五年ナリ。

十九世紀末ニ於テハ僅ニ四〇—五〇例ニ過ギザリシモ年ト共ニ漸次其數ヲ増シ日露戰後殊ニ著明トナリ一九〇七年ハ既ニ五〇〇名ヲ突破シ一九〇九年以後ハ常ニ一〇〇〇名ヲ下ラズ、爾來急激ナル増減ナカリシニ大正十四年即一九一五年ニ至リ本邦人口五八四八二〇〇〇ニ對シ二一八七例ノ本患者ヲ出セリ。(罹患率對人口一萬〇三七)

之ヲ要スルニ本邦ニ於ケル本病ノ起原ニ關シテハ古來發疹性疾患ヨリ偶々ベルツ氏ニ據リ鑑別セラレタルヤ或ハ明治時代ニ外國ヨリ侵入セルモノナルヤ全ク判明セズト雖モ外國殊ニ支那ニ於ケル本病ノ本邦ニ對スル影響ハ看過ス可カラズ、日清殊ニ日露戰爭後特ニ著明ノ流行ヲ見タルハ此間ノ消息ヲ窺フニ足ル乎。

第五節 北米其他ニ於ケル猩紅熱ノ起原及流行

歐洲ニ次デ本病流行ノ旺ナルハ北亞米利加ナリ、殊ニカナダニ於テハ一八八三年以來本病ニ關スル確實ナル統計ヲ有シ又合衆國ニ於テハ一八九三年法定傳染病トシテ規定サレタルモ確實ナル統計ハ一九〇〇年以來トス、但北米ニ於ケル本病ノ起原ハ判明セズト雖モ本病ノ流行ハ歐洲及北米ニ限ラレタルガ如キ記載アルヲ以テ見レバ北米ニ於ケル本病ハ歐洲ニ次デ比較的早ク流行ヲ見タルモノ、如シ、侵入徑路亦明瞭ナラズト雖移民ト共ニ歐洲ヨリ傳播セルハ想像ニ難カラズ、一九二五年北米ニ於ケル罹患率ハ一萬人當約十七人ニシテ日本内地ノ約四倍半ニ相當ス。

本病ガ南米ニ現ハレタルハ一八三〇年以後、ポリネシアハ一八四八年初メテ本病ヲ見其後數年ニシテニュージーランド、タスマニーニ流行シ次デオーストラリアニ傳播セリ。

第六節 本病流行ノ歷史的週期

既ニ一八三〇年ケイガー氏⁽¹⁰⁾⁽²⁰⁾ノ「本病ガ時々廣汎ナル地域ニ流行シ時トシテ甚シキ悪性ヲ帶ブ」トノ記載アリ、本病流行ノ歷史ニ徴スルモ先ヅ諸所ニ散發シ次デ廣汎ナル悪性大流行トナリ何等特記スベキ原因ナクシテ比較的急激ニ

傳染力ヲ減ジ善性ニ轉換シ年ヲ經テ又大流行ヲ反覆スルノ事實ハ上述ノ如ク獨リ歐洲ノミナラズ各地ニ於テ其軌ヲ一ニス、而シテ本病ノ流行ハ地方的ニ又歴史のニ各差異アリ、從ツテ流行ニ一定ノ週期ヲ見出スコト頗ル困難ナルモ各地ノ流行ニ對シ各其週期ニ關スル記載ヲ摘録スレバ第一表ノ如シ。

第一表 猩紅熱流行ノ週期 (Periodicité)

國ノ地名	報告者	週期(年)
England	Cantacuzéne	4-7
London		7
Roumania		7-8
Sweden		4-8
Czechoslovakia		4-6
Dairen		(5?)

第二章 猩紅熱ノ地理的分布

國際聯盟ニ達スル世界各地ヨリノ報告ヲ綜合スルモ地球上ニ於ケル本病ノ地理的限界ヲ明確ニ決定スルハ頗ル困難ナリ。然レ其年々報告サル、各國各地ノ本患者數及其對人口罹患率及死亡率(詳細ハ後述ス)ヲ精査シ各地方ニ於ケル本病ノ濃度ヲ推測スルハ必シモ至難ナラズ、殊ニ本病ノ濃厚ナル地方ニ於テハ比較的精細且廣汎ナル報告書ヲ見ルヲ以テ之等ノ地方ニハ主トシテ本病ノ存在アルモノトノ見解ヲ附シ左ノ如キ標準ヲ以テ本症ノ地理的分布ヲ考察スルニ次ノ如シ。

第一節 猩紅熱届出制度ノ有無ヨリ觀タル各國ニ於ケル本病ノ濃度

一、届出ノ義務アル(即法定傳染病トナレル)國名及法定制度發布ノ年度

第二表ニ見ル如ク本病ガ最モ古ク法定傳染病トナレルハノールウェーノ一八六二年ニシテ日本ニ於テハ一八九七年即明治三十年ナリ、當時ベルギーニ於テハ届出ニ對シ五「フラン」、英國ニ於テハ二「シルリング」ノ賞金制度ヲ設ケシコトアリ。

ウルガイ、アルゼンチン、ペルー、ブラジル等ニ於テハ本病ハ殆ンド常在セズ。其發生ハ今日迄ノ報告ニ徴スレバ寧ロ特發的ノモノニシテ只大海港地ニノミ限ラル、ノ事實ハ明ニ交通ト本病ノ傳播トガ密接ナル關係ニアルヲ證スルモノナリ、一九一二年ケイガー氏ハ埃及、印度、ビルマ、セイロン、マラッカ海峡、支那及日本等ニハ永續性ヲ以テ本病ノ存在ナシト云フ、支那及日本ハ既ニ永續性トナレルノ感アルモ、其他ニ於テハ世界的交通路タル關係上特發的ノモノナリト思惟スルヲ得可シ。

第三節 世界地方別ニ據ル本病ノ濃度及性質

一、世界大洲別ニ於ケル本病ノ濃度ハ其地方ノ對人口罹患率(第二十四及二十五表參照)ニ據リ又本病ノ性質ハ對人口死亡率(第二十八、二十九、及三十表ニ詳説ス)ヲ以テ知ルノ外ナシ、而シテ國際聯盟ヘノ各地ヨリノ報告ハ國ニヨリ或ハ數年ニ亘リ精細ナルモノ或ハ一兩年ニ就テノミ報告セルモノ等アルヲ以テ數年間ノ平均ヲ見ルコト難シ、茲ニハ只一九二五年度ノ報告ヲ基礎トシテ算出セルモ大體ニ於テ其濃度及性質ヲ窺フコトヲ得可シト信ズ。

第四表ヲ觀ルニ本病ノ濃度ハ北米最モ大、歐洲及アウストラリア之ニ次ギ亞弗利加及メキシコ地方最モ稀薄ナリ、而シテ其性質ハ概シテ歐洲最モ惡性次デ北米及亞細亞ノ順トナルガ如シ。

二、年々一萬以上ノ本病發生ヲ見ル國名

第五表ニ示ス如ク露國最モ其數多ク大正十三年度十五萬以上同十四年度二十三萬以上トナル、次ハ米、英、獨、ポーランドノ順ニシテ何レモ一萬以上ヲ算ス。

第四表 世界地方別ニ據ル猩紅熱ノ濃度及性質

地方名	濃度及性質	1925年 對人口一萬 對罹患率 (千分比)	1926年 對人口十萬 對死亡率 (万分比)
Canada		16.9	4.0
U. S. A.		16.8	
Europe		10.7	6.2
Australia		9.1	
Asia		1.3	1.8
South America		0.7	0.9
Central Asia		0.6	
Africa		0.3	1.1
Mexico & West India		0.2	1.0

(備考 詳細ハ第二十八表及第二十九表參照)

第六表 緯度ト猩紅熱ノ濃度及性質

緯度	濃度及性質	對人口一萬 罹患者率	對人口十萬 死亡率
60.5 以上	ノ地方	19.4	
50.5-60	"	12.8	8.3
40.5-50	"	9.8	5.6
30.5-40	"	3.1	1.6
20.5-30	"	0.18	0.4
0-20	"	0.07	0.08

第六表ヲ觀ルニ北半球ニアリテハ高緯度即北方ニ進ムニ從ヒ本病ノ對人口罹患者率及死亡率ハ益々高度トナル即本病ハ北方ニ旺盛ニシテ亦惡性ノ度強キヲ知ル。

第三章 氣象學ヨリ觀タル本病ノ濃度及消長

地球上ニ於ケル本病ノ分布及濃度ハ地方ニ據リテ大差アリ、又本病流行ノ傳染力及性質ハ年及季節ニ據リテ著シキ差違アルハ上述及後述ノ如シ、又上段ニ於テ本病ト緯度トノ關係ヲ論ジ北半球ニアリテハ北方ハ南方ニ比シ本病ノ濃度及性質ニ差違アルヲ示摘セリ、斯クノ如ク本病ノ消長ハ人種、生活狀態、交通等ニモ關係アルハ之ヲ認ムルモ本病流行ニ對シ他ニ氣象上ノ影響ナキヤ、此間ノ關係ハ本病流行ニ最モ重要ナリト思惟スルモ本調査ハ頗ル困難

原著 原 著 黒井・森脇 流行病學ヨリ觀タル猩紅熱

第五表 年一萬以上ノ猩紅熱患者發生ノ國々

國名	猩紅熱患者總數	
	1925	1924
Russia (Total)	235928	156397
U. S. A.	111925	183253
England & Wales	91461	84652
Germany	39918	32798
Poland	24586	18030
Italy	15050	16320
Canada	14685	17340
Czechoslovakia	12332	1124
Sweden	10942	11022
Roumania	10640	16696

第四節 緯度ヨリ觀タル本病ノ濃度及性質

地球ノ緯度ヲ標準トシ各國及各地ノ對人口罹患者率及死亡率ヲ以テ之ヲ示セバ第六表ノ如シ(詳細ハ第二十六表及第三十一表參照)

備考、緯度ト土地トノ概念、大連ハ秋田、ナポリ、マドリド、フキラデルフキア、サクラメントト又長春ハ旭川、ナイヤガラ、ポートランド、ゼノアト略々其緯度ヲ等シクス。

難ニシテ吾人ハ只氣象中ノ一ニテ標準トシ頗ル概括的ニ其關係ヲ調査セシニ止ル。

第一節 等温線ヨリ觀タル本病ノ濃度及性質

緯度ト等温線トハ一致セズ、例ヘバ大連、伊太利南端、ワシントン等ハ殆ンド同緯度ニアルモ大連ノ平均温度ハ北歐洲殊ニ獨、英ニ相當スルガ如シ、今吾人ハ等温線ヲ標準トシテ其地方ニ於ケル本病ノ罹患率及死亡率ヲ觀ルニ第七表ノ如シ。(詳細ハ第二十七及三十二表參照)

第七表 等温線ト猩紅熱ノ濃度及性質

濃度及性質 等温線	對人口一萬 罹患率	對人口十萬 死亡率
0-5°Cノ地方	67.6	14.5
6-10 "	3.6	13.4
11-15	2.5	6.3
16-20	1.3	2.7
21-25	0.3	0.3

第七表ヲ觀ルニ地球上ノ温度ノ下降ト共ニ其罹患率及死亡率ハ比較的急激ニ高率トナルヲ知ル、即本病ハ寒帶及温帶地方ニ好發スル性質ヲ有スルコト緯度及等温線ト本病トノ關係ヨリ明ニ之ヲ證明セルモノト云フヲ得可シ。(年中ノ季節的ニ之ヲ見ルモ同一ノ關係ニアルコト亦後述ノ如シ)

アラビア及印度ニ於テ本病ハ重要疾患ニ非ラズ、南米及亞弗利加ノ熱帶及亞熱帶地方ニ於テハ大海港ノミニ局限セル特發的ノモノトナシ又ミツチエル氏(10)ニ據レバ亞弗利加ニ於ケル流行ハ歐洲的ノ氣候アル喜望峰ヨリナタール地方即熱帶氣候ニ向ツテ進ムニ從ヒ次第ニ減退スト云フ、尙歐洲ノ南部即スペイン、

ポルトガル及グリーキ等ニ於テ本病ハ一般的疾患トシテ之ヲ認ムルヲ得ズ、殊ニスベインノ如キハ本病ニ對シ届出ノ義務制度ナシ、以上ヲ以テ見ルモ猩紅熱ガ恒在性ニ流行スルハ寒冷又ハ温帶地方ニ限ラレタリト稱スルモ殆ンド過言ナラズ。

第二節 雨量分布ヨリ觀タル世界各地方ノ猩紅熱

雨量ト空氣ノ濕度トハ必シモ一致セザルモ數年ニ亘ル雨量ノ平均ハ大略各其地方ノ濕度ニ比例スト云フ、茲ニ於テ各地方ニ於ケル雨量ヲ標準トシテ其地方ノ猩紅熱罹患率及死亡率(對人口)ヲ觀ルニ第八表ノ如シ。

備考、雨量二五〇耗ハ多クハ砂漠地方ニ屬シ、二五〇—五〇〇耗ハ南部シベリア及ロッキー山東部ノ北米地方之ニ相當ス、五〇〇—一〇〇〇耗ハ歐洲ニ當リ、一〇〇〇—二〇〇〇耗ハ日本、合衆國東南部ニ相當シ又二〇〇〇耗以上ハシンガポール、スマトラ、ボルネオノ南洋諸島、アフリカ西南部、南米東部地方之ニ相當ス。

第八表

雨量分布ヨリ觀タル世界各地方ノ猩紅熱

雨量	人口	患者數	對人口一萬癩患者率(千分比)	人口	死亡數	對人口一萬癩死亡率(千分比)
250耗以下	14267000	152	0.11	1507800	16	1.06
250—500	28621763	73764	9.38	6784011	219	3.23
500—1000	459539007	410928	8.92	94508091	6458	6.83
1000—2000	137560125	114557	8.33	38124114	996	2.61
2000以上				1740739	0	0

第八表ヲ觀ルニ雨量最少キ地方及最多キ地方ニ於テハ猩紅熱極メテ稀ナリ、雨量二五〇—二〇〇〇耗ノ地方ニ罹患率高ク且死亡率モ亦五〇〇—一〇〇〇耗ノ地方ニ最高率ヲ示ス。

第三節 猩紅熱ノ季節的消長

本病ガ寒冷地及温帶ニ好發スルハ上述ノ如シ、而シテ本病ノ季節的消長ニ於テモ亦此事實ヲ證明スルヤ、吾人ハ先ヅ滿洲及日本ニ就キ、次ニ世界

各國ニ於ケル本關係ヲ觀ントス。

一、滿洲ニ於ケル年度別及月別猩紅熱患者數

第九表

滿洲ニ於ケル年度別及月別猩紅熱患者數

全滿洲	年 月												計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1921	15	31	47	37	38	47	16	14	22	22	28	19	336
1922	33	31	36	46	50	24	23	8	16	33	31	22	356
1923	54	35	28	19	32	47	24	15	27	39	37	65	422
1924	30	43	64	45	48	48	22	29	25	37	59	469	

(1733)

(1734)

(六ヶ年) 五例	1925	52	92	115	116	116	81	34	34	65	52	99	23	1086
	1926	248	211	171	177	170	117	87	76	52	72	130	88	1599
	1921—1926	432	443	461	440	454	364	203	169	211	243	362	483	4265
大連療病院入院患者 (二八九一例) (十五ヶ年)	1912	1	6	7	5	15	9	9	9	7	15	12	6	101
	1913	15	54	47	14	12	2	1	2	—	1	4	4	159
	1914	10	15	8	4	20	18	5	2	5	6	5	37	135
	1915	38	27	26	26	8	6	2	2	6	7	11	23	182
	1916	9	29	32	20	13	7	4	2	6	10	6	7	145
	1917	12	25	39	22	26	31	13	9	12	10	10	14	226
	1918	8	27	15	15	9	13	1	6	—	10	4	8	116
	1919	3	5	14	3	8	18	7	1	3	4	2	10	78
	1920	7	4	7	8	12	4	5	3	1	2	13	4	71
	1921	6	13	15	20	28	16	6	—	3	10	12	11	140
	1922	14	16	25	34	30	13	13	13	9	19	10	10	196
	1923	16	10	12	3	4	29	12	4	7	13	11	27	148
	1924	15	27	24	14	12	15	5	3	9	9	11	10	154
	1925	15	19	24	28	25	12	3	11	20	15	28	103	303
	1926	133	125	70	86	79	56	42	21	20	27	42	36	737
1912—1926	302	402	365	302	302	249	128	78	108	158	181	316	2891	
旅順療病院及旅順醫院患者 (八五三例) (十五ヶ年)	1912	8	3	0	2	0	0	1	1	1	5	8	3	32
	1913	11	7	11	2	2	0	0	4	1	2	3	3	43
	1914	2	3	8	3	2	1	0	1	0	5	8	3	36
	1915	5	9	3	1	1	2	3	3	0	2	4	3	36
	1916	2	2	10	4	4	6	2	0	1	7	6	5	49
	1917	2	1	5	3	2	12	3	2	1	8	13	4	56
	1918	6	11	1	0	0	2	0	0	0	0	4	1	25
	1919	0	3	3	0	1	1	0	0	1	2	2	1	14
	1920	7	1	0	0	0	1	1	0	0	3	1	7	21
	1921	0	0	0	0	1	1	0	0	0	6	2	2	13
	1922	4	0	0	1	13	2	2	2	2	5	4	8	43
1923	4	4	4	3	19	9	6	3	6	7	6	15	86	
1924	4	3	7	1	0	5	5	2	1	5	2	6	41	

1925	2	1	6	12	14	16	7	3	16	11	33	49	170
1926	27	14	10	11	29	13	8	4	7	12	29	24	188
1912—1926	84	62	68	43	88	71	38	25	38	80	125	131	853

東京及滿洲ニ於ケル月別猩紅熱患者數

第十表 滿洲及東京ニ於ケル月別猩紅熱患者數

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
1912—1920 大連病院患者	103	192	195	117	124	108	47	36	40	65	67	119	1213
1921—1926 全滿洲患者	432	443	461	440	454	364	203	169	211	243	382	433	4265
計	535	635	656	557	578	472	250	205	251	308	429	662	5478
1917—1923 駒込病院入院者	113	108	108	115	141	105	59	46	53	96	165	138	1247
1924—1926 東京市及郡部	201	243	256	232	239	178	129	88	111	213	235	375	2550
計	314	351	364	347	380	283	188	134	164	309	430	513	3,797
合計	847	986	1,020	904	958	755	438	339	415	617	879	1,115	9,275

(1735)

第十表ニ就テ滿洲ニ於ケル本病五四七八例ノ月別發生數ヲ見ルニ三月(六五六例)ヲ以テ最高トシ二月、十二月、五月、四月、一月之ニ次ギ八月最モ少ク七月、九月之ニ次グ、東京ニ於ケル三二七七例ノ猩紅熱ノ月別ハ十二月(五二三例)ヲ以テ最高トシ十一月、五月、三月、二月、四月之ニ次ギ今滿洲及東京ヲ合シタル九二七五例ノ月別ハ大體東洋ニ於ケル標準タル可ク、十二月ヲ以テ最高トシ三月、五月、二月、四月ノ順トナリ八月最モ少ク九月、七月之ニ次グ、以上ノ數字ハ滿洲ニ於テハ一九一二年以來、東京ニ於テハ一九一七年以來昨年迄ノ患者數ニシテ(一九二三年迄ハ近藤氏⁽²⁾等報告ノ駒込病院入院ノモノ、其後三ヶ年ハ井口氏⁽²¹⁾報告ノ東京市及郡部ノ數ヲ合算セリ)偶々十二月ヲ以テ本患者發生ノ最高月ト決定セシモ是素ヨリ確定的ニ非ズ、一度大流行アレバ其年度ハ忽チ月順位ヲ轉ズルニ至ルハ勿論ニシテ一般ニ猩紅熱ハ何月ニ多シト斷定ス可ラズ。

第十 一 表
1952年ニ於ケル各國猩紅熱患者數ト季節 (Trimester)

國 名	Trimester 備考	I	II	III	IV	患者數多キ季節順 (1925)			
		(Jan. Feb. march)	(april may June)	(July aug. Sept.)	(Oct. Nov. dec.)	IV	I	III	II
England & Wales		23373	19682	20566	28840	IV	I	III	II
Dauzig		65	52	117	179	IV	III	I	II
Scot land		2821	2197	2405	3952	IV	I	III	II
Netherland		2405	2093	3107	4103	IV	III	I	II
Suisse		572	481	403	535	I	IV	II	III
Saar territorg		52	39	39	63	IV	I	III	II
Yougoslavia		2548	1638	1651	3247	IV	I	III	II
Belguim		312	247	221	198	I	IV	II	III
Bulgaria		796	487	679	1397	IV	I	III	II
Denmark		718	471	667	963	IV	I	III	II
Esthonia		108	119	121	218	IV	III	II	I
Finland		517	416	194	540	IV	I	II	III
France		1956	2225	1643	1985	II	IV	I	III
Greece		75	84	90	130	IV	III	II	I
Hungary		1966	1944	1566	2567	IV	I	II	III
Latovia		804	696	406	680	I	II	IV	III
Lithuania		373	292	333	442	IV	I	III	II
Norwey	Cities	155	137	72	182	IV	I	II	III
Russia	Total	62860	52033	46398	74638	IV	I	II	III
European Russia		42776	37704	27673	45579	IV	I	II	III
Ukraina		11739	9304	14170	1811	IV	III	I	II
Trauscansas, Sibesia	}	3867	2582	1793	1091	I	II	III	IV
Central Aria									
Sweden		2988	2656	1962	3306	IV	I	II	III
Czechoslovokia		2683	2396	2566	4687	IV	I	III	II
Egypt		26	39	39	21	II	III	I	IV
Algeria		143	65	78	23	I	III	II	IV
Tunisia		52	182	65	82	II	IV	III	I
U. S A.	27 State	46593	29770	9266	25267	I	II	IV	III
Canada	Total	5264	3561	1644	4216	I	IV	II	III
Japan		520	754	390	523	II	IV	I	III
Coraa		316	266	87	173	I	II	IV	III
Tuskey		238	163	265	325	IV	I	III	II
Australia		1339	1651	1248	1260	II	I	IV	III
Newzealaud		247	286	273	241	II	III	I	IV

出スルニ第十一表ノ如シ。
一―二―三月ヲ第一期トシ一年ヲ四期ニ區分シ第何期ニ發生數最モ多キヤヲ三十四ヶ國ノ報告ニ係ル數字ヨリ算

三、各國ニ於ケル猩紅熱發生數ノ最大ナル季節

上述ノ一九二五年度ニ於ケル三十四ヶ國ヲ最大發生期ヲ標準トシテ區別スルニ第十二表ノ如シ。

第十二表 各國ニ於ケル猩紅熱患者發生數ノ最大ナル季節(1925年)

IV. Trimester (Oct. Nov. Dec.) = 於テ患者發生數ノ最大ナル國

- 1) England & Wales, Scotland, Saarterritory, Yugoslavia, Bulgaria, Denmark, Lithuania, Czechoslovakia, Turkey, Finland, Hungary, Norway, Russia, Sweden, Danzig, Netherland, Ukraina, Estonia, Greece, Germany, Manchuria.

2) New Brunswick (Canada), Southatlantic States (U. S. A.)

I. Trimester (Jan. Feb. March) = 於テ患者發生數ノ最大ナル國

- 1) Switzerland, Belgium, Latvia.
- 2) Trans caucasas, Central Asia, Siberia, Corea.
- 3) Algeria.
- 4) Canada, U. S. A.

II. Trimester (April, May, June) = 於テ患者發生數ノ最大ナル國

- 1) France, Japan.
- 2) Egypt, Tunisia.
- 3) Australia, Newzealand.

第十二表ヲ見ルニ一九二五年度ニ於テ第四期(即十、十一及十二月ノ三ヶ月間)ニ患者數最も多ク發生セル地方ハ殆ド歐洲全般ニシテカナダ及合衆國ノ東南部及滿洲ハ歐洲ト同様第四期ニ發生多ク次ニ第一期ヲ最高トナスハ歐洲中ノ一部(スエス、ベルギー、ラトヴィヤ)中央亞細亞、朝鮮及北米ノ大部分ニシテ第二期ハアフリカ、濠洲ニ多シ、但是レ素ヨリ一九二五年度ノミニ就テ調査セルモノニシテ常ニ第何期ニ最も多シト決定スルヲ得ズ、殊ニ日本、朝鮮、滿洲及佛國、スエス、スペイン、ベルギー等ハ年ニ據リ發生最高ノ期ヲ異ニスルヲ以テナリ、左記第十三表ヲ見レバ此關係更ニ明ナリ。

四、猩紅熱患者數ト累年ノ季節の消長

原著 原 著 黒井・森脇ニ流行病學ヨリ觀タル猩紅熱

第十三表 猩紅熱患者數ト累年ノ季節の消長

		Trimester							
		I	II	III	IV				
滿洲 (4265例)	1921	93	122	52	69	II	I	IV	III
	1922	100	120	47	86	II	I	IV	III
	1923	117	98	66	141	IV	I	II	III
	1924	137	141	70	121	II	I	IV	III
	1925	259	313	133	381	IV	II	I	III
	1926	630	464	215	290	I	II	IV	III
	1921-26	1336	1258	583	1088	I	II	IV	III
東京 (1247例)	1917	43	51	20	32	II	I	IV	III
	1918	51	50	15	30	I	II	IV	III
	1919	38	54	27	56	IV	II	I	III
	1920	47	58	26	80	IV	II	I	III
	1921	72	53	22	76	IV	I	II	III
	1922	46	51	23	61	IV	II	I	III
	1923	32	44	25	64	IV	II	I	III
1917-23	329	361	153	399	IV	II	I	III	
東京 (2550例)	1924	236	192	94	212	I	IV	II	III
	1925	212	212	86	228	IV	I	II	III
	1926	251	245	148	433	IV	I	II	III
	1924-1926	1028	1010	486	1272	IV	I	II	III
Victoria (16332例)	1913	67	82	37	57	II	I	IV	III
	1914	56	84	143	106	III	IV	II	I
	1915	143	222	180	206	II	IV	III	I
	1916	272	498	419	377	II	III	IV	I
	1917	276	547	520	651	IV	II	III	I
	1918	484	685	807	596	III	II	IV	I
	1919	415	445	491	412	III	II	I	IV
	1920	711	832	492	224	II	I	III	IV
	1921	596	1188	639	393	II	III	I	IV
	1922	582	688	384	322	II	I	III	IV
1913-1922	3602	5271	4112	3347	II	III	I	IV	
European Russia (194501例)	1923	18332	12535	17555	24076	IV	I	III	II
	1924	24554	18271	33699	45579	IV	III	I	II
	1923-24	42886	30806	51154	69655	IV	III	I	II
Bulgaria (40496例)	1920	780	599	1018	1911	IV	III	I	II
	1921	1239	994	1102	2727	IV	I	III	II
	1922	1219	703	1654	3609	IV	III	I	II
	1923	2004	1869	3871	7841	IV	III	I	II
	1924	3708	1335	1046	1377	I	IV	II	III
1920-1924	9040	5500	8691	17465	IV	I	III	II	
England (257827例)	1920	26646	21472	25459	45915	IV	I	III	II
	1921	28948	26331	27407	55649	IV	I	III	II
	1920-21	55594	47803	52.66	101564	IV	I	III	II

第十三表表ヲ觀ルニ英、露、ブルガリアハ殆ンド常に第四期ヲ最高トシ、アウストラリアニ於テハ第二期ヲ最高トナス年多シ、滿洲ニ於テハ第二又ハ第四期ニ多キ年アルモ平均第一期ヲ最高トナス、東京ニ於テハ第四期ニ多ク一九二五年ニ於テモ東京ハ第四期ヲ最高トナスモ同年ノ日本全體ノ統計ハ上述ノ如ク第二期ヲ最高トセリ。

由是觀之斯クノ如ク最高發生ノ期ハ年ニ據リ一定セズト雖モアウストラリア、ニユージーランドヲ除キテハ一般ニ最モ寒冷ノ候ニ發生ヲ見ルコト多ク就中歐洲ハ第四期ヲ以テ最高トナスモノ、如シ、而シテ以上ヲ通覽シテ特ニ著明ナルハ第三期即七、八、九月ニ於ケル發生ハ(ヱイクトリアニ於ケル例外ノ三ケ年ヲ除キ)殆ンド何レノ國ニ於テモ一様ニ著シキ減退ヲ見ル、即チ本病ハ熱帶ニ少キガ如ク流行地ニ於テモ亦夏期ハ殆ンド常ニ本病ノ傳染力ニ著シキ減退ヲ見ルモノ、如シ。

但上述アウストラリアノ例外ハ之ヲ如何ニ説明ス可キヤ、同地方殊ニヱイクトリア洲ニ於ケル十ケ年間(一六三三二例)ノ發生ハ第二期ヲ最高トナスコト六ケ年、第三期ハ三ケ年、第四期僅ニ一ケ年ニシテ其平均ハ第二期即四、五、六月ニ最モ其發生多シ。是レ同地方ノ氣候ニ差アルニ因スルヤ否ヤハ不明ナルモ只單ニ氣候特ニ溫度ノミヲ以テハ説明尙十分ナラズ、是蓋シ猩紅熱ハ少クトモ都會地ニ於テハ流行性ニ來ル一證查ニシテ誠ニ興味深シ、要スルニ氣候ハ必シモ考慮ス可キ唯一ノ要約ニ非ラザルヲ知ル。

第四節 大連ニ於ケル本病流行ト氣象トノ關係

猩紅熱罹患ハ夏期ヨリモ寧ろ寒冷ノ季節ニ多ク又熱帶ニ於テハ極メテ稀有ニ屬シ寒又ハ溫帶ニ限ラレタル如キ事實ハ各地方ノ等溫線及緯度ヲ標準トセル罹患率ニ見ルモ明ナリ、尙本病ノ雨量トノ關係ヨリ本病ハ恰モ歐洲ノ夫ノ如ク比較的雨量少キ地方ニ旺盛ナル事既ニ上述ノ如シト雖モ是レ素ヨリ本病ニ對スル地球上ニ於ケル大局的ノ關係ナリ、曩ニ著者ノ一人森脇ハ猩紅熱連鎖狀球菌其他各種ノ連鎖狀球菌ヲ種々ノ要約例ヘバ明、暗、寒、濕、乾、濕等ヲ交互ニ組合シ實驗室ニ於テ勉メテ自然ノ氣象ヲ模倣シ各菌ノ抵抗ヲ檢セルニ溫ヨリモ寒ニ、明ヨリモ暗ニ又濕ヨリモ寧ろ乾ニ比較的生存期間長キヲ發見シ既ニ之ヲ報告セリ、即チ上述ノ大局的關係ハ正シク實驗室ノ成績トヨク一致スルヲ見ル、果シテ此關係ニシテ常ニ本病ノ流行ヲ左右スルヤ否ヤハ甚興味アル問題ナリ、余等ハ上述ノ如ク十四年度ノ歐洲殊ニ北半部ニ於ケル本病ハ十三年度ニ比シ著シク増加セルヲ示摘セルモ果シテ北歐ノ氣候ガ如何ナル變化ヲ呈セシ

(1739)

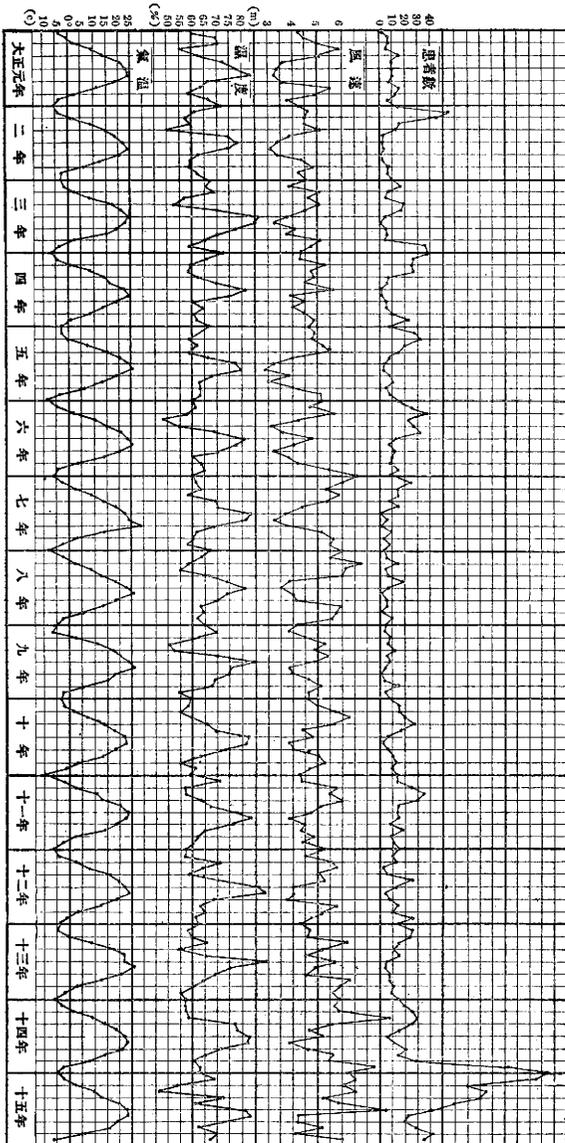
ヤハ今知ルニ術ナシ、只滿洲殊ニ大連及旅順ニ於ケル本病ノ流行ニ就キ大正元年ヨリ同十五年迄別表曲線第一圖ノ上段ニ見ル如キ曲線ヲ以テ現ハスニ大正二年、四―五年、十―十一年及十四―十五年ニ比較的著明ナル流行ヲ見ル、殊ニ大正十四―十五年ノ流行ハ未曾有ノ大流行ナリ、然ラバ此流行ハ氣象學的ニ何等カノ變化ト一定ノ關係アル可キヤ、今大連觀測所ノ累年統計ニ就テ曲線ヲ以テ此間ノ關係ヲ觀察スルニ曲線第一圖ノ示スガ如シ。

備考、平均風速、一秒間ノ「メートル」ヲ示ス(改正表示法ニヨル)

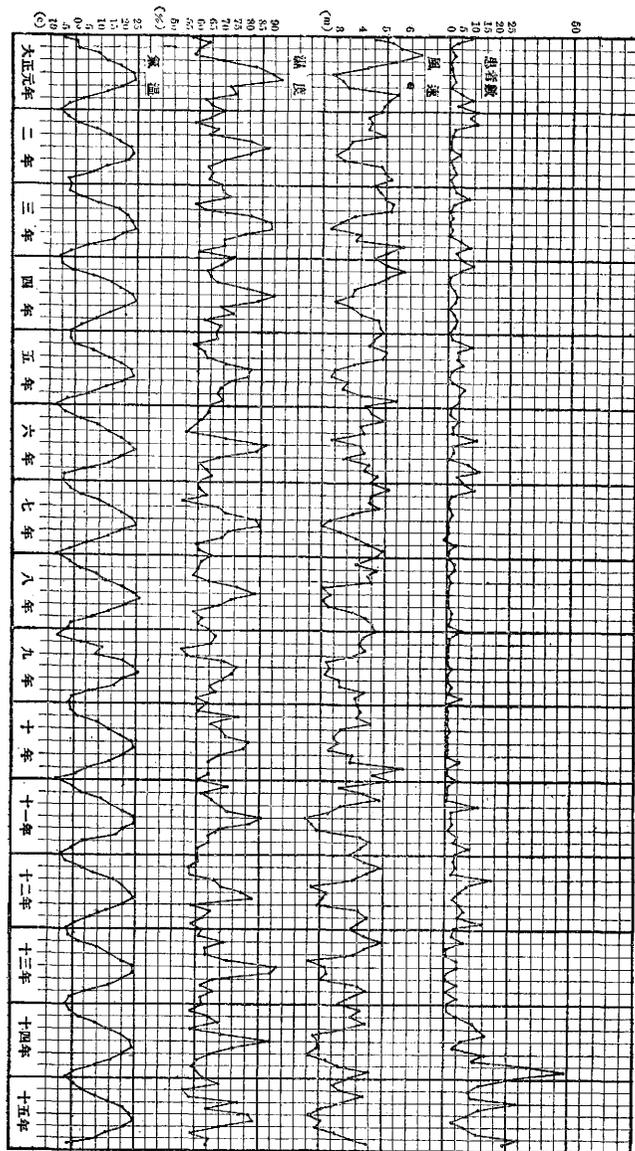
平均濕度、空氣中水分ノ飽和ヲ一〇〇%トス。

平均氣温、月々ノ平均氣温ヲ攝氏ニテ示ス。

第一圖曲線(甲) 最近十五ケ年間大連ニ於ケル猩紅熱患者數ト風速濕度及氣温トノ關係



第一圖曲線(乙) 最近十五ケ年間旅順ニ於ケル猩紅熱患者數ト風速濕度及氣温トノ關係



曲線第一圖(甲及乙)ヲ觀ルニ左ノ如シ。

一、風速ト本病、從來當院ノ經驗ニ據レバ風速大ナル風ノ後ニハ本病ノ發生比較的多シ、殊ニ風多キ滿洲ノ春期ニ於テ時々此感ヲ深クスル事アルモ兩者ノ曲線ヲ對照スルニ殆ンド其關係ヲ見出ス事困難ナリ、本病流行ノ頂點ハ平均風速ノ夫ニ一致スルモノ比較的多キモ風速ノ必シモ流行ノ夫ト一致セズ、殊ニ大正十四年本病ノ大流行時ハ平均風速ニ著シキ變化ヲ見ズ、又最大風速ノ曲線ハ(表中之ヲ除ク)平均風速ノ曲線ニ見ル以上ニ兩者ノ關係稀薄ニシテ

(1741)

流行ト最大風速トハ殆ンド關係ナキモノ、如シ。

二、濕度ト本病、 濕度ハ氣温ニ關係シ氣温ノ頂點ハ殆ンド常ニ濕度ノ夫ニ一致ス、而シテ本病流行ノ頂點ハ多クハ平均濕度曲線ノ底點ニ相當スルモ濕度ノ底點必シモ流行ノ頂點ニ一致セズ、最高濕度亦同様ノ關係ニアリ。

三、氣温ト本病、 平均氣温ハ十六年間殆ンド同様ニ經過シ流行ノ頂點ハ常ニ平均氣温ノ底點ニ一致ス、即本病ハ寒冷ノ候ニ多キモ大正十四年ノ大流行時特ニ平均氣温或ハ最低氣温ニ大ナル變化ヲ見ズ。

要之緯度、等温線度及雨量ト本病ノ分布及濃度ノ如キ地球上ノ大局的關係ハ一見兩者ノ間ニ密接ノ關係ヲ有スル如キモ大連旅順ノ流行ト氣象等地球上ノ或一部局的ノ關係ニ至リテハ兩者ノ間ニ一定ノ關係ヲ附スルヲ得ズ、殊ニ一方ニ於ケル從來比類ナキ大流行ガ其地方ノ氣象ニ關係ヲ有ストナス、殆ンド不可能ニシテ只僅ニ氣温及濕度ノ底點ニ本病流行ノ頂點ガ比較的ヨク一致スルノ事實アルヲ知ルノミ。殊ニ茲ニ示セル要約即平均風速、氣温、濕度等ハ是素ヨリ氣象學要素中僅ニ其一部ニ過ギズ、故ニ之等ヲ以テ直ニ本病ト一般氣象トノ關係ヲ云々スルコト甚當ヲ得ズト雖モ一地方ノ大流行ガ少クトモ氣温、濕度及風速ニ特筆ス可キ關係的變化ヲ認メ得ザリシハ事實ニシテ是レ一面本病ノ流行ハ氣象ヨリモ寧ロ其流行時ニ於ケル本病々原ノ傳染力ニヨリ多ク關係アルヲ語ルモノナリ、即茲ニ於テモ亦猩紅熱ハ少クトモ都會地ニ於テハ流行性ニ來ル一證查ヲナスモノニシテ此際氣象ハ必シモ考慮ス可キ唯一ノ要約ニ非ラザルヲ知ル。

第四章 人種、性及年齡別ト猩紅熱罹患

第一節 人種別ニ據ル本病ノ罹患熱

帶地方ニ本病ノ稀ナルハ既ニ上述ノ如シ、而シテ印度、アフリカノ如キ有色人種ノ大部分ヲ占ムル熱帶諸國ニ於テハ住民ノ自然免疫性ヲ有シ、印度、アルゼリー、オーストラリア、ナタールノ如キ何レモ有色ノ土人ハ先天的ニ免疫

(1743)

ヲ有シ其地方ニ於ケル罹患者ノ殆ンド總テハ轉住シ來レル白色人ニ限ラレタリ、殊ニ北米合州國ニ於テ黑人ハ本病以外ノ病氣ニ對シテハ白色人種ヨリ死亡率高キモ本病ノミハ對人口死亡率極メテ低シ是レ即チ先天的ニ有色人種ハ本病ニ罹患セザルニ基因ストサル⁽¹⁰⁾。是レ今日一般ニ信ゼラル、處ニシテ今此證查ノ二—三ヲ數字のニ舉グレバ第十四、第十五及第十六表ノ如シ。

第十四表
南アフリカニ於ケル猩紅熱患者
ノ人種別(1920—1924)
(Note de Dr. J. A. Mitchell)

年	期	白 罹 患 人 數	黑 罹 患 人 數	計
1920		1653	79	1732
1921		854	66	920
1922	1—6月	628	12	640
1923	6月迄	2000	42	2042
1924	6月迄	984	40	1024

第十五表
米國ニ於ケル人口十萬ニ對スル
猩紅熱死亡率ノ人種別

年	全人口	死亡率(白人) (万分比)	死亡率(黑人) (万分比)
1910	11.6	12.0	3.4
1911	8.9	9.2	1.5
1912	6.7	6.9	1.6
1913	8.6	9.0	2.9
1914	6.6	6.9	1.5
1915	3.6	3.7	1.2
1916	3.3	3.5	1.1
1917	4.2	4.45	0.8
1918	3.0	3.27	0.4
1919	2.8	3.0	0.5
1920	4.6	4.9	0.8

第十六表
上海在住白人(共同租界)及支那
人ノ對人口罹患率比較

人種	年度	人口	患者數	對人口一 萬罹患率
白人	1925	29947	34	11.30
支那人	1925	842000	63	0.75

以上第十四、第十五及第十六表ニ據リ南亞弗利加、米國、上海等同一地方ニ於テ常ニ有色人種ノ罹患率及死亡率ハ白人種ノ夫ヨリ遙ニ低率ナルハ事實ナリ、而シテ之等ノ事實ヲ只單ニ皮膚ノ色ノミニ據リテ説明セントスレバ我滿洲ニ於ケル同一黄色人ナル日、支人ノ罹患率及死亡率ハ亦殆ド同程度ナラザル可カラズ、果シテ然ルヤ第十七表ニ明ナリ。

第十七表ヲ觀ルニ滿洲殊ニ關東州内及滿鐵沿線ニ共住スル日本人及支那人ニ就テ最近六ケ年間ノ本病罹患率及死亡率ヲ比較スルニ日本人ハ人口一萬ニ對シ四一人ノ罹患率ヲ示スニ支那人ハ僅ニ〇・二五人ナリ、又死亡率ニ於テモ人口

第十七表 滿洲在住日支人ノ對人口罹患率及死亡率ノ比較(六ケ年計)

日支別	年(六ケ年)	人口計	患者計	對人口一 萬罹患率	死亡計	對人口一 萬死亡率
日本人	1921—1926	984600	4043	41.06	383	38.89
支那人	1921—1926	4657400	117	0.25	37	0.79

十萬ニ對シ日本人約三九人ノ死亡率ヲ示スニ支那人ハ僅ニ〇八人ニ當ル、對人口ノミナラズ其實數ニ於テモ支那人ノ人口ハ日本人ノ約四倍半ナルニ其罹患數ハ僅ニ日本人ノ四十分ノ一ニ相當ス。

此事實ヲ如何ニ説明ス可キヤ、勿論支那人間ニハ多少ノ隱蔽アルハ事實ナリ、而シテ痘瘡ニ對スル支那人罹患ノ極メテ多數ナルニ反シ本病ハ如何ニ隱蔽ヲ算入スルモ其數尠キハ動カス可カラザル事實ナリ、又素ヨリ本病ノ強力ナル傳染力ヲ有スル流行時ハ支那人ト雖モ多ク罹患シ往々上海、北京ニ於テ支那人間ニ其流行アルハ又何等審ムニ足ラズ、只其罹患率及死亡率ニ對シ同色人種タル日、支兩國人間ニ斯クノ如キ著明ノ差ヲ見ルハ果シテ是レ皮膚ノ色ノミヲ以テ斷ズ可カラズ、而シテ本病罹患者ノ多クハ纖弱ナル皮膚ヲ有シ、苦力等、勞働者ハ極メテ稀ニ罹患スルハ日支人共ニ共通ナリ、而シテ曩ニ療病院ニ於ケル「デックテスト」ノ成績⁽⁸⁾ニ見ルモ其陽性ノ度ハ日支兩學童間ニ於テ既ニ著明ノ差アリ此事實ヲ余等ハ主トシテソノ環境ニ據リ自然ニ免疫ヲ得ル如キ生活狀態ニ馴ラサレタル人種ノ子孫ハ先天的ニ又後天的

ニ本病ニ對シテ免疫ヲ獲得スルニ據ル可シトノ意見ヲ報告セリ、コノ説明ガ果シテ此ノ際ニ於テモ亦適合セラル可キヤ、直ニ斷言ヲ憚ルモ只單ニ皮膚ノ色ノミヲ以テ説明シ難キハ既ニ滿洲ニ於ケル日支人罹患率ニ見ルモ明ナリ。

第二一節 性別ニ據ル本病ノ罹患率及死亡率

一、各地ニ於ケル男女別ニ據ル患者數

大正元年以降十五ケ年間ニ當院ニ收容セル三〇〇〇例ハ女稍々多ク五〇・九%、倫敦五一・六%、東京五四・四%、
 ニュージールランド六三・三%ニテ何レモ男子ヨリ女子ニ多キハ相一致ス即第十八表ノ如シ。

(1745)

第十八表
猩紅熱患者男女別ノ比較

地方別	罹患高 率年齢	患者總數	男	%	女	%
London	5-10	167840	81291	48.43	86549	51.57
東京	5-10 (4-7)	2550	1162	45.57	1388	54.43
大連	滿3-8	3000	1473	49.1	1527	50.9
New-Zea land	5-10	1176		36.7		63.3

第十九表
大連療病院猩紅熱 3000 例ノ性別ニヨル罹患率及死亡率

	自大正元年至十五年 十五ケ年 大連人口統計	大連療病院 十五ケ年間 患者數	同 死亡數	對人口一 萬罹患率	對人口十 萬死亡率	對患者百 死亡率
男	1904018	1473(49.1%)	145	7.73	7.6	9.84
女	1013244	1527(50.9%)	139	15.01	13.7	9.10
計	2917262	3000	284	10.3	9.7	9.47

二、當院三〇〇〇例性男女別ニ據ル罹患率及死亡率

從來患者數ノ性別ニ關シテハ記載多キモ男女對人口罹患率ニ就キテハ未ダ其記載ヲ見ズ、而シテ大連ニ於テ發生セル猩紅熱ハ殆ンド悉ク大連療病院ニ收容セラレタルヲ以テ同院ノ患者數ハ直ニ大連人口ニ對シ男女ノ罹患率ヲ比較スル事ヲ得即大連ニ於ケル大正元年以來十五ケ年間ノ男女人口ノ總計ト當院患者數トヨリ對人口罹患率及死亡率ヲ見ルニ第十九表ノ如シ。

第十九表ヲ觀ルニ女子ノ罹患ハ其實數ニ於テモ亦對人口率ニ於テモ男子ノ罹患ヨリ高率ナリ、殊ニ女子ノ對人口一萬罹患率ハ一五・〇ニシテ男子ノ七七・ニ對シ約二倍ノ高率トナル、而シテ死亡數殊ニ對患者百人ノ死亡率ハ男子九・八四%、女子九・二%ニシテ男子稍々高率ヲ示スモ對人口十萬死亡率ハ女子ニ於テ殆ンド二倍ノ高率トナル。

三、大連療病院本病患者ノ人種別、性別ニ據ル罹患率及死亡率

第二十表 大連療病院猩紅熱 3000 例ノ人種別性別ニヨル罹患率及死亡率

人種別	患者數計	性別	患者數	死亡數	對患者百率 對死亡	15ヶ年大連計 人口	對人口一 萬罹患率	對人口十 萬死亡率
日本人	2926	男	1434(49%)	135	9.41	450146	21.86	29.99
		女	1492(51%)	129	8.65	395662	37.71	32.61
支那人	62	男	34(54.8%)	10	29.41	1452282	0.23	0.69
		女	28(45.2%)	9	32.14	616297	0.45	1.46
白人種	12	男	5(41.7%)	0	0	1500	31.44	0
		女	7(58.3%)	1	14.47	1285	54.47	77.8

上述ノ關係ハ人種別ニ於テモ大同小異ニシテ日本人患者及白人種ハ全ク同様ナリ、女子ニ於テ患者實數殊ニ對人口罹患率ハ男子ノ夫ヨリ高率ヲ示ス、支那人ニ於テハ實數ニ於テ男子多數ヲ占ムルモ對人口罹患率ハ女子ニ於テ約二倍ノ高率ヲ示ス。

死亡實數ハ只日本人ニ於テハ男子ハ女子ニ比シ多數ナルモ對人口死亡率高率ハ日本人ノミナラズ支那人、白人種何レモ女子ニ高率ヲ示ス。

上述ハ之ヲ一括シテ第二十表ニ納メタリ。

要之、猩紅熱罹患ハ男子ヨリモ女子ニ稍々多ク對人口罹患率ハ殊ニ女子ニ於テ著シク高率ヲ示ス、死亡ハ日本人ニ於テハ其實數及對患者死亡率共ニ女子ノ夫ヨリ大ナルモ對人口死亡率ハ女子ニ於テ高率トナレリ、但上述ノ結果ハ流行ニ據リ差アルコト勿論ニシテ殊ニ其實數ニ於テハ男子ハ女子ヨリ多數ヲ占ムルコトアリ、大正十四年十二月ヨリ十五年六月ニ亘ル當地未會有ノ大流行ニ際シテハ男女六一五例中男子五〇・七%、女子四九・三%ニシテ男子ノ罹患率ハ寧ロ女子ノ夫ヨリ多數ナリシモ其對人口罹患率ハ共ニ同率ナリキ、又大正三十四年ノ交ニ於ケル惡性流行ノ際ハ一八一例中男子九三例、女

第二十一表
猩紅熱患者年齢別

年齢	ロンドン	東京	大連
5以下	52037	403	1211
6-10	67309	749	859
11-15	29261	521	341
16-20	9919	366	165
21-25	4744	209	140
26-30	2400	143	132
31-35	1246	75	77
36-40	532	41	47
41-45	210	17	17
46-50	103	7	5
51-55	54	6	3
56-60	14	9	2
61以上	11	3	1
	167840	2549	3000

又各年齢ニ於ケル死亡率對患者一〇〇人ハ一歳未満最高ヲ示シ三二・%ニ達シ年齢ノ進ムト共ニ其率ヲ減ズルモ大

ムト共ニ減退ス。
各年齢ニ於ケル患者數(滿十六歳以上ハ五年毎ニ平均數ヲ示ス)ヲ見ルニ滿三歳(九八三%)最高トナル一般高率ヲ示スハ滿二歳乃至八歳ニシテ年齢ノ進

及死亡
二、大連療病院收容三〇〇〇例ノ各年齢ニ於ケル患者

(既述)ノ示ス如シ。

療病院收容三〇〇〇例ハ滿五歳以下最高ヲ示スコト(一般ニハ滿二—八歳高率、滿歳最高)第二十一表及第十八表
三ケ年間ノ患者二五五〇例及ニュージーランドノ一一七六例ハ何レモ五—一〇歳ニ於テ最モ罹患多ク十五ケ年間大連
一八九二年ヨリ一九〇四年ノ十三ケ年間ニ倫敦⁽¹⁰⁾ニ於ケル本病罹患患者一六七八四〇例、東京市及郡部⁽²²⁾ニ於ケル

一、倫敦、東京及大連ニ於ケル年齢(五歳毎)別ニ據ル罹患數

第三節 年齢別ニ據ル本病ノ罹患率及死亡率

子八八例ニシテ殆ンド同數ニ近キモ男子稍々多シ、斯ノ如ク大連ニアリテハ激烈ナル流行ニ際シテ平時ヨリモ比較的
多ク男子ノ罹患ヲ見タリ(内地ニ於ケル諸家ノ統計ハ一般ニ男子多シ)而シテ男女ノ對人口罹患率ノ差ハ殆ンド常ニ男
女ノ患者數ノ差ヨリ大ナリ、又曩ニ余等ノ行ヒタル男女ニ對スル「デックテスト」陽性度ハ常ニ女子ニ高率ヲ示セルモ
男女「チック」陽性率ノ差ハ殆ンド常ニ男女患者數ノ差ヨリ大ナリ、換言スレバ對人口罹患率及「チック」陽性率ハ殆ン
ド常ニ女子ニ高率ヲ示スモ實際ノ罹患ハ比較的男子ニ多ク爲メニ殆ンド同數ニ近キ罹患數トナル、是レ戶外ト關係多
キ男子ハ寧ロ女子ニ比シ感染ノ機會多キニ基因スルナキカ。

人(殊ニ四〇歳以上)ノ死亡率ハ必シモ年齢ト共ニ低減セザルコト第二十二表ノ示スガ如シ。

第二十二表 大連療病院猩紅熱患者 3,000 例ノ各年齢別及各年齢ニ於ケル死亡率 (患者 3,000 例中死亡 248 例)

年(滿)	患者數	各年齢ノ患者率(%)	死亡數	各年齢ニ於ケル對患者百死亡率
1歳未満	28	9.33	9	32.11
1	159	53.00	41	25.78
2	233	77.70	37	15.87
3	295	98.33	35	11.86
4	230	76.67	27	11.78
5	266	88.77	33	12.40
6	242	80.57	24	9.92
7	175	58.33	11	6.28
8	188	62.67	8	4.25
9	141	47.00	2	1.42
10	113	37.67	2	1.71
11	87	29.00	6	1.77
12	98	32.67	5	5.10
13	60	20.00	0	6.60
14	53	17.67	2	3.77
15	43	14.30	0	0
16-20	33	11.	1.6	4.85
21-25	28	9.33	1.2	4.29
26-30	26.4	8.80	2.0	7.57
31-35	15.4	5.13	0.8	5.24
36-40	9.4	3.13	0.8	8.51
41-45	3.4	1.13	1.0	29.41
46-50	1.0	0.33	0	0
51-55	0.6	0.20	0	0
56-60	0.4	0.13	0	0
61以上	0.2	0.07	0.2	100

三、大連療病院三〇〇〇例ノ人種別及各年齢ニ於ケル罹患及死亡

上述ノ關係ハ大體ニ於テ支那人及白人種ニモ適合ス可キモ例數少キヲ以テ只コレヲ表示スルニ止ム。尚支那人ノ死亡率ハ三〇・六%ニシテ最高ヲ示シ次ハ日本人九%及白人種八・三%ニシテ之ニ次グコト第二十三表ノ如シ。

第二十三表 大連療病院猩紅熱患者ノ人種別及各年齢ニ於ケル罹患及死亡 (自大正元年一月一日起至昭和二年六月十五日)

白人種	
患者數	死亡數
0	0
0	0
1	0
0	0
1	0
3	0
1	0
0	0
3	1
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
1	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
0	0
12	1(8.3)

(患者總數 3000, 死亡 284)

年 齡	日 本 人		支 那 人	
	患者總數	死亡數	患者數	死亡數
1歲未満	26	8	2	1
1	154	38	5	3
2	221	33	5	4
3	287	34	8	1
4	223	25	6	2
5	257	30	6	3
6	237	22	4	2
7	171	10	4	1
8	182	6	4	1
9	137	2	4	0
10	113	3	0	0
11	87	6	0	0
12	98	5	0	0
13	59	4	1	0
14	51	2	1	0
15	43	0	0	0
16-20	160	8	4	0
21-25	137	6	3	0
26-30	128	9	3	1
31-35	76	4	1	0
36-40	47	4	0	0
41-45	16	5	1	0
46-50	5	0	0	0
51-55	3	0	0	0
56-60	2	0	0	0
60以上	1	1	0	0
計	2926	264(9.0)	62	19(30.6)

白人 12 = 4 英 + 4 露 + 4 米

第五章 各國ニ於ケル猩紅熱罹患率及死亡率

本文中ノ統計ハ各國ヨリ國際聯盟ニ報告サレタル一九二五年度各種傳染病ノ週又ハ月別ノ罹患數及死亡數⁽²³⁾ヨリ猩紅熱ニ關スル數字ノミヲ摘録シ同時ニ記載サレタル其國又ハ都市人口ニ基キ人口一萬ニ對スル一ケ年ノ罹患率又ハ死亡率ヲ算出セリ表中備考欄ニ分數ノ附シアルハ一ケ年全數ノ報告ナク爲メニ平均率ヲ算出シテ一ケ年數ニ換算セルモノニシテ分子ニ一二ヲ有スルハ月ノ平均ヨリ、又五ニヲ有スルハ週ノ平均ヨリ算出セルモノナリ、例ヘバ52/51トアルハ五一週ノ數字ヨリ一週ノ平均數ヲ算出シ一ケ年ハ五二週ナルヲ以テ之ヲ五二倍セリトノ意ナリ。人口ハ正確ニ其年度ノ人口ヲ示サザルモノアル可キモ其率ニ於テ大差ナシト信ズ。

各國又ハ各地ニ於ケル緯度及等溫線度ヲ記入セルモ是只總括ノ基礎ヲ示セルニ過ギズ。

表中ニ見ル滿洲⁽²⁴⁾及日本⁽²⁵⁾ノ分ハ凡テ一九二五年(大正十四年)度ノミノ數及率ヲ擧ゲテ比較セリ、人口ハ大正十四

年度ノ國勢調査ニ據レリ、而シテ只日本内地トアルハ殖民地ヲ除ク市町村全部ヲ含ミ、日本八十三都市トアルハ市ノミノ數字ヲ意味ス、朝鮮モ亦同様ナリ。

第一節 對人口一萬罹患率

一、各國各地ニ於ケル罹患率

國及市ヲ混合シテ其率ヲ列記セルヲ以テ多少其比較ニ無理ヲ生ズルモ大體ノ比較率ヲ知ルニ便ナルヲ以テ一樣ニ順位中ニ記入セリ。

第二十四表 各國ニ於ケル(對人口一萬)猩紅熱罹患率(1925)

國、地、名	備考	等溫線	緯度	人口	患者數	對人口一萬罹患率
旅順	日本人	10	39	9885	166	169.38
滿鐵沿線	同	6	42	92625	596	64.36
滿洲	同	7	41	181000	1052	58.1
關東洲	同	10	39	91376	459	50.00
Scotland	16市	7	62	2414500	11375	47.12
大連	日本人	10	39	78656	293	37.27
British Columbia		9	50	524882	1440	27.00
England & Wales		10	52	38559000	91461	23.7
Norther Central States		10	45	26251403	60798	23.1
New Engl nd & Middle Atlantic Sta es		10	40	14928722	33936	22.8
滿鐵沿線	日・支	6	42	273159	608	22.2
Ukraine		7	50	26279000	54024	20.5
Ontario		5	44	2933662	5631	19.2
European Russia	Ukraineヲ除ク	4.5	15-70	8174000	153732	18.8
Manitoba, Sascachewan & Alberta		6	52	1956082	3607	18.4
Sweden		3.5	55-65	6036118	10942	17.6
Russia	Total	5	58	13775000	235928	17.1
Canada		2	55	8677238	14685	16.9
U. S. A.	21市	15	40	66766354	111925	16.76
Netherland		8	25-40	7314229	11708	16.0
Latvia		4	57	1886000	2686	14.2
Quebec		6	47	2361199	3105	13.1
Mountain & Pacific States		14	41	7425006	9025	12.5
International Scitlement	上海	20	31	29947	34	11.3
Danzig		8	54	383995	413	10.7
滿洲	日支合計	7	41	1027500	1087	10.57
Hungary	12/11	10	29-43	8158000	8040	9.9
New-Brunswick Novascotia		6	45	911712	902	9.9
Australia		16	32	5777000	5498	9.5
Austria	52/47	10	48	6526661	5761	8.82
Czechoslovakia		9	49	13982726	12332	8.8
Poland	52/46	7	52	28874000	24586	8.6
Denmark		6	48-55	3371900	2819	8.36
Newzealand		10	57	1394000	1049	7.5
Kingdom of Serbs Croats Slovenes		12	42	12492000	9084	7.36
Norway	都市ノミ	3	61	798439	556	6.96
Southatlantic States		20	58-70	7190816	4848	6.7
Lithuania		6	32	2175000	1430	6.6
Bulgaria		13	55	5115112	3351	6.56
Germany		8	43	61892000	39918	6.4
Roumania	12/9	11	51	1675000	10640	6.35
關東洲	日支	10	47-55	757365	479	6.3
Suisse		12	47	3902000	1991	5.1
Finland		0	64	3435249	1667	4.9
Italy	52/49	15	42	39659944	15050	3.8

(1751)

二、世界地方別ニ據ル罹患者

日本内地八十三都市ハ對一萬人口率僅ニ一人ニシテ日本内地全部ノ罹患者ハ一層少ク僅ニ〇・三人ニ相當ス、滿洲ノ支那人ノ罹患者ハ極メテ少ク〇・四人、台灣ハ〇・二五人ニ相當ス。

第二十四表ヲ觀ルニ各地ノ罹患者中最高ヲ示スハ滿洲在住ノ日本人ニシテ（實ニ一萬人ニ就キ五八・人ノ罹患者トナリ大正十四年度ノ旅順ノ如キハ一六九人ニ當ル）スコットランド、北米、英國、露國、スウェーデン等ノ北方部之ニ次グ熱帶地方ハ其率最モ少シ。

國、地、名	備考	等溫線	緯度	人口	患者數	對一萬人口率
Irish free States		10	53	3161000	1194	3.8
Trans Cascaisia, Siberia		0	60	29756000	9433	3.2
Central Asia			49-70			
朝鮮	12市	10	38	814727	308	3.78
South Central State		20	32	10970447	3133	2.85
Uruguay	$\frac{12}{11}$	15	35	1640214	412	2.51
Saar territorg		12	49	763196	193	2.52
France		14	47	39400000	7809	1.98
Tunisia		22	37	2093939	381	1.8
Belgium	$\frac{52}{49}$	10	51	7607000	1037	1.36
Malta		8	36	223088	28	1.25
Gibraltar		17	36	17324	2	1.2
日本内地	83市	15	36	12903600	1334	1.03
Hawaii		23	20	275688	22	0.8
大連	支那人	10	39	199466	16	0.65
上海	支那人	20	31	842000	63	0.75
Turkey	$\frac{12}{11}$	15	38	13357000	991	0.74
Cuba	$\frac{24}{18}$	25	22	3260649	231	0.71
滿洲沿線	支那人	6	42	180534	12	0.67
旅順	支那人	10	39	106723	7	0.65
Greece		16	37	6435000	379	0.59
Palestina	$\frac{12}{11}$	22	32	757182	43	0.57
Algeria	$\frac{52}{51}$	22	35	5506090	314	0.54
Estonia		4	58	1113621	566	0.51
朝鮮		10	38	17626760	842	0.478
Tripolitania	$\frac{12}{5.5}$	23	32	550000	25	0.45
滿洲(全)	支那人	7	41	846500	35	0.41
日本内地		15	38	58482000	2187	0.37
關東洲	支那人	10	39	665989	23	0.35
Panama Canal zone		25	8	122559	4	0.32
Buenosaires		13	35	842654	42	0.23
臺灣		23	24	323757	5	0.15
Mexico	$\frac{20}{10}$	25	22	13887080	205	0.15
Irag (Persia)		23	32	2849282	36	0.13
Egypt	$\frac{52}{51}$	23	30	13717000	127	0.092
Spain	$\frac{12}{7}$	18	40	21941721	171	0.08
Jamaica		25	18	894413	6	0.067
Lima		21	12	190000	1	0.053
Cyprus		21	35	326250	1	0.03
Southern Rhoalsia		22	20	899187	2	0.022
Cyrenaica		22	32	225000	0	0
San Paulo		25	8	741300	0	0
Pernamluco		25	8	32900	0	0
Riodejaneiro		22	23	1420739	0	0
Caelao		21	12	60106	0	0
Dominion Republic		25	15	897405	0	0
Haiti		25	15	1631260	0	0

第二十五表 世界地方別ニヨル對人口罹患率ノ比較

地方	人口	患者數 (1925)	對人口一 萬罹患率	順位
Canada	8677237	14685	16.9	I
U. S. A.	67042042	111947	16.76	II
Mexico, West India	20693431	446	0.215	IX
South Amerika	6215007	455	0.7	VI
Africa	32291216	849	0.26	VIII
Europe	452407823	484953	10.719	III
Central Asia Siberia, China,	17289714	1071	0.6	VII
Japan	107764207	13646	1.266	V
Australia	7171000	6545	9.12	IV

第二節 對人口十萬死亡率

一、各國ニ於ケル死亡率
一九二五年度及最近十ヶ年又ハ五ヶ年(括弧内ニ示ス)ノ平均率ヲ見ルニ第

二十八表ノ如ク滿洲在住ノ日本人最高位トナリ人口十萬當五・四人死亡トナル、ブルガリア、カナダ、ユゴースラビア、ルーマニア、チュッコスロヴァキア之ニ次ギ何レモ人口十萬ニ就キ九人ヲ下ラズ、而シテ罹患率ノ高キ英、米ニ於ケル死亡率ハ比較的少ク三・六―三・八人ニ當ル、即比較的善性ナリト思惟シ得可シ。

而シテ一九二五年度ニ於ケル死亡率ガ累年ノ夫ニ比較シテ増加セルハ滿洲、ブルガリア、カナダ、オウストラリア

第二十六表 緯度ト(對人口一萬)罹患率比較(1925)

緯度	人口	患者數	對人口一 萬罹患率
61度以上	12684306	24540	19.35
51-60度	269789827	344590	12.77
41-50度	215103368	210839	9.8
31-40度	172602147	53803	3.12
21-30度	30860729	563	0.18
8-20度	4945512	34	0.07

第二十七表 等温線ト(對人口一萬)罹患率比較(1925)

等温線	人口	患者數	對人口一 萬罹患率
0-5	127699089	185213	14.5
6-10	277680972	372862	13.4
11-15	258327820	163641	6.3
16-20	53427343	14156	2.7
21-25	48192984	1397	0.3

三、緯度及等温線ニ據ル罹患率
第二十四表中ノ各地ヲ世界大洲別ニ合算シテ何レノ地方ニ濃厚ナルヤヲ見ルニ其順位第二十五表ニ示ス如クカナダ、北米合衆國、歐洲、オウストラリア、亞細亞ノ順トナル。
及第二十七表ニ見ル如ク緯度ノ進ムト共ニ又等温線度ノ下ルト共ニ平
行シテ其罹患率ノ著明ナル増加ヲ示ス。

第二十八表
各國ノ對人口十萬猩紅熱死亡率

國及地方名	年次	對人口十萬 死亡率	最近十ヶ年平均 () 五ヶ年平均
滿洲(日本人)	1925	51.4	
Bulgaria	1924	27.1	21.3
Canada	1925	17.0	4.6
Yougoslavia	1924	16.2	(18.8)
Dauzig	1924	11.5	
滿洲(日支人)	1925	10.6	
Roumania	1924	10.5	
Czechoslovakia	1924	9.0	
Lithuania	1924	7.0	
Irlande du Nord	1924	6.9	
Italy	1924	6.2	
Poland	1924	5.8	(8.9)
Scotland	1924	5.4	
Hungary	1924	4.1	
Sweden	1919	4.0	5.4
U. S. A.	1923	3.2	3.8
England & Wales	1924	2.3	3.6
Australia merionale	1924	2.0	1.4
Corea	1924	1.9	
Spain	1914	1.4	
Tasmania	1924	1.4	1.4
Victoria	1923	1.2	1.5
Urgnay	1924	1.2	
Denmark	1924	0.9	3.6
Newzealand	1924	0.93	
Saarterritory	1924	0.92	
Netherland	1924	0.74	2.8
Greece	1925	0.6	
Austria	1924	0.43	
Nouvelle Galle de Sud	1923	0.4	1.8
Australie occidentale	1922	0.3	1.0
滿洲(支那人)	1925	0.4	
Mexico	1924	0.38	
Havana	1924	0.25	
日本	1924	0.2	
Queens land	1923	0.2	
Turkey	1924	0.15	
Norway 都市	1924	0.13	3.0
Egypt	1924	0.05	

ア等ニシテ減少ヲ見タルハユゴースラビア、ポーランド、スウェーデン、英及米國等之ニ屬ス。

二、各國都市ニ於ケル死亡率

世界七十七都市中滿洲各地殊ニ鐵嶺、遼陽、奉天ニ於ケル死亡率ハ最高率トナル(人口少キニモ據ル可シ)大正十四年度鐵嶺ニ於ケル日本人ノ死亡率ハ十萬人ニ就キ三二二人ニシテ旅順七一人、大連二五人ニ當ル、日本内地ニ於テハ八幡最高率ニシテ三五人トナル。

外國ニ於テハモスコウ最高率ヲ示シ(十萬人ニ就キ九二人)レニングラード、ワルソウ、ブタペスト、ベルクラード之ニ次ギ何レモ十萬人ニ就キ十六人以上ノ死亡率ヲ示スコト第二十九表ノ如シ。

第二十九表
各國都市ニ於ケル對人口十萬猩紅熱死亡率 (1925)

都 市 名	備 考	所屬國名	等 溫 線	緯 度	人 口	猩紅熱 死亡數	對人口十 萬死亡率
鐵 嶺	日本人		5度	42度	2853	9	312.0
遼 陽	同		7	41	5113	15	290.0
奉 天	同		6	42	18000	17	94.5
Moscow			5	56	1756000	1619	92.0
旅 順	日本人		10	39	9885	7	71.43
滿鐵沿線			6	42	92625	66	71.27
Leningrad			4	60	1043000	728	69.79
大 邱	日本人		12	38	44707	24	60.00
撫 順			6	42	15582	9	57.7
長 春			4	44	10089	5	50.0
八 幡			15	34	118376	42	5.0
Lodz			8	52	527242	170	32.3
大 連	日本人		10	39	78656	20	25.44
Warsaw			8	52.5	93117	230	24.70
Budapest			11	47.5	952000	179	18.80
Belgrade			10	45	111740	18	16.14
Triest			13	45.5	238655	30	12.6
Belfast			8	54.5	438000	51	11.64
Liverpool			9	53.5	8518000	92	10.8
Cracow			7.5	50	186563	20	10.75
福 岡			15	34	146005	13	8.7
Prague			10	50	701741	55	7.85
Lille			10	50.5	200952	15	7.5
京 城			11	38	250208	17	6.8
Dudlin			10	53	438000	29	6.62
Glasgow			7	56	1057100	68	6.43
朝 鮮			10	38 (35-44)	814727	48	5.9
Vienna			12	48	1842000	85	4.61
神 戶			15	35	644212	2	3.3
Paris			13	49	2906472	91	3.13
Bucharest			12	44.5	800000	25	3.13
British Iris			9	54	19358825	588	3.03
旅 順	支那人		10	39	9885	3	2.81
Alexandria			20	31	466700	11	2.36
Buenosaires			14	35	1842654	42	2.28
London			10	51.5	4576505	102	2.23
Madrid			17	40.5	783216	17	2.17
Birmingham			10	52.5	946980	20	2.12
大 連	支那人		10	39	199466	4	2.01

都市名	備考	所屬國名	等溫線	緯度	人口	猩紅熱死亡數	對人口十萬死亡率
Strasbourg			12度	49度	166767	3	1.81
Amsterdam			10	52.5	712224	12	1.68
滿鐵沿線			6	42	180534	3	1.66
Milan			12	45.5	847398	14	1.65
Mexico			25	23	615367	10	1.63
Colgne			11	51	711000	11	1.54
Seville			18	37.5	210949	3	1.43
Stockholm			5	59	424944	6	1.41
Spain			17	40	4202263	58	1.38
Germany			8.9	51 (47--55)	1668000	220	1.32
東京			15	35	1995303	24	1.2
Berlin			8	52.5	4012000	43	1.07
Breslau			10	51	563000	6	1.06
München			11	48	690000	7	1.01
Venezia			13	45.5	201076	2	1.0
日本内地			15	36 (32-45)	12993600	126	0.97
Montevideo			14	35	422499	4	0.97
京都			15	34	679976	6	0.88
Copenhagen			7	56	580000	5	0.86
Reval			6	59	122419	1	0.83
Suisse			12.5	47	1098100	9	0.82
横濱			15	35	405888	3	0.82
Brussel			10	51	808000	6	0.74
Balcelona			7	43	145060	1	0.7
札幌			16	41.5	738498	4	0.54
Cairo			20	30	791000	4	0.51
Lima			21	12	190600	1	0.50
Dresden			9	51	610000	3	0.49
Valencia			17	29.5	260329	1	0.38
臺灣			23	23	323757	1	0.31
Genoa			14	44.5	332561	1	0.3
大阪			25	23	432553	1	0.24
Havana			15	35	2114809	5	0.23
Hamburg			7	54	1078000	2	0.19
Oslo			5	60	258729	0	0
Callao			21	12	60100	0	0
Riodezaneiro			22	23	1420739	0	0
Peruambuvo			25	8	320000	0	0
Saspanlo			25	8	741300	0	0

三、世界地方別ニ據ル死亡率

歐洲最高率ヲ示シ十萬人ニ就キ六人ノ死亡率トナル、カナダ、亞細亞、アフリカ、メキシコ、南米ノ順位ニ減退スルコト第三十表ノ如シ。

第三十表

世界各地方ニ於ケル對人口十萬死亡率ノ比較(1925)

地方名	備考	人口	死亡數	對人口十萬死亡率
Europe	都市	116,180,167	7,253	6.24
North America (Canada)		8,677,288	347	4.0
Asia (滿洲、朝鮮、臺灣、内地)	都市	15,069,585	278	1.84
Africa (Alexandria, Cairo)	都市	1,257,700	15	1.15
Mexico & Havana		1,047,920	11	1.0
South America	都市	4,997,292	47	0.94

四、緯度及等温線ニ據ル死亡率

緯度ノ進ムト共ニ又等温線度ノ下ルト共ニ對人口死亡率ハ甚シク増加スルヲ見ル即流行ノ惡性ヲ示スニ足ル乎、第三十一表及第三十二表ノ如シ。

第三十一表

緯度ト對人口十萬死亡率ノ比較(1925)

緯度	人口	死亡數	死亡率
50.5--60° 國	43391511	3600	8.3
40.5--50 "	10658232	601	5.6
30.5--40 "	21356223	326	1.6
20.5--30 "	3583416	16	0.4
0--20 "	1311400	1	0.08

第三十二表

等温線ト對人口十萬死亡率(1925)

等温線	人口	死亡數	死亡率
0--5° 國	3482673	2353	67.6
6--10 "	42294660	1491	3.6
11--15 "	24955670	614	2.5
16--20 "	5459963	73	1.3
21--25 "	4103816	13	0.3

一、各國ニ於ケル累年死亡率

一九一九年ヨリ一九二五年ニ至ル八ケ年間ノ各國ニ於ケル對患者百人ノ死亡率ヲ見ルニ年ト共ニ減退セルハル

第三節

對患者百人死亡率

第三十三表
 各國ニ於ケル對患者百人猩紅熱死亡率

國名	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926
Manchuria (Chinese)			20.0	60.0	12.5	11.1	28.5	42.8
Corea		28.5	29.1	40.8	24.0	24.8	19.8	
Greece					17.2	21.0	8.9	
Yugoslavia	14.08	17.66	18.2	21.54	22.2	20.03		
Bulgaria	19.19	17.73	17.28	25.75	16.83	18.83	14.3	
Italy	21.1	16.0	15.9	21.1	14.4			
Turkey						15.9	18.4	
Roumania	14.5	13.0	13.5	13.9	12.8	10.1	8.7	
Poland	19.19	11.6	13.5	13.9	13.2	10.8	9.56	
Dauzig	5.8	4.3	5.1	2.3	10.3	8.5	2.2	
Manchuria (Japanese)			16.2	5.76	8.70	10.21	8.84	9.28
Japan	8.2	6.6	5.2	5.9	5.6	6.6		
Lithuania				5.9	4.7	6.5	5.87	
Hungary			13.2	15.3	10.7	5.9	6.93	
Czechoslovakia	4.3	3.7	9.6	11.3	7.2	4.8	2.42	
Austria	4.5	5.2	3.0	2.4	2.4	0.7	8.7	
Scotland	1.7	1.4	1.6	1.6	2.1	4.5		
U. S. A.	2.2	2.5	2.5	2.1	2.0			
Canada						2.2	2.54	
Norway	1.6	1.9					0.18	
Newzealand	1.5	1.2	1.3	0.6	0.7	1.1	0.83	
England & Wales	1.5	1.2	0.9	1.3	1.2	1.0		
Denmark	0.8	0.9	1.0	1.5	0.9	1.0		
Netherland	2.0	2.1	1.4	1.0	0.8		0.93	
Australia	2.3	1.7	0.7	0.7	0.7			
Manchuria (日支)			16.3	6.5	8.8	10.23	9.47	10.5

マニア、ポーランド、オランダ、英國ニシテ一九二二—一九二三年度ニ於テ特ニ一時的著明ノ増加ヲ見タルハ朝鮮、ブルガリヤ、伊太利、ユゴスラビア、ツエコスロヴァキア等ナリ。

對患者百人死亡率ノ高率ナルハ滿洲ニ於ケル支那人、朝鮮、希臘、ユゴスラヴィア、ブルガリア、伊太利、トルコ、ルーマニア、ポーランド等ニシテ殆ンド常ニ一〇%以上ニ達ス。滿洲、支那人ハ日本人ニ比シ死亡率著シク高率トナルモ是レ例數少ク且入院治療ナクシテ死亡スル者又ハ治療ノ時期ヲ失スルモノ多キニ基因ス可シ。

第三十四表
各國ニ於ケル對患者百人死亡率(1925)

國 及 地 名	備 考	等溫線	緯 度	患 者 數	死 亡 數	死 亡 率
滿 洲(全)	支那人	6	42	35	10	28.5
臺 灣		23	24	5	1	20.0
Turkey		15	38	909	180	18.9
朝 鮮(全)		10	38	842	167	19.8
同	1 2 市	10	38	308	48	15.6
Bulgaria		13	43	3359	481	14.3
Kigdom of Serbs Croats Slovenes		12	43	9084	1235	13.6
Poland		7	52	21975	2104	9.56
滿 洲	日支人	6	42	1087	103	9.47
日本内地	8 3 市	15	36	1334	126	9.44
Greece		16	37	379	34	8.9
滿 洲	日本人	6	42	1052	93	8.84
Austria		10	48	5209	45	8.7
Roumania		11	47	7980	691	8.7
Hungary		10	47	8040	579	6.93
Lithuania		6	55	1430	84	5.87
Quebec		6	47	3105	172	5.54
Egypt		23	30	21	1	4.76
New Brunswick Novascotia		6	45	902	24	2.66
Canada		2	55	14685	374	2.54
Czechoslovakia		9	49	12332	299	2.42
Manitoba, Sakatchewan Alberta		6	52	3607	86	2.39
Iraq (Persia)		23	33	36	1	2.22
Daulzig		8	54	179	4	2.2
Scotland	1 6 市	7	62	11375	242	2.12
U. S. A.	1923年			157043	3320	2.1
Saarterritorg		12	49	63	1	1.58
Ontario		5	44	5631	81	1.44
Urgnay		15	35	378	5	1.32
England & Wales	1924年			84652	888	1.05
Netherland		8	53	11708	109	0.93
Newzealand		10	42	241	2	0.83
Norway		3	61	556	1	0.18
British Columbia		9	50	1440	1	0.07
Palestina		22	38	40	0	0
Gibraltar		17	36	2	0	0
Panama Canalzone		25	8	4	0	0

二、各國各都市ニ於ケル死亡率(一九二五年度)

原著 黒井・森脇ニ流行病學ヨリ觀タル猩紅熱

三、世界地方別ニ據ル死亡率

中央亞細亞、亞細亞、埃及、歐洲、カナダ、米國ノ順ニ減退スルコト第三十五表ノ如シ。

第三十五表

世界地方別ニヨル猩紅熱死亡率(%)比較 (Lethalite' 1925)

地方名	患者數 (1925)	死亡數 (1925)	對患者百死亡率 (%)
Canada	14685	374	2.54
U. S. A. (1923)	157043	3320	2.1
Panama Canalzone & Wert India	4	0	0
Urgnay	378	5	1.32
Egypt	21	1	4.76
Europe	178323	6797	3.81
Central Asia	985	181	18.4
Asia	3435	397	11.6
Newzealand	241	2	0.83

四、緯度及等温線ニ據ル死亡率

對患者死亡率ト緯度或ハ等温線度トハ何等ノ關係ナキコト第三十六表及第三十七表ニ見ルガ如シ。

第三十六表 緯度ト死亡率(%) (1925)

緯度	患者數	死亡數	對患者百死亡率
61度以上ノ國	11931	243	2.04
50 — 60度	123551	3275	2.66
41 — 50度	58473	3714	6.35
31 — 40度	161130	3833	2.38
30度以下	30	2	6.67

第三十七表 等温線ト死亡率(%) (1925)

等温線	患者數	死亡數	對患者百死亡率
0 — 5	6187	82	1.32
6 — 10	168291	4909	3.06
11 — 15	180150	6039	3.35
16 — 20	381	34	8.9
21 — 25	106	3	2.83

第六章 日本内地、臺灣及朝鮮ニ於ケル猩紅熱

第一節 日本内地ニ於ケル猩紅熱

一、内地全部 人口平均五八八一萬ニ對シ大正十三年一八四三例(内死亡二二二例)ハ同十四年二一八七例ニ上レリ、而シテ對人口一萬罹患率ハ大正十三年〇・三一、十四年〇・三七八トナリ、十三年度ノ對人口十萬死亡率ハ〇・二一人、對患者百人ノ死亡率ハ六六%ニ相當ス。

第三十九表 朝鮮ニ於ケル最近五ケ年間ノ猩紅熱 地83市. 臺灣3市. 朝鮮12市)

市名	患者數	死亡數	對人口一萬率	市名	患者數	死亡數	對人口一萬率
甲府	24	1	0.8	高知	10		0.3
沼津	17	1	1.0	福岡	48	17	0.7
清水	1		0.1	門司	6	2	0.1
靜岡	27	1	0.8	八幡	124	46	2.24
濱松	26	2	0.8	小倉	27	6	1.1
名古屋	102	5	0.3	大田	4	2	1.0
豐橋	9	1	0.3	戶崎	1	1	0.1
岡崎	7		0.3	長崎	31	2	0.3
津	19		0.7	佐世保	3		0.1
四日市	4		0.2	鹿兒島	20		0.4
宇治山田	21	4	0.9	熊本	17	3	0.2
京都	1391	42	4.37	札幌	157	4	2.54
神戸	231	15	0.6	旭川	10	1	0.3
尼崎	1		0.1	小樽	26	2	0.4
姫路	7	1	0.3	函館	56	2	0.7
明石	5		0.3	室蘭	11		0.4
大阪	367	34	0.37	釧路	8		0.3
大塚	49	6	1.0	臺南	30	1	0.3
奈良	22	1	0.9	高雄	1		
和歌山	24	2	0.6	高松	4		
鳥取	3		0.2	京城	893	202	5.2
松江	6		0.3	仁川	202	46	7.2
岡山	28	1	0.5	山浦	93	32	8.6
廣島	16	6	0.2	木浦	89	25	6.7
吳山	17	2	0.3	釜山	625	122	11.7
福山	1		0.1	馬山	23	5	2.0
下關	11	5	0.2	大邱	190	41	5.0
宇都宮	3	2	0.1	平壤	190	29	4.3
高松	26		0.8	南浦	21	9	1.5
丸龜	14	4	1.0	元山	20	7	1.1
徳島	2		0.1	新州	72	17	6.3
松山	3		0.1	清津	15	3	1.5
宇和島	2		0.1				

第三十八表 最近五ケ年間患者 120 以上ノ内地 都市ニ於ケル罹患率及死亡率

	患者數	死亡數	對人口一萬率	對人口一萬死亡率	對患者百死亡率
東京	2,126	90	2.13	0.86	4.06
京都	1,391	42	4.37	1.32	3.02
大阪	367	34	0.37	0.35	9.26
札幌	157	4	2.54	0.65	2.06
八幡	124	46	2.24	8.32	37.09

ニ、内地八十三都市 ノ大正十年以降五ケ年間ノ發生患者總數ハ五七一八例 (内死亡三三三九例) ニシテ對人口一萬罹患率ハ〇.九八、對人口十萬死亡率〇.五八人ニ相當ス、對患者死亡率ハ五.九%ニ當リ、就中十四年度ハ九.四%ニシテ五ケ年間中ノ最高率ヲ示シ、滿洲六ケ年ノ平均死亡率ニ一致ス。

五ケ年間合計一二〇例以上ノ患者發生ヲ見ル都市ハ東京(二二二六例)、京都(二三九一例)、大阪(三六七例)、札幌(一五七例)及八幡(一二四例内大正十四年度發生一一二例ヲ占ム)ノ五市(第三十八表參照)ニシテ以上ヲ除ク他ノ都市ニ於テハ本病ノ重要ナラザルコト第三十九表ノ如シ。

原 著 黒井・森脇ニ流行病學ヨリ觀タル猩紅熱

第四十表

日本各地ニ於ケル累年罹患率、死亡率比較表
(滿洲6ケ年、朝鮮、内地、臺灣5ケ年)

内地、臺灣、
(内)

地方名	備考	期間	人口計	患者數	死亡數	對人口 一萬率	對人口 十萬率	對患者 百率
日本内地	八十三市	1921—1925	58166000	5718	339	0.983	0.583	5.92
臺灣	三市	〃	1515757	35	1	0.216	0.07	2.85
朝鮮	十二市	〃	3580368	2433	538	6.8	15.03	22.15
滿洲	日本人	1921—1926	984600	4053	386	41.00	39.05	10.52
同滿	支那人	〃	4657400	111	37	0.24	0.79	33.33
滿州	日、支人	〃	5642000	4164	423	7.37	7.49	10.16

市名	患者數	死亡數	對人口 一萬率
弘前	11	2	0.6
青森	29	2	1.1
盛岡	27		1.2
秋田	27	1	1.3
山形	8		0.3
鶴岡	9	1	0.7
仙臺	47	1	0.7
福島	4		0.2
若松	2		0.1
郡山	3	2	0.1
水戸	12		0.6
宇都宮	15		0.4
足利	4	1	0.2
前橋	58	4	1.7
高崎	13	3	0.6
相模	7		0.3
川越	3		0.2
千葉	14		0.8
東京	2126	90	2.13
王子	17	1	0.8
八王子	111	4	0.9
横須賀	13		0.4
横濱	5		0.1
新長	2		0.1
富岡	2		0.1
金澤	6	1	0.1
福井	1		0.1
長野	3		0.1
松本	2		0.1
上野	4	1	0.3
岐阜	10	1	0.3
大垣	1		0.1
大津	17		5.7

第二節 臺灣ニ於ケル猩紅熱

主要三都市人口約三百萬ニ對シ五ケ年間ニ僅ニ三五例ノ本病罹患者ヲ出セ
ルノミ、其罹患率ハ〇・二ニ當リ熱帶諸國ノ夫ト大差ナシ、即臺灣ニ於ケル本
病ハ重要疾患ニ非ズ。

第三節 朝鮮ニ於ケル猩紅熱

一、朝鮮人口一七六二六〇〇ニ對シ大正十三年度一三六一例(罹患率對一
萬〇七七人)ノ發生、内三四〇例ノ死亡(對人口十萬一・九三人)アリ、又大
正十四年度ハ八四二例(罹患率〇・四八)ノ發生内一六七例ノ死亡(對人口十
萬〇九人)アリ。

朝鮮全道ノ對患者百人ノ死亡率ハ滿洲ニ於ケル支那人ノ死亡率ト共ニ世
界最高率ヲ示シ大正九年二八五、同十年二九一、十一年四〇八、十二年二
四〇、十三年二四八、十四年一九八ヲ示ス。(國際聯盟月報ニ據ル)

二、朝鮮十二都市ニ於テ五ケ年間ニ發生セル患者ハ二四三三例(罹患率對一

萬六・八（内死亡五三八例）對人口十萬死亡率二五・〇及對患者死亡率二二・二（%）アリ、今之ヲ日本八十三都市ノ合計ニ比較スルニ殆ンド其半數ノ發生ト一倍半ノ死亡數ヲ見ル、即朝鮮ニ於ケル本病ハ滿洲ニ次デ重要ナル疾患ナリト稱スルヲ得可シ。

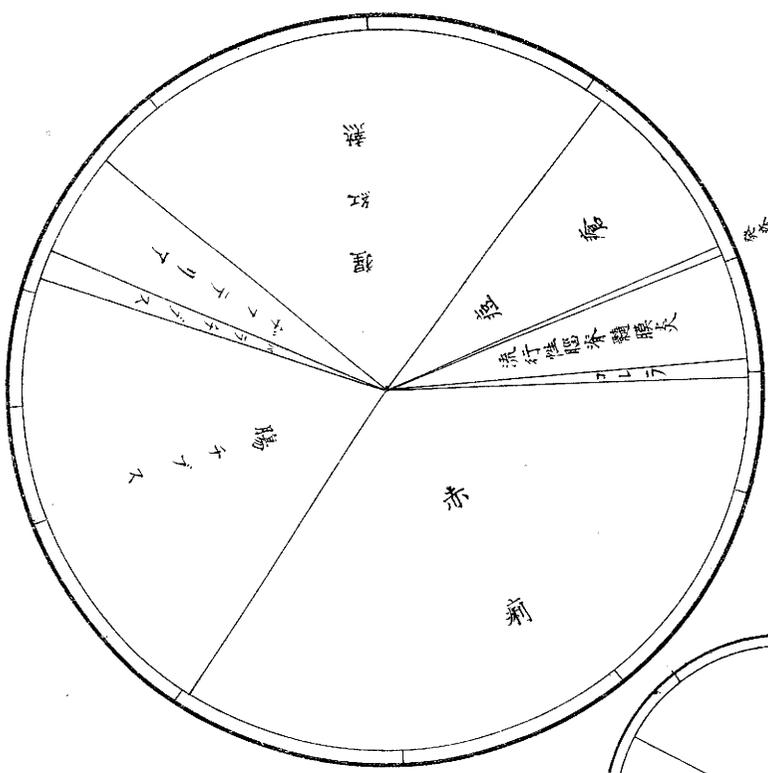
上述ノ日本内地、臺灣及朝鮮ノ最近五ケ年間ノ統計ハ之ヲ第四十表及第四十一表ニ納メ滿洲ノ夫ト比較ヲ便ナラシムル爲メ滿洲ノ總括表ヲ本表ニ加ヘタリ。

第四十一表
滿洲・朝鮮・臺灣及内地ノ年度別罹患率・死亡率
(滿洲6ケ年・其他5ケ年)

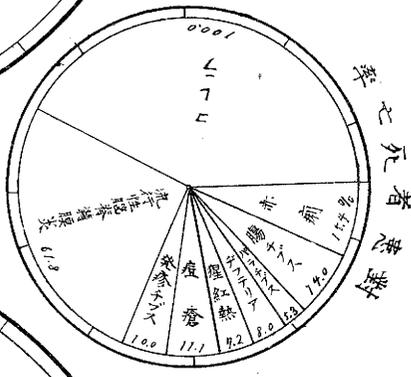
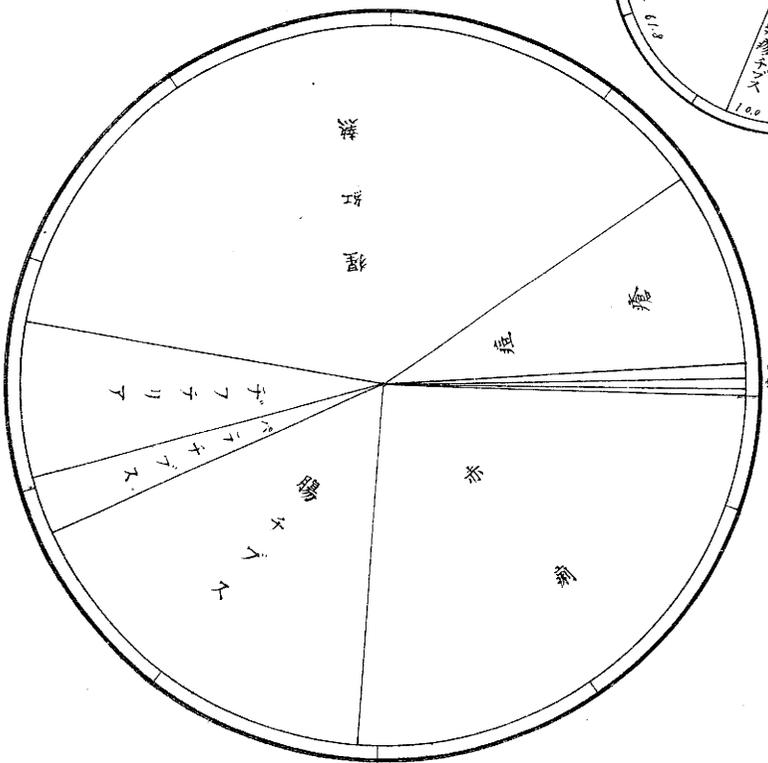
地方名及年度	人 口	患者數	死亡數	對人口一 萬罹患率	對人口十 萬死亡率	對患者百 死亡率	
日本内地 全 部	1924	59138000	1843	0.31	0.2	6.6	
	1925	58482000	2187	0.37			
日 本 八 十 三 内 地 都 市	1921	11154000	1122	1.006	0.403	4.01	
	1922	11877000	1088	0.956	0.475	4.96	
	1923	11610000	1023	0.881	0.448	5.08	
	1924	11870000	1151	0.969	0.522	5.38	
	1925	12160000	1334	1.097	1.040	9.44	
	1921—1925	5816600000	5718	339	0.983	0.583	5.92
臺 灣 三 都 市	1921	283000	11	0.39	0	0	
	1922	293000	4	0.136	0	0	
	1923	303000	12	0.39	0	0	
	1924	313000	3	0.096	0	0	
	1925	323757	5	0.155	0.31	20.0	
1921—1925	1515157	35	1	0.216	0.068	2.85	
朝鮮全道	1924	17626000	1361	0.77	1.93	24.8	
	1925	17626700	842	0.48	0.90	19.8	
朝 鮮 十 二 都 市	1921	6255257	447	7.183	19.040	26.62	
	1922	669000	375	5.608	12.556	22.66	
	1923	713000	568	7.955	16.269	20.42	
	1924	758384	735	9.696	22.559	23.26	
	1925	814727	308	48	3.781	5.906	15.58
	1921—25	3580368	2438	538	6.8	15.028	22.15
滿 洲 日 本 人	1921	142300	327	23.86	36.88	16.20	
	1922	148300	347	23.28	13.42	5.76	
	1923	153300	414	27.78	24.16	8.70	
	1924	172800	460	26.20	26.76	10.22	
	1925	181000	1053	93	58.1	51.4	8.8
	1926	186900	1453	137	76.39	72.01	9.43
	1921—26	984900	4053	386	41.00	36.05	9.52
滿 洲 支 那 人	1921	695000	5	0.07	0.143	20.00	
	1922	720000	5	0.07	0.41	60.00	
	1923	729000	8	0.11	0.14	12.50	
	1924	800400	9	0.11	0.12	11.11	
	1925	846500	35	10	0.41	1.2	28.5
	1926	866500	49	21	0.56	2.42	42.85
1921—26	4657400	111	37	0.24	0.79	33.33	

關東州定傳染病死者死亡者數 (日本日) 圖二第

(七 死)

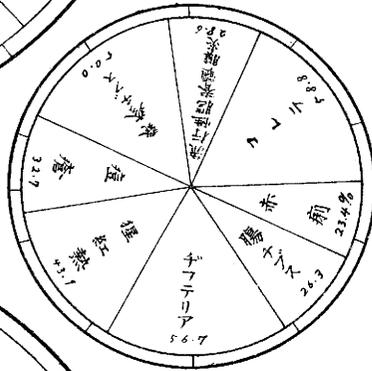


(者 患)

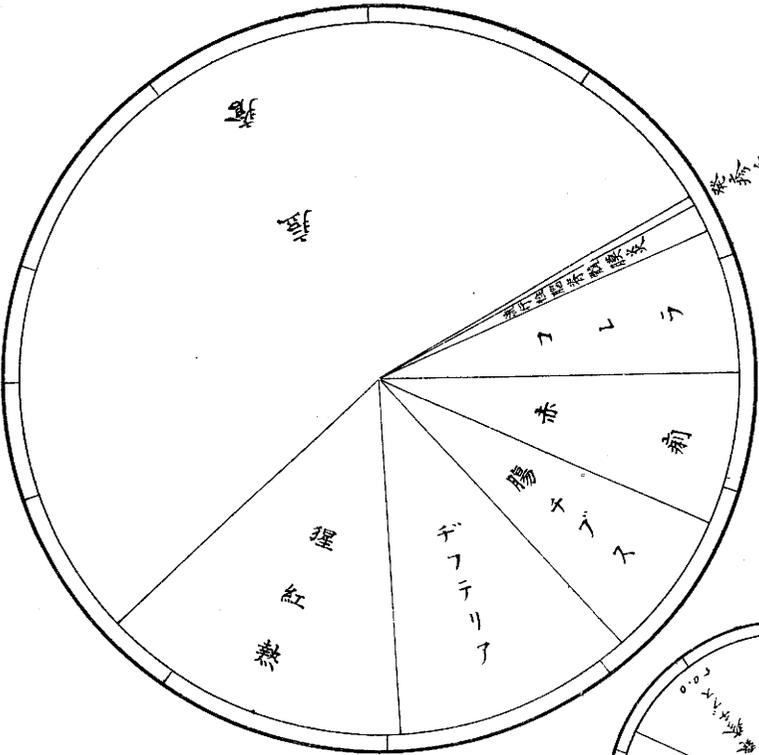


第三圖 大正十五年關東州法定傳染病死者死亡者

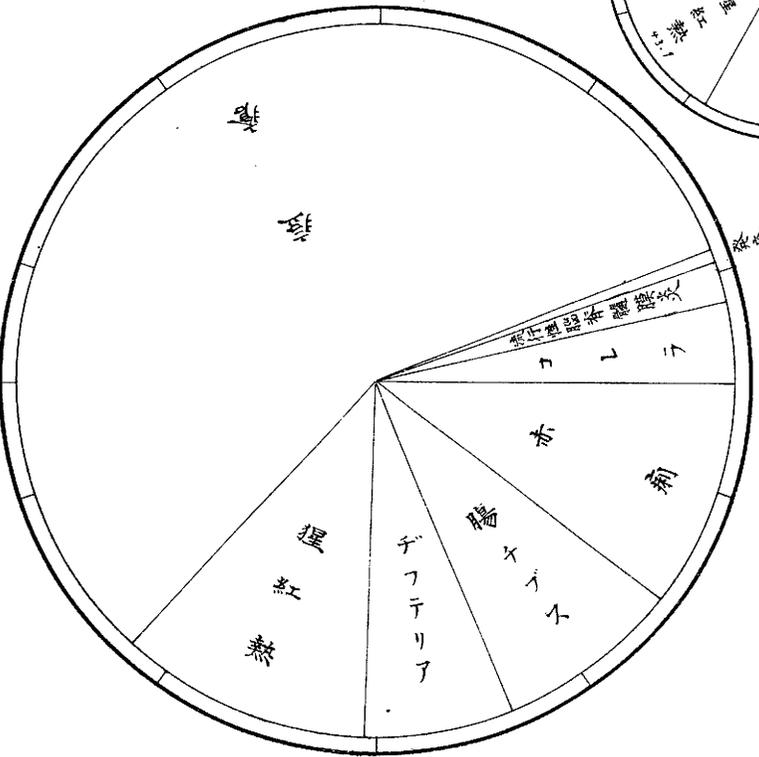
(對死者之患病率)



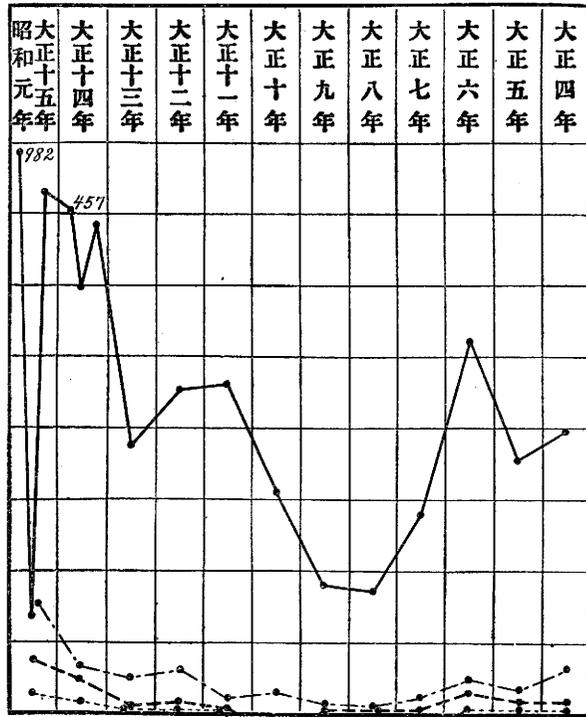
(死者)



(患者)



一六四例(對人口一萬罹患率七三七人)ニシテ内四二三例(對十萬死亡率七五五人)ノ死亡者(對患者死亡率一〇・二六%)



凡例 日本人 支那人 患者者者 患死患死 (實數)

又關東州猩紅熱患者並死亡累年ノ比較ハ第四圖曲線ニ明ナル如ク最近一兩年間ノ本病患者及死亡數ハ未曾有ノ多數ニ上レリ、獨リ關東州ノミナラズ滿洲全般ニ亘リ同様ニシテ大正十年度三三二例ノ發生ハ累年増加シ同十四年一〇八七例、同十五年一五〇二例ニ上リシモ對患者死亡率ハ大正十年ノ一六・二%ヨリ五・八—八・七トナリ、十三年一〇・三%トナリシモ十四年十五年ノ大流行ハ比較的惡性ナリシモ八・八—九・四%ヲ以テ終結セリ。

第二節 全滿洲最近六ヶ年間ノ

罹患率及死亡率

大正十年以降六ヶ年間ノ猩紅熱患者總數ハ四

第七章 滿洲ニ於ケル猩紅熱

第一節 滿洲傳染病ニ於ケル猩紅熱ノ地位

滿洲ニ於ケル傳染病及死亡ノ狀態ハ日、支兩國人ニ據リ自ラ差アリ、日本人ニ於テハ罹患及死亡共ニ猩紅熱其大部ヲ占メ支那人ニ於テハ反之痘瘡主患トナルコト別表第二圖及第三圖ノ示スガ如シ。

第四圖曲線 關東州猩紅熱患者並死亡累年比較表

ヲ出セリ。

一、日本人全滿人口十八萬中ヨリ六ヶ年間ニ四〇五三例(罹患率對人口一萬、四一・〇人)ノ猩紅熱發生シ内三八六例ノ死亡(對十萬死亡率三九・〇、對患者死亡率九・五%)ヲ見タリ。

二、支那人全滿約八十六萬ニ對シテ本病患者ハ六ヶ年間ニ僅ニ一一一例(對人口一萬罹患率〇・二四)ニシテ内三七例死亡(對十萬死亡率〇・八、對患者死亡率三三・三%)セリ。

要之、同シ地域ニ居住スル日、支兩國人ノ本病罹患及死亡ノ狀態ハ著シキ差違ヲ發見ス、即滿洲ニ於ケル日本人ノ對人口罹患率及死亡率ハ共ニ世界第一ノ高率ヲ示スモ其對患者死亡率ハ九五%ナリ、之ニ反シ支那人ノ對人口罹患率及死亡率ハ極メテ低率ナルニ反シ其對患者死亡率三三・三%ハ朝鮮ノ夫ト共ニ實ニ世界第一ノ高率トナル極メテ興味アル對照ナリ。

如何ニ隱蔽ヲ算入スルモ支那人間ノ痘瘡患者ノ高率ナルニ反シ本病罹患ノ尠キハ既ニ疑フ可カラザル事實ナリ、而シテ支那人ノ本病死亡率大ナルハ入院治療ニ至ラズシテ死亡スル者又ハ時日ヲ經過シ既ニ重症トナリテ入院セル者比較的多キニ基因ス可キハ既述ノ如シ。

而シテ日本人ノ罹患率大ナルハ何ニ基因スルヤ、曩ニ行ヒタル日、支「ヂックテスト」ノ結果ヲ比較セルニ同年齡學童ノ「ヂック」反應陽性率ハ支那人ニ比シ日本人ニ著シキ高率ヲ示セリ、勿論日本内地ニ比シ病毒分布ノ濃厚ナルハ想像ニ難カラズト雖モ滿洲ノ風土及氣候殊ニ氣温及乾燥ノ度ハ本病ノ原泉地タル歐洲ノ夫ニ酷似シ本病流行ニ最モ適合セルモノ、如シ。

第三節 關東州及滿鐵沿線ニ於ケル罹患率及死亡率ノ比較

一、關東州全般ノ猩紅熱患者ハ六ヶ年間ニ二三〇七例(罹患率五・四^{0/100})内大連一七四五例(罹患率一一・四^{0/100})及旅順五四〇例(罹患率七八九^{0/100})ナリ、殘二二例ハ貔子窩、普蘭店ニ屬ス、而シテ總患者二三〇七例中日本人二二三八例

(内大連一七〇一例其對人口一萬罹患者四四三及旅順五二二例罹患者八五二^{0/100})及支那人六九例(内大連四四、旅順一八例)ニシテ殆ンド日本人ノミノ罹患者ト見ルモ過言ナラズ。

關東州内二三〇七例ノ患者中死亡總數一九九例(對患者死亡率八六二%)内日本人一七二例(七七%)支那人二七例(四〇%)ニシテ日、支死亡率ハ支那人ニ著シク高率トナル。

二、滿鐵沿線(關東州外)ニ於テハ六ケ年間患者總數一八五七例(内死亡二二四例、死亡率一二%)ニシテ日本人一八一五例(内死亡二二四例、死亡率一二・八%)及支那人四二例(内死亡一〇例、死亡率二三・八%)ナリ。

關東州内外ノ罹患者及死亡率ヲ比較スルニ患者數ニ於テハ州内一〇、州外八ノ割合ニ發生(州外ニ於ケル發生數ハ大連ノ發生數ト稍一致ス)スルモ日支合計對人口罹患者ハ州外ハ州内ニ比シ約二倍、又對人口死亡率ハ約三倍トナリ、患者百人ノ死亡率ハ州内八六%ニ比シ州外ハ一二・〇%トナル。

但之ヲ日、支別ニ見ルトキハ日本人ノ對人口罹患者ハ寧ろ州内ニ高率トナリ支那人罹患者ハ州外ニ高率ヲ示ス、對人口死亡率ハ日支共ニ州外ニ高率ナリ、而シテ就中興味アルハ對患者死亡率ニシテ州内日本人死亡率七七%ニ對シ州外ノ夫ハ一一・八%ナルニ反シ、州外ノ支那人死亡率ハ州内ノ四〇・四%ニ比シ著シク低ク一二・八%ヲ示ス。

但支那人ノ患者數ハ一般ニ極メテ少數ナル爲其%ヲ以テ一般ヲ律スルヲ得ズト雖モ多少注目ニ値ス。

上述ノ一切ハ凡テ六ケ年ノ總計ニ就テ記載セルモノナルモ尙大正十年以降累年ノ本病ニ關シテハ第四十二表ニ明ナリ。

於ケル最近六ケ年間ノ猩紅熱一覽表

關 東 洲					大 連					旅 順				
患者數	死亡數	對人口 一萬罹 患者率	對人口 十萬死 亡率	對患者 百死亡 率	患者數	死亡數	對人口 一萬罹 患者率	對人口 十萬死 亡率	對患者 百死亡 率	患者數	死亡數	對人口 一萬罹 患者率	對人口 十萬死 亡率	對患者 百死亡 率
154	16	20.00	20.78	10.39	139	16	21.25	24.50	11.51	10	0	9.71	0	0
2	0	0.03	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0.10	0	0
156	16	2.37	2.43	10.25	139	16	6.34	7.27	11.51	11	0	1.01	0	0
231	0	28.17	12.20	4.33	159	4	27.77	5.70	2.05	36	6	34.61	57.69	16.66
5	3	0.05	0.50	100.00	0	0	0	0	0	3	3	6.30	2.97	100.00
234	13	3.41	1.90	5.55	195	4	9.34	1.68	2.01	39	9	3.50	7.89	23.07
227	23	27.35	27.75	10.23	150	17	20.35	23.06	11.33	77	6	74.03	57.69	7.79
6	1	0.10	0.16	16.66	2	0	0.11	0	0	4	1	0.39	0.97	25.00
233	24	3.36	3.46	10.52	152	17	5.96	6.68	11.18	81	7	7.17	6.19	8.64
188	19	21.53	21.76	10.10	153	16	20.56	21.50	10.46	35	3	34.31	29.41	8.57
4	1	0.06	0.16	25.00	4	1	0.23	0.55	25.00	0	0	0	0	0
192	20	2.64	2.75	10.41	157	17	6.15	6.66	10.83	35	3	3.02	2.58	8.57
456	27	50.00	29.57	5.9	290	20	37.00	25.44	6.9	166	7	169.38	71.73	4.21
23	7	0.30	1.05	30.43	16	4	0.65	2.01	55.0	7	3	0.65	2.81	42.85
479	34	6.3	4.20	7.1	306	24	11.00	8.63	7.94	173	10	14.83	8.57	5.78
982	77	104.29	81.77	7.84	774	68	95.79	84.16	8.78	198	6	195.06	59.11	3.03
31	15	0.46	2.21	48.38	22	10	1.08	4.92	45.45	3	2	0.28	1.85	66.66
1013	92	13.12	11.92	9.08	796	78	27.96	27.39	9.80	201	8	17.02	6.77	3.98
2238	172	43.53	33.41	7.69	1701	141	44.31	28.21	8.28	522	28	85.15	45.67	5.36
69	27	0.17	0.72	40.44	44	15	0.41	1.38	4.1	18	9	0.29	1.44	50.00
2307	199	5.37	4.63	8.62	1745	156	11.41	9.14	8.93	540	37	78.94	5.41	6.85

(内 3 死亡)支那人 6 (内 3 死亡)アリ。

(1767)

旅順及大連ニ關スル統計ハ既ニ第四十二表中ニ明ナリ、茲ニハ只滿鐵沿線ニ於ケル各地ノ六ケ年間ニ發生セル患者總數及死亡數ヲ發生順ニ列記セバ第四十三表ノ如シ。

第四節 滿洲各地ニ於ケル猩紅熱

第四十二表 滿洲 =

		全 滿 洲					滿 鐵 沿 線				
		患者數	死亡數	對人口 一萬罹 患者率	對人口 十萬死 亡率	對患者 百死亡 率	患者數	死亡數	對人口 一萬罹 患者率	對人口 十萬死 亡率	對患者 百死亡 率
1921	日	327	53	22.86	36.88	16.20	173	37	25.93	55.47	21.38
	支	5	1	0.07	0.14	20.9	3	1	0.27	0.09	33.33
	計	333	54	3.95	6.44	16.26	176	38	9.79	21.14	21.59
1922	日	347	20	23.28	13.42	5.76	116	10	17.31	14.92	8.62
	支	5	3	0.07	0.41	60.00	2	0	0.17	0	0
	計	352	23	4.05	2.65	6.53	118	10	6.41	5.43	8.47
1923	日	414	36	27.78	24.16	8.70	187	113	28.33	19.69	6.95
	支	8	1	0.11	0.14	12.50	2	0	0.17	0	0
	計	422	37	4.80	4.21	8.77	189	13	10.22	7.03	6.88
1924	日	460	47	26.20	26.76	10.22	272	28	30.81	31.74	10.29
	支	9	1	0.11	0.12	11.11	5	0	0.31	0	0
	計	469	48	4.80	4.92	10.23	277	28	11.05	11.17	10.11
1925	日	1052	93	58.1	51.4	8.8	596	66	64.36	71.27	11.07
	支	35	10	0.41	1.2	28.5	12	3	0.67	1.66	25.00
	計	1087	103	10.57	10.2	9.47	608	69	22.2	25.2	11.31
1926	日	1453	137	76.39	72.01	9.43	471	60	49.02	62.45	12.74
	支	49	21	0.56	2.42	42.85	18	6	0.95	3.18	33.34
	計	1502	158	14.21	14.95	10.52	489	66	17.16	23.16	13.50
自1921 至1926 六ケ年	日	4053	386	41.00	39.05	9.52	1815	214	37.97	44.89	11.79
	支	111	37	0.24	0.79	33.33	42	10	0.48	1.14	23.81
	計	4164	423	7.37	7.49	10.16	1857	224	13.68	16.50	12.06

備考 各地ノ人口ハ大正九年及十四年國勢調査ノ結果ヨリ各年ノ人口ヲ算出セリ。
旅大以外ノ關東洲ヨリ大正十年日本人 5 支那人 1, 及大正十五年日本人 10

第四十三表

滿鐵沿線各地ニ於ケル患者數、死亡數及對患者死亡率(大正十年ヨリ十五年ニ至ル六ケ年計)

地名	六ケ年計	患者總數	内支那人數	總死亡數	内支那人數	全死亡率(%)
奉天	天	486	5	59	0	12.1
撫順	順	268	3	16	1	6.0
長春	春	221	10	37	4	17.2
安東	東	178	1	13	0	7.3
遼陽	陽	125	1	19	0	14.8
鞍山	山	90	0	12	0	13.3
營口	口	88	8	12	1	13.7
開原	原	80	7	7	0	8.8
大石	石	74	2	11	0	14.8
橋嶺	嶺	71	0	14	0	19.7
四平街	平街	68	3	15	2	22.0
本溪湖	溪湖	54	0	2	0	3.7
公房	公房	42	2	4	0	9.5
瓦房店	瓦店	35	0	3	0	8.4
計	計	1880		226		12.0
内種	内種	23		2		8.7
日支	日支	1815	42	224	10	12.1

第八章 大連療病院ニ於ケル猩紅熱

第一節 各年度ニ於ケル患者數及死亡數

大連療病院收容患者三〇〇〇例ノ人種別、性別及年齡別ニ就キテノ詳細ハ既ニ記載ノ如シ、而シテ大正元年ヨリ昭和二年五月ニ亘ル三〇五九例(内二九四例死亡、九六%)中日本人二九八四例(内二七四例死亡、九二%)ヲ占メ支那人僅ニ六三例(内一九例死亡、三〇%)及白人一二例(内死亡一)ニシテ各年度別ニ據ル收容數ハ第四十四表ノ

如シ。

尙旅順療病院ニ於ケル大正元年ヨリ大正十五年ニ至ル十五ケ年間本病患者數ハ七三六例ニシテ日本人七一〇(内三〇名死亡)、支那人二六例(内四名死亡)ナリ。

第四十四表 大連療病院收容猩紅熱患者3059例ノ年度別人種別及死亡率

大正元年	總計		日本人		支那人		白人	
	患者總數	死亡總數	患者數	死亡數	患者數	死亡數	患者數	死亡數
2	101	20	96	18	3	1	2	1
	159	3	158	3	1			
		20.0		18.8				
		1.9		1.9				

3	135	34	25.2	133	33	24.8	2	1										
4	182	25	13.7	78	24	13.5	4	1										
5	145	15	10.3	135	13	9.6	9	2										
6	226	23	10.2	222	22	9.9	4	1				1						
7	116	13	11.2	115	13	11.3	1											
8	78	2	2.6	75	2	2.7												
9	71	6	8.5	70	6	8.6												
10	140	19	13.6	137	19	13.9	1											
11	196	4	2.0	196	4	2.0												
12	148	16	10.8	146	16	11.0	2											
13	154	14	9.1	151	13	8.6	3	1										
14	303	27	8.9	288	21	8.3	15	6										
15	737	66	9.0	719	60	8.3	17	6				1						
16(一月4)	168	7	4.2	165	7	4.2	1											
計	3059	294	9.61	2984	274	9.2	63	19				300						8.3

第二節 猩紅熱罹患ト體質、職業及社會的地位

一、體質 本病感染者ヲ見ルニ支那苦力ノ如キ銅色屈強ノ者極メテ稀ナリ、殊ニ小兒ニ於テハ多クハ所謂纖弱特ニ皮膚ノ「ツアルト」ニシテ眉目秀麗ノ者比較的多ク且ツ頸部淋巴腺ノ慢性腫脹及慢性扁桃腺肥大ヲ有スル如キ兒童比較的多キガ如キ感アルモ統計的ニハ體質上特ニ認ム可キ著變ナキ者多數ヲ占ム、剖見例ニ於テハ胸腺淋巴體質ヲ有スル者比較的多ク殊ニ一家同胞數名ノ死亡ヲ見ル如キ例ニ於テハ特ニ其然ルヲ見ル。

二、職業 從來本病ノ罹患率ハ何職ニ多シ云々ノ記載ヲ見ルモ其職業者ニ對スル對人口の罹患率ヲ示セル者アルヲ知ラズ、例ヘバ大連市民八萬中滿鐵會社員又ハ其家族ト稱スルモノ其約半數以上ニ達ストセバ從來諸家ノ報告ニ見ル如キ對患者率ヲ以テ本病ハ會社員ニ多シトナス事是レ全ク無意味ナリ、余等ハ大連ノ職業別人口ヲ知ラズ、故ニ之ヲ扣除ス。

三、社會的地位

ベールンド

(15) 氏

ノ本病一五八四人中三二・五%ハ上層ニ六二・九%ハ下層階級ニ屬ス即一見下層者

ニ多キガ如キモ下層者全人口ニ對スル罹患率ハ上層者人口ニ對スル上層者患者ノ罹患率ヨリ低シ、即富者ノ罹患率ハ貧者ノ夫ノ倍數ヲ占ムト余等ノ場合數字的ニ之ヲ證シ得ズト雖モ余等モ亦コレト感ヲ同ジクスルモノナリ。

第三節 猩紅熱ノ病歴

一五〇〇例ノ確實ナル猩紅熱ニ就テ其病歴日數、入院迄ノ在宅日數及入院治療日數ヲ調査セルニ退院迄ノ病歴ハ平均三三七日ニ當リ死亡迄ノ平均ハ一〇四日トナル、而シテ治療退院者ノ發病後入院迄ノ在宅日數(二二日)ハ死亡者ノ夫ヨリ平均半日早ク治療日數ハ三一六日トナル、即在院日數ハ歐米ノ夫ニ比シ稍々短キモ所謂「リターンケース」ハ歐米ノ率ヨリ著シク少シ。詳細ハ後述ノ家族傳染ノ條下ニ讓ル。而シテ轉歸マデノ病歴ニ關スル總括及細別ハ第四十五表及第四十六表ニ於テ觀ル如シ。

第四十五表

猩紅熱轉歸迄ノ病歴日數・在宅日數及入院治療日數調査表 I.

自大正十年一月至昭和二年四月} 大連療病院入院 1500例

	治癒者 1384線	死亡者 116部
發病後入院迄ノ在宅日數(一人平均)	2.1	2.6
入院治療日數	31.6	7.8
發病ヨリ轉歸迄ノ日數	33.7	10.4

第四十六表

猩紅熱轉歸迄ノ病歴日數・在宅日數・入院日數調査表 II.

(大連療病院患者 1500 例 = 治癒 1384 + 死亡 116 例)

	轉歸迄ノ病歴日數	例數	病歴延日數	發病ヨリ入院迄ノ在宅日數	入院治療平均日數
治癒者	21-25	110	2698	215	31.64
	26-30	430	12239	736	
	31-35	439	14454	866	
	36-42	218	8019	482	
	42以上	187	9225	562	
計	1384	46635	2861		
平均日數			33.7	2.06	
死亡者	1-5	27	100	36	7.8
	6-10	52	393	126	
	11-15	14	183	46	
	16-20	12	210	49	
	21以上	11	315	46	
計	116	1201	303		
平均日數			10.4	2.6	

第四節 家族感染

大正元年以降十五ヶ年間患者三千例中ノ家族感染者ハ實ニ多數ニ上リ三〇九家族中ヨリ九三六例ノ患者ヲ出セリ、而シテ家族感染ハ流行ノ性質ニ據リテ差アリ大正十四年十二月ヨリ昭和二年四月マデノ悪性流行中ノ患者一〇四八例中ノ家族感染ヲ調査セルニ左ノ如シ。

一、一家二名以上ノ患者ヲ出セル家族數及患者數

二、一家二名以上死亡者ヲ出セル家族數

第四十八表ノ示ス如ク七家族ヨリ十五名ノ死亡者アリ内一家三名死亡者ノ解剖的所見ハ著明ノ胸淋巴體質ヲ認メタリ。

三、家族感染ニ於ケル發病關係調査

第四十七表

一家二名以上ノ患者ヲ出セル
家族數及患者數

自大正十四年十二月一日 患者數1048例中ノ家族感染
至昭和二年四月廿日

	一家二名以上ノ患者ヲ出セル家族	一家三名以上ノ患者ヲ出セル家族	一家四名以上ノ患者ヲ出セル家族	一家五名以上ノ患者ヲ出セル家族	計
家族數	89	25	8	2	124
患者數	178	75	32	10	295

備考 (最近十五ヶ年間患者3000例中ノ家族感染ハ309族中936例ノ患者ヲ出セリ。)

第四十八表

一家二名以上死亡者ヲ出セル
家族數(最近1048例ノ患者中)

	一家二名以上死亡	一家三名以上死亡	計
家族數	6	1	7
死亡數	12	3	15

備考 (一家二名以上罹患者124例中ノ死亡者295例中死亡ハ37例ナリ。)

大正十四年十二月以降悪性猩紅熱流行ニ際シ本病患者一〇四八例中ノ家族感染即一家二名以上罹患者ハ一二四戸ニシテ二九五例ノ患者ヲ示セリ、而シテ一家中ノ第一患者發病ヨリ續發患者發病迄ノ日數、第一

患者隔離後續發患者發病迄ノ日數及第一患者退院後續發患者發病迄ノ日數等ヲ標準トシテ調査セルニ其結果第四十九表ノ如シ。

第四十九表ヲ觀ルニ

(イ)、一家中第一患者發病後第二患者ノ發病ヲ見ルハ、多ク一週間以内ニシテ續發患者一六二例中一一二例ヲ占ム、殊ニ

(1771)

第四十九表
 家族感染ニ於ケル發病關係調査表
 (自大正十四年十二月 124 家族中ノ
 至昭和二年四月 發生患者 295 例ノ調査)

日數	發病者第I患者ノ日數	發病者第II患者ノ日數	入患者第I患者ノ日數	入患者第II患者ノ日數	退院者第I患者ノ日數	退院者第II患者ノ日數
0	24		31			
1	29		34			
2	20		17		1	
3	15		7		5	
4	8		13		1	
5	5		4		1	
6	3		5		1	
7	8		7			
8	4		3			
9	4		2			
11	5		4			
11	4		4		2	
12	3		4		1	
13	2		0			
14	1		1			
15-21	10		10			
22-28	3		3			
28以上	14		13 (内第一患者ノ感染例)		3 (退院後ノ患者)	
計	162		162		15	

(ロ)、患者入院隔離後ノ續出者モ亦上述ト
 同様ニシテ隔離後ノ續發者一六二例中
 一週以内ニ發病セルモノ一八例ニシ
 テ入院後四日以内ノ發病者最モ多ク一
 三日以内ニ發病セルモノ多ク八八例ニ
 達ス、第一患者發病後一週以上ヲ經テ
 續發者ヲ出セル八五〇例ニシテ四日以
 上ヲ經テノ發病者ヲ算スルモ六六例ニ
 過ギズ。

○二例ニ達スルモ之等ハ凡テ第一患者ノ入院前既ニ感染セリト見ル可キモノナリ、(曩ニ大連ニ於テハ悪性大流行ニ
 際シ四日間自發的ニ家庭ノ交通ヲ遮斷セシメタリ)、而シテ入院後七日以上ヲ經テ續發者ヲ見タルハ四四例ナルモ中
 一二例ハ退院シテ歸宅セシ前患者ヨリ感染セリト認ム可キ所謂「リターンケース」ナルヲ以テ殘三二例ハ第一患者ト
 ノ直接關係ナクシテ發病セリト認ム可キモノニシテ、病院トノ交通ニヨリ、或ハ新ニ他ヨリ感染セリト看做スニ可
 キモ亦通常ヨリ永キ潜伏期ヲ經テノ發病ヲモ考慮セザル可カラズ。

(ハ)、「リターンケース」(ハイムケールファル) 上述ノ如ク第二患者ノ發病ハ第一患者ノ未ダ退院セザル間ニ罹患ス

ルモノ大多數ニシテ一六二例中一四七例ヲ占ム。(内一八例ハ第一患者入院前既ニ感染セリト認ム可キハ上述ノ
 如シ) 殘リ一五例ハ第一患者退院後ニ發病セルモノ内三例ハ第一患者退院後四週(五週一名、二ヶ月以上二名)以上ヲ
 經過シテ發病セルヲ以テ其病因ヲ直ニ退院歸宅セル前患者ニ歸セシメ得ズ、故ニ所謂「リターンケース」ト認ム可キ
 ハ一二例ニシテ第一患者退院後二日目一例、三日目五例、四―五―六日及十二日目各一例ヅ、尙十一日目二例ノ發

病ヲ見タリ、即本例ヨリ猩紅熱ノ潜伏期ヲ推測スルニ二日乃至六日ヲ以テ當レリト云フ可ク就中三日目發病ノ者殊ニ多シ。

上述ノ如ク「リターンケース」ハ余等ノ場合續發者ヲ標準トセバ一六二例中一二例即七・四七%トナルモ歐洲ノ文獻ハ凡テ退院者ヲ標準トシテ其率ヲ算出セルヲ以テ之ト對比上余等ノ場合退院者數ヲ見ルニ一〇四八例中八八例死亡セルヲ以テ治癒退院者九六〇例ニシテ余等ノ「リターンケース」率ハ一二・五%トナル、之ヲ今外國ノ文獻ニ徵スルニ「ホスピシル」⁽²⁶⁾氏ハ三・二五%、⁽²⁷⁾「ポストン市病院」ノ例ハ一・五%ニシテ退院ノ早キニ比シ余等ノ「リターンケース」ハ比較的少シ。

第五節 合併症及症狀ノ統計的觀察

流行ノ性質ニ據リ又其時ノ觀察者ノ如何ニ據リ其%ヲ異ニス、大正五年及九年上半年ニ於ケル當院收容猩紅熱二五例ノ合併症調査ハ蛋白尿(二・二%)、腺炎(三・二%)、中耳炎(二・二%)、氣管支炎(一・三%)、腸炎(九・一%)、

第五十表 今次流行猩紅熱六一五例ノ臨牀的症候綜括表

發 疹	卅	251	40.8
	十	358	58.2
	士	6	0.9
落 屑	膜 狀	129	23.9
	糠 狀	395	73.2
	—	15	2.7
口 峽 炎	卅	198	32.1
	十	415	67.4
	—	2	0.3
腺 炎	1 週	190	31.0
	2 週	86	16.9
	3 週	25	4.0
中 耳 炎	1 週	12	1.9
	2 週	49	7.9
	3 週	40	6.5
乳 突 炎		21	3.7
結 膜 炎		7	1.1
チフテリイ		29	7.6
覆盆子狀舌		222	36.
初期蛋白尿		33	5.3
腎 臟 炎		44	7.1
肝 腫 腫		195	31.8
脾 腫 腫		13	2.1
腸 炎		17	2.7
氣 管 枝 炎		115	18.6
膿 胸 炎		3	0.4
肺 炎		9	1.4
心 內 膜 炎		1	0.1
辜 丸 炎		1	0.1
恢復期熱發		22	3.5
瘧 疾		10	1.6
疹 再 發		4	0.6
關 節 炎		24	3.9
咽 頭 痛		342	65.1
腰 痛		13	2.4
頭 痛		81	15.4
口 渴		163	31.2
惡 心		218	41.5
嘔 吐		191	36.3
下 痢		74	14.1
瘙 疹		361	68.7
死 亡 率		72	11.7

(1774)

腎炎(三・八%)、鼻炎(〇・七六%)、「蕁麻疹」様發疹(〇・七六%)、尿毒症(〇・三・八%)其他(五%)ナリ。

而シテ大正十四年十二月以降悪性且未曾有ノ大流行猩紅熱患者六一五例ノ合併症及主要症狀ノ率及數ヲ舉グレバ第五十表ノ如シ(本流行中ノ臨牀的詳細ハ森脇ノ別著アルニヨリ之ヲ除キ只其率ノミヲ記載スルニ止ム)

第六節 猩紅熱患者退院ノ標準

滿洲ニ於ケル猩紅熱ノ現狀ハ豫防上ニハ勿論行政上ニ於テモ亦何等カノ具體的發展ヲ必要トス、大連及旅順療病院ニ於テハ從來ノ患者退院標準ニ加フルニ咽頭ニ於ケル猩紅熱連鎖狀球菌ノ有無ヲ一週二回宛培養檢索シ二回連續陰性トナルヲ俟ツテ退院ヲ許可ス、從來ノ標準ニ據レバ合併症全ク治癒シ落屑終リ六週以上トナルニ及ンデ退院ヲ許可セシ者ヨリ「リターンケース」(ハイムケールファル)ヲ出セシ例アリ、又一ヶ月以内ニシテ落屑未ダ全ク終結セザル者ノ退院後兄弟ニ感染ナキ例枚舉ニ遑アラズ、要スルニ防疫上一定セル退院ノ標準ヲ缺ク如キ現狀ニ於テハ咽頭ニ於ケル猩連菌ノ有無ヲ參考トナス事防疫上ノミナラズ病原問題考究ノ上ニ最モ重要ト信ゼラル。斯クノ如ク當院ニ於テ從來ノ標準ニ加フルニ本菌ノ有無ヲ參考トセル結果ハ六週以上ニシテ合併症ナク落屑終リ既ニ從來ノ標準ニ據ツテハ既ニ退院ヲ許可ス可キ患者ニシテ尙咽頭ニ猩連菌ヲ有スル場合亦尠シトセズ、斯カル例ニ退院ヲ命ジタルニ忽チ同胞ニ感染セシメタリト思惟ス可キ例アリ、又一ヶ月以内ニ退院セシムルモ咽頭ニ本菌ヲ檢出シ得ザル場合ハ未ダ「リターンケース」ヲ見ズ、之等ノ例數未ダ多カラザルモ病原問題ニ興味アルヲ以テ茲ニ之ヲ記載ス。最近フリーデマン、ダイヒヤ⁽²⁸⁾氏等ハ當院ト同様本菌ヲ參考トシテ退院セシメタル患者中本菌陽性者ヨリ一九%ノ「リターンケース」ヲ見シニ本菌陰性者ヨリ未ダ一例ノ「リターンケース」ヲ見ズト云フ。

第九章 今次猩紅熱大流行ノ地方的消長

大正元年以降十三ケ年間ノ當院收容猩紅熱患者數ハ平均一ケ年一四三例ナルモ大正十四年三〇三例、十五年ハ實ニ

七三七例ノ入院ヲ見タリ(曲線第五圖參照)斯クノ如ク大正十四及十五年ハ當地方未會有ノ大流行ト稱ス可ク殊ニ十四年十二月ヨリ十五年六月ニ至ル七ヶ月間ハ最モ激烈ニシテ六一五例ヲ收容シ七三例(一一・八%)ノ死亡者ヲ出セリ。

而シテ大正十四年二月當院ニ於テハ大連市中各小學生徒ニ對シ「デックテスト」ヲ行ヒ引續キ豫防接種ヲ開始セリ。人或ハ曰ク「デックテスト」ヲ開始シテ以來未會有ノ大流行トナレリト、大連ニ於ケル大流行ハ「テスト」開始以後ニ當レルハ事實ナリ。而シテ今次ノ大流行ガ果シテ當院ノ行ヒタル「テスト」又ハ豫防接種ニ基因スルヤ、余等ハ限リアル紙上蛇足ヲ加フルノ感ナキ能ハザルモ茲ニ「テスト」又ハ豫防接種ヲ行ハザル地方ニ於ケル本病ノ流行及其時期ヲ目的ノ標準トシテ大正十三—十四—十五年ノ三ケ年ニ亘リ滿洲各地ノミナラズ歐洲及日本ノ流行狀態ヲ調査セルヲ以テ茲ニ之ヲ記載シ今次流行ノ狀態ヲ明ニセントス。

第一節 滿洲ニ於ケル今次猩紅熱流行ノ消長

大正十、十一及十二年ノ三ケ年ニ於ケル滿洲全般ノ本病患者數ハ僅ニ一一一六例ニシテ大正十三、十四及十五年ノ三ケ年間ニ於テハ實ニ三〇四八例ノ多數ニ上レリ、而シテ當時「デックテスト」又ハ豫防注射ヲ行ハザリシ關東州外ノ本患者ハ大正十、十一及十二年ノ三ケ年間ニ僅ニ四八三例ヲ出シ十三—十四—十五年ノ三ケ年間ニ一三七四例ノ多數ニ上レリ、即今次ノ流行ハ獨リ關東州内殊ニ大連ニ限ラズ當時「テスト」又ハ豫防接種ヲ行ハザリシ滿鐵沿線ニ於テモ未會有ノ大流行ナリシハ想像ニ難カラズ、而シテ之ヲ數字のニ證明センニハ最近三ケ年間ノ滿鐵沿線ニ於ケル對人口羅患率ヲ比較セザル可カラズ、蓋シ對人口羅患率ハ其地方ニ於ケル本病感染ノ濃度ヲ示スヲ以テナリ、而シテ對人口一萬羅患率ハ滿洲全般ニ就テ大正十三年四・八ナリシモ十四年其五分ノ四ヲ増加シ一〇・六トナリ十五年再ビ其三分ノ一ヲ増加シテ一四・二トナル、然ルニ滿鐵沿線ニ於テハ大正十三年ノ對人口一萬羅患率ハ一一・一ナリシモ十四年其二倍即二二・二トナリ著シキ羅患率ノ増加ヲ示セシモ十五年一三・七ニ低下セリ、即滿洲全體ニ就テハ十三年以來年ト共ニ増加セルニ滿鐵沿線ニ於テハ十四年度著明ニ増加セルモ十五年度ニ低下セルハ明ニ十五年度ニ於テハ特ニ關東州ニ於テ

著シク流行シ州外即沿線ハ反之十四年度既ニ猖獗ヲ極メタルニヨルトセザル可カラズ、換言セバ當時「テスト」及豫防接種ヲ行ハザリシ滿鐵沿線ニ於テ先ヅ猖獗シ以テ關東州内ニ傳播セルハ想像ニ難カラズ、果シテ其然ルヤハ滿洲各地ノ罹患率ノ比較ヲ要ス、即各地ニ於ケル流行ノ時機及罹患率第五十一表ノ如シ。

第五十一表
最近滿洲ニ於ケル猩紅熱流行ノ地方の消長
(對人口十萬罹患率)

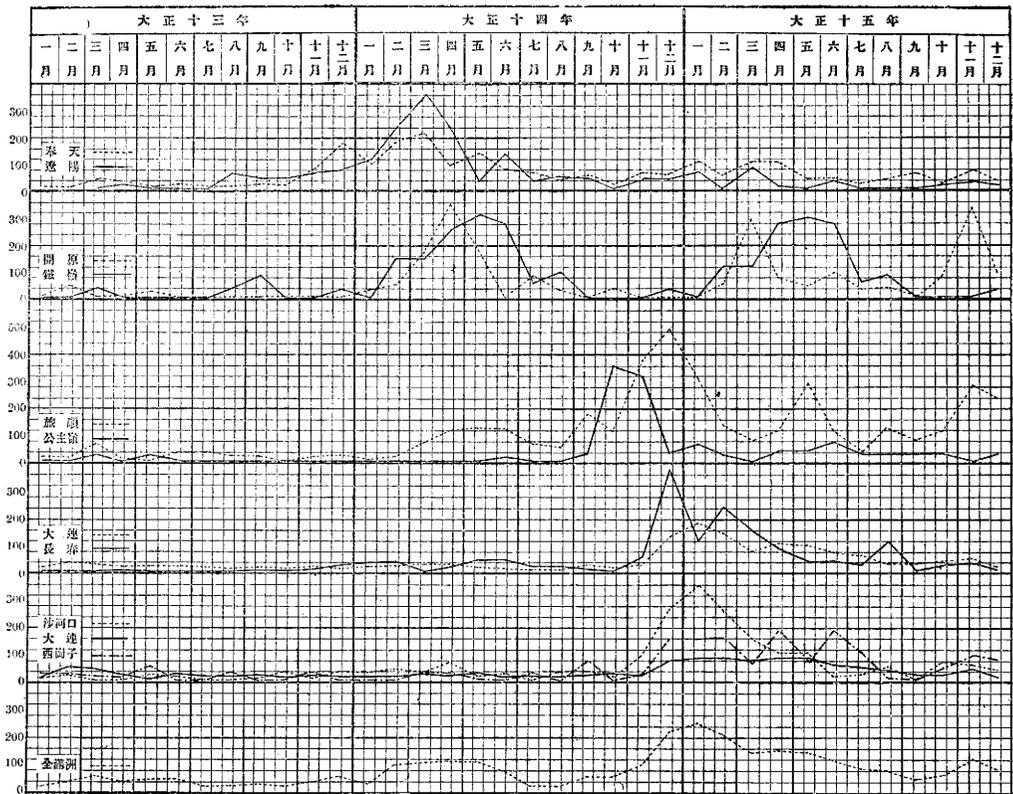
年	月	長春	大連	公主嶺	旅順	鐵嶺	開原	遼陽	奉天
大正十三年度	1		16		20				6
	2		39		20		74		6
	3		35	36	78	38			41
	4	11	17		10			20	35
	5		17	36			37		
	6		23		39				12
	7		7		39				12
	8		4		20	38		80	6
	9	11	13		10	77		40	24
	10	11	10					40	24
	11	11	15		20			60	65
	12	22	13		39	38		80	182
大正十四年度	1	21	18		10			117	94
	2	21	27		20	148	35	235	161
	3		31		61	148	71	372	194
	4	10	36		122	259	178	255	111
	5	63	33		142	296	364	39	144
	6	63	15	37	142	259	178	156	83
	7	10	4		71	74		39	61
	8	21	13		40	111	107	39	33
	9	10	27	74	183		35	39	39
	10		19	333	112				5
	11	53	36	293	347		35	39	66
	12	368	132	74	485	37		39	66
大正十五年度	1	120	170	94	278	14		58	105
	2	250	153	47	138	35	68	78	47
	3	160	90		99	35	273	19	84
	4	100	117	47	118	28	103		84
	5	50	111	47	297	10	68	39	53
	6	50	77	94	128	14	136		42
	7	30	58	47	79	35	34		37
	8	130	34	47	135	35	34		42
	9		28	47	69			19	63
	10	30	41	47	118	35	103	39	31
	11	40	59		287		307	19	79
	12	10	43	47	237	35	103		26

第五十一表ヲ觀ルニ大正十三年各地ニ於ケル罹患率ハ鐵嶺ニ於ケル九月、奉天ニ於ケル十一月及十二月ヲ除キ一般ニ低率ニシテ殆ンド流行トシテ認ムルコトヲ得ズ、大正十四年度ニ於テハ奉天、遼陽、開原、鐵嶺等ノ罹患率ハ既ニ春期ニ於テ著シク高率トナリ奉天、遼陽ノ三月、開原ノ四月、鐵嶺ノ五月ハ就中最高率ヲ示スモ何レモ秋期ニ向ツテ其率低下セリ、反之春期ニ於テ尙平穩ナリシ州内ノ公主嶺及長春ハ同年秋ニ當リ大流行ヲ見、公主嶺ノ十月、長春及旅

第五圖曲線

最近ノ滿洲ニ於ケル猩紅熱大流行ノ地方的消長(對人口十萬罹患率)

原著 黒井・森脇ニ流行病學ヨリ觀タル猩紅熱



備考 大連 = 沙河子 + 西崗子 + 大連

順ノ十二月ハ最も高率トナリ、大連ニ於テハ同年十一月迄尙平穩ナリシモ十二月ニ至リ俄然流行ノ兆アリ、先沙河子ニ始マリ次デ小崗子、大連ニ及ベリ、大正十五年ニ入り既ニ滿洲各地トモ稍々平穩ニ向ヒシモ獨リ大連ニ於テハ一月ノ罹患率最高ヲ示シ四月ニ至リ減少シ八月全ク平穩ニ復セリ、今上表ノ各地ニ於ケル罹患率ヲ曲線ヲ以テ示セバ頗ル明瞭ニシテ第五圖曲線ノ如シ。

第五圖曲線ノ示ス如ク大正十三年度極メテ平穩ナリシ滿洲ノ本病ハ大正十四年春ニ其流行ヲ始メ同年夏一度平常ニ復シ秋ハ再び春以上ノ大流行トナリ十五年春ニ連續セリ、滿鐵沿線ニ於ケル流行ハ長春、公主嶺ヲ除キ主トシテ春ニ其率高ク關東州及長春、公主嶺ハ秋

ニ至ツテ猖獗ヲ來セルモ就中大連ノ流行ハ滿洲各地ニ比シ最モ遅レテ流行ヲ始メ最高ハ寧口大正十五年春ニ當レルヲ知ル。

要之、今次未曾有ノ本病流行ハ當時「ヂックテスト」及豫防接種ヲ行ハザリシ滿鐵沿線ノ附屬地ニ先ヅ端ヲ發シ沿線各地ニ大流行ヲ見、次デ關東州内ニ傳播セルコト既ニ數字ノ上ニ明ニシテ何等ノ疑點ナシ、若シ本病ノ流行ガ余等ノ使用セシ連鎖狀球菌ヨリ製出セル接種材料ニ基因スルモノトセバ本病々原斷定ニ絶好ノ根據トナル可キモ不幸ニシテ斯カル事實ヲ認ムル能ハズ、然ラバ今次本病ノ大流行ハ滿洲ノミニ限ラレタルカ、進ミテ之ヲ歐洲及日本ニ就キテ調査スルニ左ノ如シ。

第二節 歐洲ニ於ケル(大正十四年)一九二五年度本病流行ノ消長

歐洲ニ於ケル一九二五年度流行ノ消長ヲ見シニハ其前年一九二四年即大正十三年度ノ本病ト之ヲ對人口罹患率ニ就テ對比セザル可カラズ。(國際聯盟月報參照)

即第五十二表ニ明ナル如ク大正十四年度歐洲ノ本病患者ハ總計五一四一八六例ニシテ其人口對一萬罹患率ハ一一・四ニ相當ス、而シテ大正十三年ニ於テハ四〇五五三例ニシテ其罹患率ハ九・一ニシテ患者實數及對人口罹患率ハ大正十四年度ニ於テ著シク増加セリ、以上ハ歐洲全般ノ總計ニ就テ述ベタルモノニシテ勿論國ニ據リテハ前年度ニ比シ大正十四年度ニ減少セルモノアリ、即第五十三表(同表)ニ見ル如クスカンジナビア半島及南歐諸國殊ニバルカン半島ヨリ伊太利、希臘ニ涉リテハ減少セルモ北歐諸國ニ於テハ南歐諸國ノ減少度以上ニ増加シ殊ニツェッコ、スローヴァキアニ於ケル罹患率ハ前年度ノ十二倍トナリ、リチニア、ラトビア、露國、ポーランド、獨逸、ハンガリー、英國ニ於テハ何レモ其患者數及對人口罹患率ノ増加ヲ見タリ、殊ニ大正十三年度露國ノ患者數十五萬六千ハ十四年度二十三萬六千トナリ、ポーランドノ一萬八千ハ二萬五千ニ増加シ殊ニツェッコスロヴァキアノ十三年度ニ於ケル僅ニ千名ハ翌十四年度一萬二千ニ増加セル等大正十四年度北歐ノ本病流行ト同年及ソノ翌年ニ亘ル滿洲ノ大流行トガ期セズシテ其

第五十二表

大正十三年及十四年度ニ於ケル猩紅熱罹患率ノ増減

		1924年度				1925年度						
	國名	人口	患者數	對人口 一萬權 患率	人口	患者數	對人口 一萬權 患率	前年度ヨ リ増減				
歐	對人口罹患率増加國	Czechoslovakia	13982000	1058	0.7	13982726	12332	8.8	12/1	増		
		Lithuania	2035000	399	1.9	2175000	1430	6.6	12/5	同		
		Lavia	1886000	1450	7.6	1886000	2686	14.2	4/5	同		
		Netherland	7314000	6636	9.0	7314229	11708	16.0	3/4	同		
		Russia	134853000	156397	11.5	137775000	235928	17.1	1/2	同		
		Austria	6526000	3826	5.8	6526661	5761	8.82	1/2	同		
		Hungary	8158000	5727	7.0	8158000	8040	9.9	3/7	同		
		Poland	26874000	18030	6.7	28874000	24586	8.6	1/3	同		
		Germany	61892000	32798	5.2	61892000	39918	6.4	1/4	同		
		France	39400000	6595	1.6	39400000	7809	2.0	1/4	同		
		England&Wales	38747000	84652	21.8	38559000	91461	23.7	1/10	同		
		洲	對人口罹患率減少國	Bulgaria	5115000	7466	14.5	5115112	3359	6.7	1/2	減
				Greece	6500000	594	0.9	6435000	379	0.6	1/3	同
				Roumania	1670000	16696	9.9	16750000	10640	6.4	1/3	同
Suisse	3902000			2351	6.0	3902000	1991	5.1	1/7	同		
Belgium	7606000			1252	1.6	7607000	1037	1.4	1/8	同		
Denmark	3371000			3116	9.2	3371900	2819	8.4	1/11	同		
Norway (都市)	798000			641	8.0	798439	556	7.0	1/8	同		
Finland	3435000			1842	5.3	3435249	1667	4.8	1/13	同		
Italy	39659000			16320	4.1	39659944	15050	3.8	1/14	同		
Yougoslavia	12017000			10107	7.8	12492000	9084	7.3	1/15	同		
Sweden	5970000			11022	18.4	6036118	10942	17.6	1/23	同		
合計	446740000	405553	9.08	452154378	514186	11.37	1/4.5	増				
歐洲以外ノ國	Urgnay	1603000	789	4.9	1640214	412	2.5	1/2	減			
	Corea	17626000	1361	0.7	17626760	842	0.48	1/3	同			
	Australia	5873000	7345	12.5	5777000	5498	9.5	1/4	同			
	Canada	8677000	17340	19.9	8677238	14685	16.9	1/7	同			
	Newzealand	1394000	1167	8.3	1394000	1047	7.5	1/10	増			
	日本 (83市)	1187000	1150	0.97	12160000	1334	1.1	1/10	同			
	滿洲 (日支)	973200	469	4.8	1027500	1087	10.6	5/4	同			

時期ヲ一ニセルハ實ニ流行病學上注目ニ値スル事實ナリトス。

原著

黒井・森脇ニ流行病學ヨリ觀タル猩紅熱

第三節 歐洲以外ノ國ニ於ケル大正十四年度本病ノ消長

大正十四年度ニ於テ本病ガ滿洲及北歐ニ激増シ、南歐ニ減少セルハ既ニ上述ノ如シ、而シテ其他ノ外國ニ於テハカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ウルグワイ(南米)朝鮮等ハ大正十三年度ニ比シ十四年度ノ本病ハ減少セリ。

第四節 日本内地ニ於ケル大正十四年度本病ノ消長

日本内地八十三都市ノ患者ハ大正十三年度一一五〇例、(對人口一萬罹患者〇・九七)ハ十四年度一三三四例(對人口一萬罹患者一・二)ニ増加セルモ其増加率ハ滿洲又ハ北歐ノ夫ノ如ク大ナラズ。(上表參照)

要之大正十四年度世界ニ於ケル本病ノ消長ハ十三年度ニ比シ北米、南米、南歐、オーストラリア地方ニ於テ減少シ日本ニ於テハ稍々増加シ北歐、滿洲ニ於テハ著明ノ増加ヲ來セリ、即大正十四年ノ大流行ハ獨リ「ヂックテス」及豫防接種ヲ行ヒタル大連ノミナラズ全滿洲ハ勿論北歐ニ於テモ亦著明ノ流行ヲ來セリ、而シテ滿洲及北歐ノ流行ガ期セズシテ其時期ヲ同クセルハ甚興味アル事實ナリトス。

第十章 豫防接種ノ効果

大連市ニ於テチック氏反應ヲ檢シ猩紅熱感受性アルモノニシテ、チックニヨル豫防接種ヲ行ヒ之ヲ完了セルモノニ八三三名アリ。主トシテ感受性高キ七—十四歳ノ學童ニシテ之ニ加フルニ猩紅熱患者ト接觸ノ機會アル人々ヲ以テス。接種ハ大正十五年度及昭和二年度ノ二期ニ行ヒ、兩者其接種量ニ相違アリ、又昭和二年度ニ行ヘルモノハ一部其接種材料ニ改變ヲ加ヘタルモノアルヲ以テ其効果ニ就キテノ考察モ之ヲ二分チテ記載スベシ。大正十五年度ニ用ヒタル接種材料ハ普通用ヒラル、猩紅熱溶血性連鎖狀球菌ノ多價生毒素ニシテ其接種量ハ一五・〇〇〇S.T.D.以下ナリ。大正十五年度ノ接種ハ同年二月末日ニ完了セルモノニシテ其完了日ヨリ昭和二年八月末日迄ノ罹患者ヲ接種施行團體

第五十三表 大正十五年度猩紅熱豫防接種成績

接種完了者			接種未完了者			未接種者		
總數	罹患數	罹患率(%)	總數	罹患數	罹患率(%)	總數	罹患數	罹患率(%)
1287	18	13.9	627	18	27.1	1483	43	29.0

第五十四表 昭和二年度猩紅熱豫防接種成績

接種完了者			接種未完了者			未接種者		
總數	罹患數	罹患率(%)	總數	罹患數	罹患率(%)	總數	罹患數	罹患率(%)
1505	0	0	571	6	10.4	706	20	28.3

第五十五表 猩紅熱患者ト接觸ノ機會アリシモノニ行ヘル接種成績

接種完了者			接種未完了者			未接種者		
總數	罹患數	罹患率(%)	總數	罹患數	罹患率(%)	總數	罹患數	罹患率(%)
91	0	0	56	5	89.2	43	10	232.0

中ノ接種完了者、未完了者、未接種者ニ就キテ調査スルニ第五十三表ノ如シ。
 接種完了者及未接種者間ニ於ケル罹患率(%)ハ一三二九及二九〇ニシテ前者ハ後者ノ大約 $\frac{1}{2}$ ニ相當ス。大正十五年度
 ニ用ヒシ接種量ハ一汎ニ少ク標準ヲ去ル事遠カリシヲ以テ其効果モ亦所期ノ如クナラズ。

昭和二年度ニアリテハ接種材料ニ改
 變ヲ加ヘ一部ニハ毒素ニ加フルニ菌體
 ヲ併用セリ。又接種量ヲ増加シテ最低
 三〇〇〇〇、最高六〇〇〇〇S.T.D.
 ヲ用ヒタリ。

第五十四表ニ見ル如ク、接種完了者
 中ヨリハ昭和二年八月末日迄ニハ一人
 ノ罹患者ヲモ出ササルニ反シ未接種者
 中ヨリハ二〇人ノ罹患者ヲ出セリ。

猩紅熱患者ト接觸ノ危険アルモノニ
 行ヘル豫防接種ノ成績ハ第五十五表ニ
 示スガ如シ。

第十一章 流行病學ヨリ觀タル猩紅熱ト丹毒

免疫學的殊ニ補體結合反應、凝集反應、沈降反應等ヨリ又一方生物學的殊ニ糖分解作用、「ヂック」毒素產生ノ狀態及免疫血清ノシユ氏褐色現象ノ上ヨリ猩紅熱連鎖狀球菌ハ他ノ溶血性連鎖狀球菌例ヘバ丹毒菌或ハ化膿菌トノ間ニ殆ンド一定ノ鑑別ヲ附スルコト困難ナルハ既ニ大連療病院ニ於ケル業績⁽³⁹⁾ニ明ナリ、ヂック氏ハ毒素產生ノ狀態、ドシエー氏ハ凝集反應ニ據リ猩連菌ヲ鑑別シ得トナスモ歐洲殊ニ獨逸ノ複試ハ殆ンド余等ノ成績ニ一致シ兩者ノ鑑別不能ナルヲ説クモノ多シ。

一方丹毒ニ於テハフュールアイゼン⁽⁴⁰⁾氏ノ病原發表以來該病竈ヨリ分離セシ溶血性連鎖狀球菌ヲ以テ一般ニ病原ト認メラル、モ本菌ト他ノ化膿性溶血性連鎖狀球菌トハ全ク區別困難ナルハ諸家ノ一致セル所ニシテ殊ニ丹毒菌ガ淋巴ノミナラズ血中ニ侵入シ各所ニ化膿竈ヲ作り（ノールデン⁽³¹⁾、プール⁽³²⁾、ペトルシキー⁽³³⁾、ヅユニユーゼ⁽³⁴⁾、レンハルツ⁽³⁵⁾、ヨルダン⁽³⁶⁾等）丹毒患者ニ接觸セシ醫師（スペンサー及ウエル⁽³⁷⁾氏）産婆（クラウス⁽³⁷⁾）ヲ介シテ十人ノ産婦ガ産褥熱ヲ起シ又反對ニ産褥熱菌又ハ他ノ化膿菌ヲ以テ丹毒ヲ（ウイルヒヨウ⁽³⁸⁾）發スル等或ハ實驗的ニ又ハ臨牀的ニ化膿性連鎖狀球菌ト丹毒菌ハ病原的共通ナリトノ意見ヲ有スル者亦尠カラズ（ウインケル⁽³⁹⁾、ハルトマン⁽⁴⁰⁾、ウイダール⁽⁴¹⁾等）。

而シテ化膿菌或ハ丹毒菌ト猩紅熱菌トハ又上述ノ如ク區別困難ニシテノーベル⁽⁴²⁾氏ノ如キハ産褥熱敗血症溶連菌ト猩連菌トハ同一ナリトノ説ヲ有ス、尙之ヲ當院臨牀上ノ經驗ニ徴スルモ院内ニ於ケル丹毒症發生ハ猩紅熱病棟ニ限ラレ猩紅熱患者ノ經過中五例及同病棟附添一例ノ丹毒發生ヲ見、又最近猩紅熱經過中丹毒ヲ發セル例ハ朝鮮志賀氏ノ一例、瓦房店梅田氏三例（一家三名）等アリ。

斯クノ如ク猩連菌、丹毒菌、化膿菌等ガ型態學的ニハ勿論免疫學、生物學、病理並臨牀的ニ殆ンド區別困難ナリト

セバ猩紅熱ト丹毒トヲ流行病學的ニ觀察シ兩者罹患ノ狀態ヲ比較スルハ最モ意味アル可シト信ズ、殊ニ左記兩者ノ統計ハ同一病院ニ於テ同一期間内ニ取扱ヒタル丹毒及猩紅熱ノ症例ナルヲ以テ兩者ノ比較ハ最モ興味アリ以下ノ各表中其大部分ハ大正十年以後六ケ年間ノ滿鐵沿線ニ於ケル二十二病院ニテ取扱ヒタル數字ニシテ滿鐵衛生課及大連醫院外科及皮膚科長ノ好意ニ基クモノナリ、(滿鐵ニテハ丹毒ハ傳染病ニ準シテ其報告ノ義務ヲ有ス)

第一節 六ケ年間ノ丹毒及猩紅熱罹患數

大正十年以降六ケ年間ニ滿鐵沿線二十二病院ノ取扱ヒタル猩紅熱及丹毒患者ハ第五十六表ニ觀ル如ク猩紅熱二二六四例、丹毒九四二例ニシテ各年ニ於ケル猩紅熱患者ノ増減ト丹毒患者ノ増減トハ殆ンド相一致ス、只大正十四年度猩紅熱最高率ナリシニ丹毒ハ十五年度最多數トナレリ、是レ流行ハ猩紅熱ニ早ク丹毒ニアリテハ夫ヨリ一兩月遅レタルニ據ル。

第二節 日、支人別

第五十六表 年度別猩紅熱並丹毒患者數

年 度	猩紅熱	丹 毒
大正十年度	246	114
大正十一年度	179	107
大正十二年度	181	115
大正十三年度	445	150
大正十四年度	660	212
大正十五年度	553	244
計	2264	942

猩紅熱ハ二二六四例中支那人僅ニ一九七例ナルモ丹毒患者九四二例中支人三四一例ニシテ猩紅熱ニ罹患スル支那人少キニ比シ丹毒ニ罹患スル者比較的多シ、而シテ支人ハ日本人ニ比シ「ヂック」陰性者多數ナルモ感染ノ機會多キ勞働者階級ハ支人ニ多シ、丹毒ハ局所ニ濃厚ナル病毒ノ襲來アル爲「ヂック」陰性者ト雖モ本病ニ罹患スルニ反シ猩紅熱ノ如キハ「ヂック」陰性者殆ンド之ニ罹患セザルニ據ルモノト思惟ス。

第三節 性別

(イ) 猩紅熱三〇〇〇例ノ當院患者ノ性別ハ女五〇九%、男四九一%ニシテ殆ンド同數ナルモ女子稍々多數ヲ占ム。又滿鐵沿線二十二病院取扱ノ猩紅熱二二六四例ハ第五十七表ニ見ル如ク女一一三一例、男一一三三例ニシテ殆ンド同

數ナルモ其日支人別ヲ見ルニ日本人二〇六七例中女一〇六八例、男九九九例ニシテ日本人ニ於テハ女子多數ヲ占ムルモ支人一九七例ハ女六三例、男一三四例ニシテ女子ヨリモ男子ニ遙ニ多數ナリ。

(ロ) 丹毒患者(滿鐵沿線二十二病院取扱)九四二例ノ性別ハ女三五七例、男五八五例ニシテ男子ニ多ク又其日支人別ヲ見ルニ日本人六〇一例中男三一九例、支那人三四一例中男二六六例ニシテ何レモ男子ニ多シ。

チームゼンノ教室ニ於テハ總數七〇〇例ノ丹毒中女五一二例ヲ占メ(フリックヒンゲル氏)、ハンブルグニ於ケルニ三四〇例ハ男一三一〇例ニシテ諸家ニ據リ一致セズト雖モ一般ニ男子ヨリモ女子ニ多數ナリト稱セラル。

即チ丹毒ガ男女何レニ多キヤハ諸家ノ例各々異ルモ滿洲六ヶ年間九四二例ハ男子多數ヲ占メ殊ニ支那人ニ於テハ著シク男子ニ多シ、然レドモ男女ノ人口ニ對スル罹患率モ亦男子ニ高率ヲ示スヤハ茲ニ明言シ得ズ(殊ニ支人男ハ支人女ニ比シ其人口著シク少キハ事實ナリ)ト雖モ同病院ニ於テ同期間内ニ取扱ヒタル猩紅熱ガ女子ニ多キニ拘ハラズ丹毒ガ男子ニ多カリシハ事實ニシテ是レ滿洲ニ於テハ男子ノ感染機會ハ女子ヨリ大ナルニ據ル可シ、殊ニ支人女子ハ男子ニ比シ人口少シト雖モ亦支人男子ニ比シ生活狀態ノ關係上感染ノ機會少キハ想像ニ難カラズ。

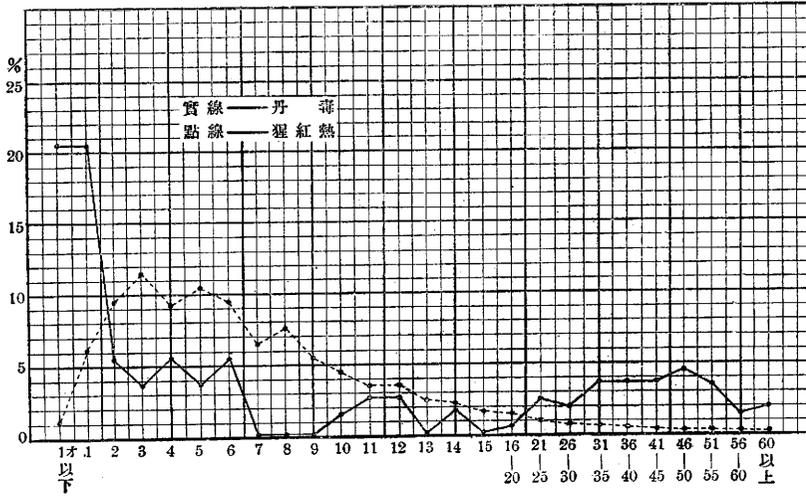
第四節 年 齡 別

第五十七表 丹毒患者年齡男女別表

年 齡	感 患 數		計	16歲以 上各年 平均	%
	男	女			
1歲未滿	6	10	16		20.7
1	8	8	16		20.7
2	2	2	4		5.2
3	2	1	3		3.9
4	2	2	4		5.2
5	0	3	3		3.9
6	0	4	4		5.2
7	0	0	0		0
8	0	0	0		0
9	0	0	0		0
10	0	1	1		1.3
11	2	0	2		2.6
12	2	0	2		2.6
13	0	0	0		0
14	1	0	1		1.3
15	0	0	0		0
16-20	0	2	2	0.4	0.5
21-25	6	4	10	2.0	2.6
26-30	4	4	8	1.6	2.0
31-35	4	10	14	2.8	3.6
36-40	5	9	14	2.8	3.6
41-45	7	7	14	2.8	3.6
46-50	9	7	16	3.2	4.1
51-55	7	5	12	2.4	3.1
56-60	3	4	7	1.4	1.8
61以上	3	5	8	1.6	2.0
計	73	88	161		

(イ、當院猩紅熱患者三〇〇例ノ年齡別ハ第二十二表(既述)ニ觀ル如ク滿三歲ヲ以テ最高率トシ滿五歲、六歲、二歲、四歲、七歲、八歲、一歲、九歲ノ順トナリ年ト共ニ減退シ、一歲未

第六圖曲線



滿及大人ニ於テハ特ニ急激ナル減退ヲ見ル。

(ロ) 丹毒患者一六一例ノ年齡別ハ一歲未滿及滿一歲最高ヲ示シ次第ニ減少ス、滿七歲ヨリ二十歲ノ間殊ニ十歲乃至十五歲ハ最モ其罹患少キモ大人トナリ再ビ稍々増加スルコト第五十七表及第六圖曲線ニ見ル如シ。

上述ノ第六圖曲線ニ明カナル如ク猩紅熱ノ比較的少キ幼兒殊ニ乳兒ニ於テ最モ丹毒ノ罹患多ク小學校時代ニ比較的尠クシテ大人殊ニ高齡者トナリテ再ビ其率稍増加スルハ注目ニ値ス。

丹毒ハ何レノ年齡ニモ來ル、レマン氏ニ據レバ二—三〇歲ニ多シト云フ、幼兒ニ多キハ產道及臍帶ヨリノ感染ノ外皮膚一般ニ纖弱ニシテ濕疹、ラガーデン等丹毒感染ノ機會多キニ基因ス可シ。

第五節 季節的消長

滿鐵沿線ニ於ケル六ケ年ノ猩紅熱二二六四例ノ季節別ニ據ル患者數ハ第一期(一—二—三月)最モ多ク、第二期、第四期之ニ次ギ第三期最モ少シ、而シテ丹毒ニ於テハ第一期最モ多ク第二期、第三期之ニ次ギ第四期最モ少キハ第五十八表ニ明ナリ。

歐洲ニ於ケルリンデン氏ノ丹毒ノ例ハ冬最モ多ク春、秋之ニ次ギ夏最少シト云フモレンハルツ氏ハ夏ト雖モ本病ハ稀ナラズト云フ。

第六十表

滿洲丹毒患者發生期別表

年別	期別	日本人		男女計	支那人		男女計	日支計
		男	女		男	女		
大正十年	II	11	9	20	11	3	14	34
	III	7	7	14	8	0	8	22
	IV	12	11	23	2	1	3	26
大正二年	I	10	16	26	4	2	6	32
	II	12	6	18	5	1	6	24
	III	9	9	18	4	3	7	25
	IV	10	8	18	5	2	7	25
大正三年	I	16	11	27	6	0	6	33
	II	10	6	16	6	1	7	23
	III	4	7	11	33	0	33	44
	IV	10	8	18	6	4	10	28
大正三年	I	8	5	13	4	3	7	20
	II	17	9	26	8	4	12	38
	III	13	7	20	9	0	9	29
	IV	7	7	14	9	0	9	23
大正四年	I	24	20	44	13	3	16	60
	II	12	23	35	12	2	14	49
	III	14	13	27	8	9	17	44
	IV	12	14	26	13	7	20	46
大正五年	I	21	19	40	22	11	33	73
	II	25	17	42	32	5	37	79
	III	20	14	34	22	4	26	60
	IV	14	22	36	9	4	13	49
昭和二年	I	21	14	35	15	6	21	56
總計		319	282	601	266	75	341	942

而シテ今之等累年ノ季節別患者數ヲ曲線
ヲ以テ示セバ第七圖曲線ノ如シ。

第五十八表

猩紅熱並丹毒患者各期節發生別表
(自大正十年四月至昭和二年三月)

期別	人種名	猩紅熱	日支計	丹毒	日支計
II期	日本人 支那人	622 59	681	157 90	247
III期	日本人 支那人	276 29	305	124 100	224
IV期	日本人 支那人	478 58	536	135 62	197
計			2264		942

原著 黒井・森脇 流行病學ヨリ觀タル猩紅熱

第五十九表

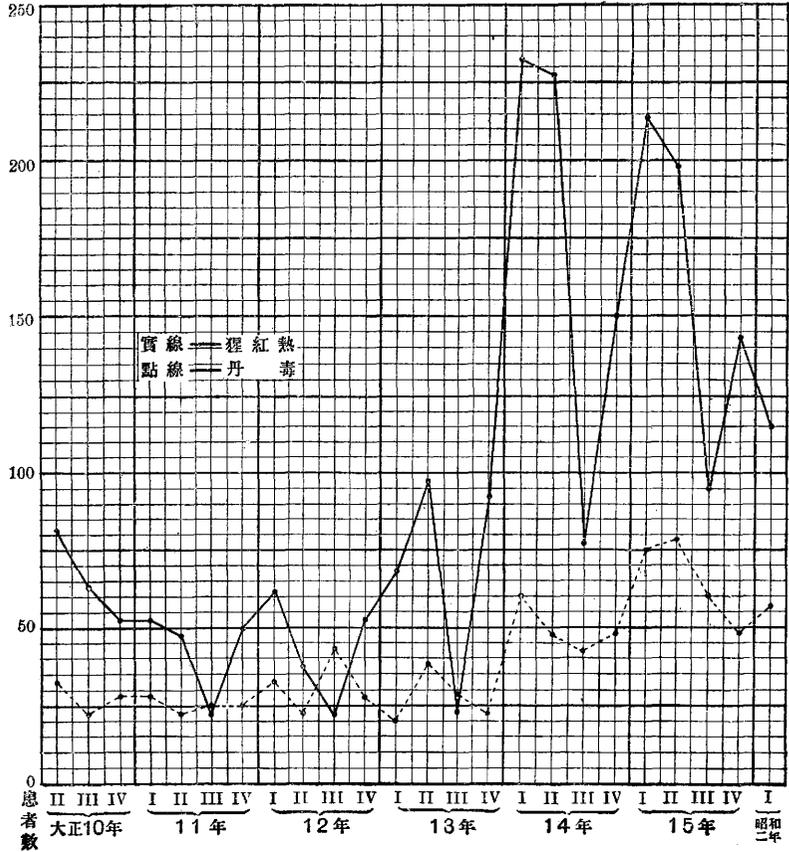
滿洲猩紅熱患者發生期別表

年別	期別	日本人		男女計	支那人		男女計	日支計
		男	女		男	女		
大正十年	II	34	30	64	9	3	12	76
	III	30	22	52	11	1	12	64
	IV	25	16	41	9	3	12	53
大正二年	I	35	13	48	5	0	5	53
	II	15	21	36	9	1	10	46
	III	8	13	21	1	0	1	22
	IV	20	29	49	1	0	1	50
大正三年	I	33	25	58	1	2	3	61
	II	18	17	35	2	0	2	37
	III	12	10	22	0	1	1	23
	IV	24	28	52	2	0	2	54
大正三年	I	32	27	59	5	3	8	67
	II	38	53	91	5	0	5	96
	III	8	12	20	2	1	3	23
	IV	47	41	88	3	2	5	93
大正四年	I	118	111	229	3	1	4	233
	II	96	120	216	5	6	11	227
	III	35	35	70	3	3	6	76
	IV	59	73	132	10	2	12	144
大正五年	I	94	103	197	8	8	16	213
	II	78	102	180	13	6	19	199
	III	45	46	91	4	2	6	97
	IV	50	66	116	13	13	26	142
昭和二年	I	45	55	100	10	5	15	115
總計		999	1068	2067	134	63	197	2264

上述ノ猩紅熱及丹毒ノ累年ニ於ケル季節的消長ノ詳細ヲ示セバ第五
十九表及第六十表ノ如シ。

線 曲 圖 七 第

總 括



上表及曲線圖ノ示ス如ク丹毒及猩紅熱發生ノ季節ハ兩者殆ンド相一致シ寒冷ノ候ニ多ク夏期ニ少シ。

要之流行病學ヨリ觀タル猩紅熱ト丹毒ハ同一病院ニ於ケル同一期間中ノ兩者罹患ノ増減ハ互ニ相平行シ又兩者ノ季節的罹患モ亦殆ンド相一致スト見ルヲ得ルモ、其性別及年齡別ノ罹患狀態ハ兩者自ラ差アリ、即猩紅熱ガ女子ニ多キニ反シ丹毒ハ男子ニ多ク、又猩紅熱ガ滿三歲ヨリ十歲ニ多ク年ト共ニ減少スルニ反シ丹毒ハ滿一歲以下ニ多ク小學校時代比較的少ク大人殊ニ高齡トナリ再ビ多少其罹患率ヲ増加ス。

一、地球上本病分布ノ濃度及性質ハ緯度及等温線ト本病トノ關係ヨリ觀ルニ本病ハ寒帶及温帶地方ニ旺盛ニシテ殆ンド恒在性ニ流行ス。又同一地方ニ於テモ夏期最モ其發生尠ク寒冷ノ候ニ頻發スルハ殆ンド各國其軌ヲ一ニス。

二、熱帶又ハ亞熱帶ニ於テハ本病ハ一般ニ恒在性ナラズ、交通其他ニヨリ特發的ニ流行ヲ見ルガ如シ。

三、地球上ノ雨量分布ト本病トノ關係ハ雨量最モ尠キ地方及ビ最モ多キ地方ニ於テハ本病極メテ稀ニシテ雨量二五〇—二〇〇〇耗ノ地方(例之歐洲)ニ流行最モ旺ナリ。

四、氣象ト本病トノ關係ハ地球上大局的ニ之ヲ觀ルトキハ一見密接ノ關係ヲ有スル如キモ一地方ニ於テハ兩者ノ間ニ一定ノ關係ヲ附スルヲ得ズ、大連ニ於ケル本病流行ガ同地方ノ氣象ニ一定ノ關係ヲ見出ス事困難ニシテ只僅ニ累年ノ氣温及濕度ノ底點ニ本病流行ノ頂點ガ比較的ヨク一致スルノ事實ヲ知ルノミ。今次未曾有ノ大流行ニ際シ同地ノ氣温、濕度及風速ニ特筆ス可キ變化ヲ認メ難シ。即本病ハ少クトモ都會地ニ於テハ流行性ニ來ル一證查ニシテ此際氣象ハ必ズシモ考慮ス可キ唯一ノ要約ニ非ラザルヲ知ル。

五、南亞弗利加、米國、上海等同一地方ニ於テ常ニ有色人種ノ本病罹患率及死亡率ハ白人種ノ夫ヨリ遙ニ低キハ事實ナリ、之ヲ單ニ皮膚ノ色ノミヲ以テ説明シ得ザルハ大連ニ於ケル日支同色人間ノ罹患率及死亡率ニ大差アルニ徴スルモ明ナリ、黑人又ハ支那人ガ本病罹患ノ比較的低率ナルハ主トシテ其環境ニヨリ自然ニ免疫ヲ得ル如キ生活狀態ニ馴ラサレタル人種ノ子孫ハ先天的ニ又後天的ニ本病ニ對シ免疫ヲ獲得スルニ非ラザルナキカ。

六、本病ノ男女對人口罹患率及「デック」反應陽性率ハ殆ンド常ニ女子ニ高率ヲ示スモ實際ノ罹患ハ感染ノ機會多キ男子多數ヲ占ムルモ又一方男子ノ人口女子ニ比シ多數ナルニ據ル故ニ患者實數ハ男女殆ンド相接近ス(大連及歐洲ハ女子ニ多ク日本ハ男子ニ多キモ其差著シカラズ)。

七、年齡の關係ハ乳兒ニ少ク滿三—四歳ノ兒童最高率ヲ示シ漸次年齡ノ増加ト共ニ其罹患ヲ減ズルコト各國各人種共ニ其軌ヲ一ニス。

八、世界各地ノ對人口一萬罹患率中最高ヲ示スハ滿洲在住ノ日本人ニシテ(一萬人ニ付五八人罹患)スコットランド、北米、イングラント、露國、スウェーデン等ノ北方地方之ニ次ギ熱帶地方ハ其率最低シ。

又世界大洲別ニ見ルトキハカナダ及合衆國ノ罹患率最高ヲ示シ歐洲之ニ次ギオーストラリア、亞細亞ノ順ニ低下ス。
(但一九二四年度調)

九、對人口死亡率モ亦緯度ノ進ミ又等温線ノ下ルト共ニ著シク増加シ、惡性ノ傾向ヲ呈スルヲ見ル、而シテ地球大洲別ニ之ヲ見ルトキハ歐洲最高率(對人口十萬當六人ノ死亡)ヲ示シカナダ、亞細亞之ニ次ギアフリカ、メキシコ、南米ノ順ニ低下ス、又各國ニ於ケル最近十(又ハ五)ケ年間ノ平均ハ滿洲日本人最高率(人口十萬ニ付五一人)トナリブルガリア、カナダ、ユゴースラビア、ルーマニア、チェッコスロヴァキア之ニ次ギ何レモ人口十萬ニ就キ九人ヲ下ラズ、而シテ罹患率ノ高キ英、米ニ於ケル夫ハ比較的少ク對人口十萬三六—三八人ニ當ル、尙各都市ニ於ケル死亡率ハ世界七十七都市中滿洲ノ諸都市及モスコ市最高率ヲ示シ(十萬人ニ付九二人以上)レニングラード、ワルソウ、ブタペスト、ベルグラード之ニ次ギ何レモ一六人以上ノ死亡率ヲ示ス。

一〇、對患者死亡率ハ緯度、等温線ニ無關係ニシテ大洲別ニ見ルトキハ中央亞細亞、亞細亞、埃及、歐洲、カナダ、米國ノ順ニ減退ス、又最近七ケ年ノ各國ニ於ケル對患者死亡率ハ滿洲在住ノ支那人、朝鮮、希臘、ユゴースラヴィア、ブルガリア、伊太利、トルコ、ルーマニア、ポーランド等ハ高率ヲ示シ殆ンド常ニ一〇%ヲ下ラズ。

一一、日本内地全部人口五八八一萬ニ對シ大正十三年度一八四三例ノ本病發生即對人口一萬〇三一及十四年度〇三七人ノ罹患率ヲ示シ對人口十萬死亡率ハ十三年度〇二人又對患者百人死亡率ハ六六%ヲ示セリ。

内地八三都市ノ大正十年以後五ケ年間ノ平均對人口一萬罹患率ハ〇九八、對人口十萬死亡率〇五八及對患者百死亡率ハ五九%ニ當レリ、就中大正十四年度ハ對患者死亡率最高ヲ示シ九・四%ニ當リ滿洲六ケ年ノ平均死亡率ニ一致ス。

五ケ年間ニ一二〇例以上ノ本患者發生ヲ見シ内地都市ハ東京(一二二六例)、京都(一三九一例)、大阪(三六七例)、札幌(二五七例)、及八幡(一二四例)、ノ五都市ナリ。

一八、十五ヶ年三千例中ノ家族感染ヲ見ルニ三〇九家族中ヨリ九三六例ヲ出セリ（而シテ七家族ヨリ一五例ノ死亡者ヲ出セリ）。

一九、初發患者ノ隔離後ニ發生セル續發患者一六二例中一週以內ノモノ一一八例殊ニ四日以内ニ發病セル者一〇二例ニ達ス。

二〇、患者退院後ニ發生セル所謂「リターンケース」一二例アリ（内二日目一例、三日目五例、四―五―六日及十二日目各一例尙十一日目二例）就中三日目ニ發病セル者多ク之ニヨリ大體本病潜伏期ヲ推定シ得。

二一、從來ノ退院標準ニ加フルニ患者咽頭ノ溶血性連鎖狀球菌ノ有無ヲ參考トス可キヲ提唱ス。

二二、大正十四―五年ノ滿洲未曾有ノ本病流行ハ先ヅ關東州外ニ端ヲ發シ滿鐵沿線各地ニ猖獗シ次デ州内ニ及ベリ、

今次ノ流行ハ「ヂックテスト」ノ實施ニ無關係ニシテ北歐洲殊ニロシア、ポーランドニ於テモ亦同時ニ本病ノ流行特ニ猖獗ヲ極メタリ。

二三、猩紅熱連鎖狀球菌及其毒素ヲ以テ免疫スルコトニ據リ「ヂックテスト」陽性ハ陰性トナル、陰性者ノ罹患率ハ陽性者ノ夫ヨリ著シク低シ、即吾人ノ所謂豫防接種完了者ハ其罹患著シク輕減ス。

二四、猩紅熱ト丹毒ハ同一病院ニ於テ同一期間中ニ取扱ヒタル兩者罹患ノ増減ハ互ニ相平行シ、又兩者ノ季節的罹患

ノ消長モ亦殆ンド相一致スト見ルヲ得ルモ其性別、年齢別ノ罹患狀態ハ兩者自ラ差アリ、即猩紅熱ガ女子ニ多キニ反シ丹毒ハ男子ニ多ク又猩紅熱ガ滿三歳ヨリ十歳ニ多ク年ト共ニ減少スルニ反シ、丹毒ハ滿一年以下ニ多ク學校時代比較的少ク大人殊ニ高齡トナリ再ビ多少ノ罹患率ヲ増加ス。

二五、猩紅熱ガ他ノ類似疾患ヨリ獨立サレシト見ル可キハ歐洲ニ於テハシデナム氏（一六七六年）、支那ニ於テハ葉天士（初清、雍正癸丑年即約二百年前）、又日本ニ於テハベルツ（明治二十年頃）氏トナスヲ以テ當レリト云フ可キカ。

(1791)

(1792)

文 獻

- 1) **Di Cristina**, *Pediatrics* 29 : 1105 Dec. 1921.
- 2) **Caronia, Sindoni**, *Do.* 31 : 745 July 1923.
- 3) **Bürgers**, *D. M. W.* 51. Jahrgg. Nr. 10. S. 388 Maerz 1925.
- 4) **Meyer**, *Monatschr. f. Kinderh. K.* 29. Jan Febr. 1925.
- 5) **Takaki** *Wiener Klin. W.* 39 : 325. 18 Maerz 1925.
- 6) **Dick G. H. & G. F.**
 - 1) *J. A. M. A.* 81 : 1166 6. Oct. 1923.
 - 2) *Do.* 82 : 265 544. 1246. 1925.
 - 3) *Do. P.* 802 14. Maerz 1925.
 - 4) *Do.* 84. : 11 P. 803 1925.
 - 5) *Do.* 84 : 20 P. 1477 1925.
- 7) **Dochez**
 - 1) *J. Exp. Med.* Vol. 30. No. 3.
 - 2) *Do.* Vol. 36 No. 5.
 - 3) *Do* Vol 11 No. 2. & 4.
 - 4) *Do* Vol. Xliii No. 3.
 - 5) *J. A. M. A.* Vol. 82. P. 542 1924.
- 9) **G. Fanconi** *Schenlachproblem.* 1926.
- 10) **Bulletin de L'office international d'hygiene Publique,**
 - 1) Tome XVIII No. 6. Jnin 1926.
 - 2) Tomo XIII. No. 12 Dec 1925.
 - 3) Raport épidemiologique 5 me Année No 1. 15 Janv, 1926,
- 11) **Jochmann**, *Infect. Kh.* II Aufl.
- 12) **Haeser**, *Lehrb. d. Geschichte der med. & epidem. Krh.* Vol. III. 1882.
- 15) **Kraus-Brugsch**, *Spezielle Path. u. Therapie B II. T. II. Emile Sergent Traité de Patholgi Medicale T. XVI. Pani 1921 u. sich*
 - 10u, 11.
- 16) 楊鳳鳴、日本傳染病學雜誌、第一卷、第八號。
- 17) **Jefferys & Maxwell**, *The Diseases of china.*
- 18) 富士川游 日本疾病史 上卷。
- 19) **Baerz** 朝鮮醫學會綿引氏講演 大正十五年九月。及近藤氏外二名 日本傳染病學雜誌 第一卷 第八號參照。
- 20) **Caiger** *Scarletfever. Allbutt and Rolleston's system of Medicine.* Vol. II. Part. 1 P. 410—475. (1912) u. 10. 1)
- 21) 近藤氏外二名 日本傳染病學雜誌 第一卷 第八號。
- 22) 井口氏 同雜誌。
- 23) **Raport épidemiologique.** *Société des nations. Genève* 5^{me} année No. 1. 15 Jsur. 1926.
- 24) 關東應保險調查會印刷物。
- 25) **Hans Behrendt**, *Zschs. f. Hygiene etc.* Bd. 106. H 6. 3 1926.
- 26) **Pospischill-Weiss**, *Ueber Scharlach* 1911.
- 27) **Zinsser**, *a text book of bacteriology Rosorau. Preventive medicine & hygiene.* 1921.
- 28) **Friedemann-Deicher**, *D. M. W.* Nr. 28. 1927.
- 29) **Sieh 8**, 大連療病院猩紅熱研究。
- 30) **Fehleisen**, *ü. Erysipelas. D. Z. f. Chir.* 1882. XVI S. 391.
- 31) **Noorden**, *M. M. W.* 1887. S. 33.
- 32) **Pfnhl**, *Zf. f. Hygrine* 1892. s. 517.
- 33) **Petruschky**, *Do.* 1893. S. 413.
- 34) **Denucé** *Etude sur la pathogènee et lanat. de l'erys. Thèse* Paris 1885.

- 35) **Lehnartz** Erysipelas Nothnagels Handbuch. III 2. T. S 1.
 36) **Jordan**, A. f. Kl. Chir. 1891 s. 325.
 37) **Spencer-Wells** Eryoil. Kraus-Brugsch spg. Path. u. Thirap.
 Bd. II. T. 2. S. 721.
 38) **Virchons Archi**, 1880. s. 193.
 39) **Winkel** Zur Lehre von dem internen puerperalen. E. verh. D.
 Gynaekol. Ges. 1886. S. 78.
 40) **Hartmann**, A. f. Hyg 1887. VII. S. 83.
 41) **Widal**, Etude sur l'infection puerperale la phlegm. alba. Dolaus
 et l'erysipéle Thèse Paris 1889.
 42) **Nobel**, M. M. W, 1926. s. 1954.
 43) **Lehmann**, Beitrage zur Klinik d. Evyp. etc. mitt a. b. Ham-
 burger Staats krk. 1910. s. 231.
 44) **Linden**, A. f. Kl. chir 1886. S. 783.

8) 大連療病院猩紅熱研究。

- 1) **豊田、佐竹**、滿洲醫學會雜誌特別號、大正十五年二月十五日。
 2) **豊田、佐竹、武田**、Transactions of the 6th Congress of the
 Far Eastern Assoc of tropical medicine. Vol. 2. 1925. 3) **森
 脇**、醫學中央雜誌、第四七一號、大正十五年六月五日。 4) **森
 脇**、東京醫事新誌、二四八六號。 5) **豊田**、朝鮮醫學會雜誌
 七一號。 6) **豊田、佐竹、森脇、二木、武田**、滿洲醫學會雜誌、
 第六卷、第一一二號。 7) **森脇、二木**、日本傳染病學會雜誌
 第一卷、第七號。 8) **佐竹**、臨床小兒科雜誌、第一年、第三
 四號。 9) **佐竹**、滿洲醫學雜誌、第六卷、第三號。 10)
豊田、星崎、森脇、日本ノ醫界、第十七卷、第五十一及二號。

- 11) **二木、森脇**、日本ノ醫界、第十七卷、第六十二號乃至六十六號
 12) **星崎、森脇**、日本ノ醫界、(近刊)。 13) **二木、森脇**、東
 京醫事新誌、二五三三。 14) **森脇**、北海道醫學雜誌、(近刊)。